二人の転生者

黒陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の転生者

【Ｎコード】
Ｎ８３０８Ｐ

【作者名】
黒陽

【あらすじ】
ただ友達の買い物に付き合っただけのはずがその帰り道、車にひかれそうな子供をかばって死んでしまった
本来はかばって死んだもう一人があそこで死ぬ予定だったが巻き込まれて死んでしまった少年の話

プロローグ（前書き）

はじめまして、ちゃんと連載しようと思い新しく書いた作品です

プロローグ

俺たちは、どうしてこんな所にいるのだろうかそう考えながら隣でまだ眠っている東（あずまだいき）大樹を見ていると

「おぉ。ようやっと起きたか」

声のしたほうを向いてみると言葉遣いとは反比例した女の人がいたでも、その人から感じる気配？というかなんかよくわからないけど俺はそれを本能的に警戒していたら

「ふむ。そこまで警戒せんでもよいではないか」っと言って微笑んできたので少しは警戒を解いた

「あの、すみませんけどいろいろ質問してもいいですか？」

「うむ。なんだ？」

「まず、ここはどこであなたは誰ですか？」

「うむ。そうじゃなまずここは神の領域で我はお主達にわかりやすく言うと神じゃ。」

あ～神様なんだ～ならさっきのよく判らない警戒心もなっとくだな～って何納得してんだよ俺は！

というか何で神の領域なんてところ来てんだよ俺たち！！！確か今日は東の買い物に付き合わされて漫画買いに来てその後確か帰り道にボールを追いかけて道路に出てきた子供をかばって・・・・・・あれ？そこからの記憶がまったくない・・・・

「お主達は、その子供をかばって車にひかれてグチャグチャになっ

たんじゃよ」

「勝手に、人の考えてること読まないでください！！グチャグチャになったってことはやっぱりもう死んじゃってるのですね俺たち」

「あぁ・・・・すまないが即死じゃった」

「あ～そうでしたかちなみにも一個質問ですけど「なんじゃ？」子供の方は？「あの子は無事じゃよ」そうですかそれならよかったです」

「お主なんでそんなに落ち着いおるのじゃ？普通なら狂ったりすると思うのじゃが」

「確かに死んでしまったことは少なからずショックですよ。でもま、自分が死ぬ代わりにあの子を助けることができましたし最後にどんな形でも自分がやった結果がのこせましたので」
ま、でも同時に俺の人生のなかで一番やっちゃいけない罪やっちゃったけどね・・・あぁ親より先に死ぬって一番やっちゃいけないことだよな～

「お主なかなか強い者じゃなそしてとても悲しい者じゃな・・・・」

「うむ・・・・よし！お主を転生させよう！もちろんいろいろ能力をあたえてな」
え？転生？

「転生ですか？俺的には嬉しいですけどいいのですか？」

「もちろんかまわないのじゃ。もともとお主達はあそこで死ぬ予定

ではなかったしの」
「ちなみにさっき「お主を転生させよう！」って言ってましたけどあいつは？どうなるのですか？」
「うむあやつは、ほんらいあそこで死ぬ予定だったものじゃから転生は駄目なのじゃがお主はあそこでいびきまでかき始めたあやつも転生させよとでも言うのか？」
あ〜ほんとにいびきしてるな〜しかもすごい幸せような顔で・・・・
「えぇ、お願いします。あんなのでも大事な友達なので駄目でしょうか？」
「う〜ん。お主が転生する際欲しい能力５つ願いをかなえる予定だったがそれを１つにすればかまわないぞ」
「それくらいでしたらそれでお願いします「うむわかった。所でお主は、どんな世界に転生したいのじゃ？」あ〜その辺は、あいつが起きてから話しあいます「あい。わかった。あやつが起きるまで茶でも飲んでまつとしよう」
「そうじゃ。お主の名前をまだ聞いておらんかったな」
「そうでしたね。俺の名前は黒澤蓮（くろさわれん）といいます」
・・・・・・・・・・・・５時間経過・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・
おぃこいついつまで寝てる気なんだいい加減寝顔こいつの寝顔見てたら腹が立ってきたし強制的に起きてもらおうか・・・・

神様のほうはもう限界みたいだし・・・・・
そう思い東の腹めがけて拳で殴ぐった（もちろん手加減なしの全力
で・・・）

「ぐは！！！！！！！！！」そう言ってやっと起きた

「やっと起きたか東（バカ）」

「おぉ～マイフレンド～レン～もう少し優しく起こしてくれよ～」「
うん。無理」（スマイル１００％）
「そんな、いいスマイルで否定するなよ・・・・所でここどこだ？
「そのことについて説明するからお前はとりあえず聞け後で質問タ
イムとるから「あいよ～」

・・・・・・・・・・・・説明中・・・・・・
・・・・・・・・・

「っというわけだわかったか？」「おぅ！よくわかったぜ！つまり
どんな世界にでも転生することができるというわけだな！」
あ～駄目だこのバカ欲望丸出しだはやくなんとかしないと・・・・
とか考えてると東が

「ところで神様質問だけどさ～漫画とかの世界でもＯＫだったりす
る？」「もちろん大丈夫じゃよ」
へ～漫画の世界でもいいんだ～ならどの世界にするかな俺は漫画と
か詳しくないからかなり範囲せまいな知ってるの東方とラノベ関係
だけだし・・・・

「ならネギま！の世界に転生させてくれ！」（あのバカなに勝手に進めてるんだよ！俺まったくわからないし！）

「なぁ～なぁ～レンいいよな！いいよな！」（ダメだ話し聞く気まったくないなこいつこいつネギまのこことかなりすきだしな～今日も買いに行った漫画本それだったし・・・）

「あ～いい世別になら能力とかも決めちまいな」「おうそうだな！ならＦａｔｅの無限の剣製を使えるようにしてくれ！転生する時期は大戦中で頼みます！「あい、わかった。一応魔力と気はそれなりに高くしておくからの」ありがとうございます！」

俺はどうしようかな～

「そうじゃ一応東はネギまがいいみたいじゃが蓮のほうはあまりしらないみたいじゃから蓮の知ってる東方と混ぜた世界にしておくからの？」やった！ならおれでもなんとかなる！

「なに！レンお前ネギましらないのか！ならこれからじっくりおしえ「少し黙ってろ！！」ぐは！！！・・・・・・」きれいに右ストレートが決まってバカが気絶した・・後悔も反省もしない！！

「やっと静かになった・・・「お主もなかなか容赦ないの～」いえいえあいつ限定ですよ」

とりあえず東方も混じってるなら少しくらいチート能力でもかまわないよな・・・

「決まったようじゃな」

「はい。俺は　ありとあらゆるものに書き足し上書きする程度の能

力　でもちろん制限なしでお願いします」

「ふむお主なかなかめざといなこれならじしつ1つの能力だけでも増やすことが可能じゃな！なかなか面白いの。よし許可じゃ！じゃがお主の力はあまりにも強すぎる、だからお主はその力を制御する修行込みでお主達を送る世界のネギまの原作開始の4億年ほど前に行ってもらう！」

「4億年前ですかわかりました」

「うむでは、飛ばすぞちなみにお主だけは容姿を変えておくからの「え？」安心せい悪いようにはせん後おぬしの名前はもう使えんから新しい名を考えておくのじゃぞ「は！？」では、行くがいい！！」

「ちょっとまてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっぇぇぇ！！！」

足元に穴が開いて落ちていった・・・・

「蓮お主の2度目の生に幸あらんことを・・・・・」

「とりあえず原作開始まで東のほうは眠ってもらうかのう～」

そういい神は東を押入れのようなところに放り込んだ・・・・・・

プロローグ（後書き）

最低でも週１で投稿しますのでいろいろご意見ありましたらお願いします！

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｂｅｄ．ｂｌｏｇ６９．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ－ｅｎｔｒｙ－１２００．ｈｔｍｌ

とりあえず現状確認と能力（前書き）

続きを書いてみました

とりあえず現状確認と能力

神様に穴に落とされたと思ったらなんか森の中にたっていた・・・
落とされたから空の上から落ちるもんだと思ったけど・・・

「うん。４億年前に無事ついたみたいだけどこれからどうするかな～それにしても目線がちょっと低いような気がするな（それに今までの名前はもう使えないしそっちも考えないと・・・・）」

それにしても４億年前って想像通りだな～図鑑で見たことあるような植物ばかりだっと周りの景色を見て思った。

「とりあえず能力の確認と自分お姿を確認でもしておくかな・・・・・」

容姿の確認からしてみますかでも鏡ないんだよな～あれ？自分のすぐ近くに手鏡と手紙が・・・・

ちゃんと転生は成功したみたいじゃな
容姿の確認できるように鏡をおくっておくぞ
ちなみに容姿に関してはワシの趣味じゃから
気にせんことじゃしっかり修行するのじゃぞ
ｂｙ神様

あの神様軽いな～とりあえず容姿はっと思い鏡をみてみたら・・・・・・・・・

「なんだこのちっこい子供は！！！！！」

髪は銀色になってるし目は紅だし背に関しては１４０ｃｍ位だし！
（道理で目線が低いと思った）顔はどう見ても女だし・・・・神様

の趣味って・・・あれ？もう一枚手紙が

ＰＳ：孫というものが欲しかったからその容姿にしたのじゃ！

だからって男の娘にするなよな・・・・はぁ～いいかそれより今は能力のことだな

大昔だし変な病気になるかもしれんからどんな環境でも対応できる用にしておかないとなならよし

「うんじゃ。能力対象を俺で効果をどん環境状態でも適応する　よし、成功みたいだなだけどこの能力使った後なんだかすごい疲れるな。そういえば俺って何を消費して能力発動してんだ？」

うん。修行していけばそのうちわかるだろう！後１回くらい能力使って戦闘向けのやつも書きたさないとな～なんかいいのあったかな今の俺だと武器とかもないし武器生み出す系のがいいんだけどＦａｔｅとかだと魔力がかなり必要になってくるしなまだこの能力になれてないから練習できそうなものがいいんしな～う～ん・・・・

「うん？そうだあれならまだましか　能力対象：俺自身　効果：己の悲嘆を武器化」

うん、自分自身の心を武器化することにしました！元ねたは境界線〇の〇ライゾンです・・・

とりあえず。俺の悲嘆を武器化してみますか。形をイメージしなんだか哀しみをイメージして通し道歌を歌った・・・・・・・

「　通りませ　通りませ　」

なんでだろう

「　行かば　何処が細道なれば　」

なんでか心の中に哀しみが溢れてくる

「　天神元へと　至る細道　」
そっか・・・俺は・・・
「　御意見御無用　通れぬとても　」
俺は・・・あの時神様に言われた時から・・・・
「　この子の十の　御祝いに　」
今度は自分の目に熱を感じていた
「　両のお札を納めに参ず　」
・・・・声は徐々にかすれてきた・・・・
「　行きはよいなぎ　帰りはこわき　」
目からはいつ決壊するかわからないようなダムのように涙をためていて・・・
「　我が中こわきの　通しかな・・・・・・・」
その言葉を最後に少年の手にはその少年には不釣合いな大きな黒と白の二色の色がある剣”悲嘆の怠惰（リビ・カタスリプシ）”を両手で抱きかかえるかのようにして頬に一筋の涙が流れたそれが合図だったかのように少年は己の感情をすべてはきだした・・・・

とりあえず現状確認と能力（後書き）

続きを書いてみました

主人公の名前まだ決まらん・・・・

あ～泣いた泣いた。あれから大体2日か3日位たったかな？もう時間間隔わからんけど、悲嘆の怠惰を発動したらまさか自分の悲嘆がすごい勢いでこみ上げたときはビックリする暇もなく泣いたな～あの後散々ないた挙句疲れてにちまったし・・・・・そんな失敗もあったが悲嘆のほかの感情を武器化してみたけどなれたのかあの時見たいにはならなかったな～

一応武器化した感情は

嫌気の”怠惰な嫌気（アーケディア・カタスリプシ）”と暴食の”飽食の一撃を形状（フィオゴス・ガストリマルジア）をそれぞれ片翼の形にして両方常時展開してみたら最初の具現化の時は力がなくなる感じはしたが展開してる最中は力を消費しないことがわかった。っと最近になってわかったことだけど俺の力が魔力か妖力か霊力なのかわからなかったから能力使って把握できるようにしてみたら・・・

魔力が4割　霊力が6割って感じで分かれてたんだよね

そんで”悲嘆の怠惰　”通常駆動の刃先に映した対象をそぎ落とし使ってみたけどこれは全然余裕でなんとかなったけど”超過駆動”も大丈夫だろうって思ってやってみました・・・・・かなりつらい・・・・超過駆動の掻き毟り消費が悪いですね魔力が1割で霊力4割持ってかれました・・・・今のままじゃ辛すぎるから魔力＆霊力が増えるまでは禁じ手にしておこう・・・・年は能力使って不老にしてるし何でか神様が特典つけてくれたみたいで＋不死入ってるみたいだけど・・・・

え？なんでわかるかって？そりゃ～この前恐竜？（種類までは知らん！）に襲われたとき確認できました。まさか、脇腹思いっきり噛まれるとは・・・・ま、それはさておき

「これからどうやって修行してくかだよな・・・。もう俺の攻撃手段もワンパターンになってきてるし同じ生物ばかり相手にするのも疲れるし・・・・・。なんかいいほうほうはないかな～」

いつものパターン　襲われる→嫌気の通常駆動の己の嫌気で拘束→暴食の通常駆動（能力はちょっといじって悲漢の攻撃にも対応するようにしておいた）→悲漢の砲撃→敵内部破裂っとこんな感じだったりする・・・・

「とりあえず大罪武装（ロイズモイ・オプロ）使わない戦い方も練習してみるか・・・。いつも混ぜて使ってるし魔力は回復系とサポート系のやつでも覚えるか霊力は・・・・弾幕と結界やれるようにしておくかネギまの原作開始までまだまだ年数もあるし試したいことは全部ためしておくか・・・にしても・・・・は～1人ってこんなに寂しいもんなんだな～東と再会するまでにやることっていったら名前決めることくらいだし・・・あ～もぉ！なんだか意味もなくいらいらする！そういえばあいつ大戦中とか言ってたな・・・なら！再開したらあいつの敵にでも回ってみるか今までのあいつへの仕返しもこみで！そうと決まれば全力で練習&やりたいことやるか！」

そう、高らかに宣言した見た目少女？幼女？（少年＋男の娘）は笑いながら森のなかに消えていったとさ・・・・この付近の今まで襲ってきていた生物が急に見た目少女？幼女？（少年＋男の娘）をみただけで逃げ出すようになったことと一部森が焼け野原になったのは別の機会にでも・・・・・

妖怪になっちゃいました

あれからどれほどの年月がたったかは俺はもう覚えていなかった最初のうちはちゃんと数えたりしてたけど年がたつにつれてそれがただ無意味ことだと思い始めて数えることをやめていた。それにいろいろとやりたかったこともだいぶやることができたので結構満足していたのもあったりするそれに、最近気づいたことだが俺がどれくらいたったかは分からないがたぶん長生きしすぎたせいで妖力を使えるようになっていた。ついに俺、人間やめちまったかっと思ったけど不老不死のあたりでもう人間じゃないかと納得してしまった。うん、俺だいぶ精神的は成長したな～～うんうん。でも、背のほうはまったく伸びる気配がないんだよな～それどころか背少し縮んでないか？と思ったなんでかそんな気がしてならない・・・目線が少し低くなった気がしてる・・・うん。。キニシナイキニシナイキニシタラマケダ・・・っとそうだ一応俺は、魔力と霊力は結構増やすことに成功した。気かなりの量を使うことができるようになったけど妖力に関しては最初からすごい量だと思った。あれか？長生きすると妖怪は強くなるって妖力が増えるってことなんだな・・・ってそれ考えると俺どんだけ長生きしてんだよ・・・・ま、それはさておき魔力のほうは俺の知識にある魔法をあらかた試したけど使えることが分かったけどほとんどはＦＦとかの魔法を使うだけになりそうだな～詠唱あるやつだとメンドクサイんだよな～詠唱魔法って最初はかっこいいから使うかって思ったけど実際やるとめんどくさかった・・・・でも、一部はかっこいいので使っています・・・霊力のほうだけど弾幕は制御が結構つらかったな～今でも完璧には制御仕切れてないしな。結界のほうは、自分に妖力があることがわかった時全力で練習したよ・・え？何でってそれはもちろん妖力がもれても困るしこれからのこともあるしゆっくりしたい時とか結界晴れたほうがいろいろと便利だからですね。後、俺がびっくりしたこと

は翼で展開してる両翼の”嫌気”と”暴食”がそれぞれ3枚になって合計で6枚羽になってました・・・なんでだよ・・・そんな日が続いたりしたので最近はすごい暇になったから俺の名前を考えたでも苗字しか思いつかなかったんだよな～せめて神様が名前くれればよかったのにな・・・とりあえず今は「四季咲」っとだけ名乗ることにしたもうこれもメンドウだったので刀語のあの人からとりました・・・・

「はぁ～ほんとすることないな～剣術の練習するにも相手いないとやるきもでないしな～・・・・・・・うん？そうだ俺って俺以外の妖怪見たことないな～（普段結界はってるし）探してみるかそれで襲ってくるようであれば剣術の練習用の的にでもしてしまえばいいか・・うん！よしさっそく行くか！」

そう宣言すると四季咲は6枚の羽を羽ばたかせ空に向かって飛び立った・・・

「うん～♪空飛ぶのって結構気持ちいいな～俺高いところかなりだめだけど自分で飛ぶ分には怖くないな～♪っと、ん？」

ある程度空を飛んで移動していると不意に視線を変えて下を見るとなんだか化け物？あ～妖怪か～を見つけたけどなんだか何かを追いかけている感じだなと思いあいつらの追いかけている方をみるとそこには銀色の髪女性が逃げていたってあれって八意永琳！って思い見ていた何でこんな昔に八意永琳がって思ったそれになんで永琳が妖怪程度で逃げてんだと思いけど追いかけてる化け物達の数多すた・・・種類はわからないけど大きさは大小さまざまなものばかりで中には中級くらいのまでまざってる感じがするそんな事を考えているとその化け物の集団の中から妖力はそれほど強くないモノが飛び出したぱっとみ速さにのみ特化したようなものが永琳に追いつき後ろから大きく禍々しい爪で永琳に向かって振り上げていた永琳はそれをみて目を全力で閉じて諦めてしまったかのようになった。俺は

それをみて”悲嘆の怠惰（リピ・カタスリプシ）”を取り出しこの武器の超過駆動を使い、「掻き毟り」を発動させて撃った・・・・そして、油断していたせいかもしれないがまた悲嘆の感情が流れてきたがずっと発動状態にしていたので前ほどではなかったが涙が流れていた・・・そして、掻き毟りは永琳に襲い掛かっていたモノに当たり消滅した・・・それを見て永琳も怯えているようであっがた俺は、残りの化け物どもを涙を流しながら見つめた・・・・・

初めての実戦

ｓｉｄｅ永琳

今日私は、薬の材料になるものをとるために森にきていた。けどその時妖怪に見つかってしまったいつもならどうにかなったけど今日私が見つかった妖怪達は、数が多すぎた・・・小数であればどうにかなったけど数が多すぎただから私は今全力逃げている。そんなとき後ろから迫ってくる妖怪達の中から何匹かの妖怪が飛びだしてくるのがわかった私は、不意にその方向を向くとそこには大きくて禍々しい爪を振り上げてきた妖怪が目の前にいた・・・私は、こんなところで死ぬ？そう思ってしまい目を閉じた・・・けど、妖怪の爪は私にあたることはなく代わりに妖怪の断末魔の叫びが聞こえてきた「ギャァッァァァッァッァァァ！！！」思わず目を開いて見てみたらそこには何か爪で掻き毟っているかのようなものが妖怪にあたっていた。そして、その掻き毟りが消えるとあたった妖怪も消滅していた私は、その掻き毟っているものを見ていたら恐怖よりなぜかそれは「悲しい」っと呟いてしまっていたそれほどまでに今見たものからそう感じとってしまったのだ・・・・私がそう感じると妖怪達は掻き毟りがきた方を睨んでいる物もいたそして、なぜか私が見てもわかるほどにまで怯えている妖怪達もいた妖怪達がここまで怯える者が私の後ろにいると思うと私は後ろを振り向くこともできなくなり妖怪達だけしか見ることができなかった。不意におびえを見せていた妖怪達は我先にと逃げ出そうとしていたがまた私の後ろから掻き毟りの爪が放たれてきた・・・それもさきほどより大きなものだったそれが逃げ出した妖怪にあたると今度は断末魔の叫間もなく妖怪達は消滅してしまった。逃げ出さなかった妖怪は大きく咆哮し私のことなど忘れたかのように私の後ろに向かっていったそして後ろから声が聞こえてきた「私の嘆きの中で静かに眠れ・・・・・」その声が聞こえた後すぐに静かになってしまったそれで私は、ゆっ

くりと後ろを振り向いて何があったのか確認してみたそこにはもう生きている妖怪達はいなかったそこに、あったものは首だけを切り落とされた妖怪達とその妖怪達の首を切り落としたであろう6枚の羽を生やしているぱっとみ１４０ｃｍ前後の少女？少年？がたっていたけどどうしてそんな子供がこんなことができるのかと思うとその子が持っている剣を見た・・・それは、その子にはとても不釣合いなほど大きな物だった・・そしてその剣からも悲しいとしか感じ取れなかった。剣から子供の顔をみるとその顔からは空を見ながら涙が流れていたことに気づいた・・・・・

ｓｉｄｅｏｕｔ永琳

ｓｉｄｅ四季咲

俺は、超過駆動を使ってから化け物どもを見ていると何体かの妖怪達は咆哮し俺に敵意を剥き出してしてきたがそれ以外の妖怪はなぜか俺を怖がっているかのようにし逃げようとしてしていたのでもう一度砲撃をした・・・・その砲撃で逃げようとしたモノだた物は消滅した。それが合図になったかのように残りの妖怪達は俺に向かって怒りの方向を上げ俺に襲い掛かってきた。俺は、悲嘆の怠惰を構えて妖怪達に向かって

「私の嘆きの中で静かに眠れ・・・・・・」

そう呟いた・・・・

それからはワンサイドゲームになっていた。身体能力もかなり上がっていたので一瞬で妖怪達の懐に飛び込み悲漢で妖怪の首を切り落とした・・・そして首からは赤い雨が降ったその雨が俺の羽にかかり赤く染まるのをみると先ほどよりさらに早く妖怪に切りかかり妖怪達が叫びを上げる暇もなく先ほどまで生きてたであろう１０体位の妖怪はすべて首をなくしたただの物言わぬ死体になっていたそして俺の羽は赤黒く染まってしまっていた・・・・・それを見ると俺

は空を見つめていたそして無意識に涙が俺の頬を流れていた・・・・・

続　初めての実戦

ｓｉｄｅ永琳

私の目の前にいる子供がどの位の間空を見上げたまま涙を流していたのかその子が流す涙は悲しいから流しているというよりは悲しみをずっと我慢して無意識に涙がでているような感じな状態だと思った。この子はさっきからずっと声をだして泣いていなかったからそう思ったのかもしれないけれどその涙をみていたらなぜか”孤独””さびしい”そう思えてならなかった。

私も無意識にこの子

「あなたはなぜ泣いているの？」

そう問いかけてしまった。その事に気づいたのか私の方を見つめてきてやっと声をだしたかと思うと

「えっと・・・あなたはどなたですか？」

そういえばまだ名前を言っていませんでしたね

「私の名は、八意永琳といいます。さっきはありがとうね。あなたの名前も教えてくれるかしら？」

ｓｉｄｅｏｕｔ永琳

ｓｉｄｅ四季咲

あぁ～全然剣術の練習にならなかったな・・・・・それにしても悲漢を全力で使おうとするとやっぱり涙が無意識にでちまうなほかの感情はきちんと制御できてるみたいなんだがなどと考えていると

「あなたはなぜ泣いているのですか？」

不意に永琳がこんな事を聞いてきた。あ、まだいたんだ。もう逃げてるものだと思ったんだけどな～

ま、とりあえず質問にこえようかな、でもいきなり名前呼ぶと怪しまれすしここはまずは

「えっと・・・あなたはどなたですか？」

ま、この返答がぶなんかな～

「私の名は、八意永琳といいます。さっきはありがとうね。あなたの名前も教えてくれるかしら？」

やっぱりあってたか～・・・・う～ん名前まだ決めてないけど名乗っておくか・・・

「私は、四季咲」

「四季咲ちゃんでいいかな？「違う。こんな見た目だけど男です。ちなみに四季咲は苗字で名前はないです・・・」ご、ごめんなさいねって名前がないの？」

「えっと四季咲君いくつか質問いいかな？」

「いいですよ」

「じゃ、君のご両親は？後、君はなんでこんな森の中にいるの？」

そう聞かれてのでここは正直に答えておくことにした

「両親はいないです。ここには昔から一人でいました」

そう答えておくとすごい驚いたような顔をされた。ま、それもそうか見た目が子供でこんな森の中で一人で暮らしてるってきけば

「両親がいない？それに昔から一人で？君はいつからどうやってここにいるの？それにその剣と羽についても教えてくれる？」

「いつからここにいるかと聞かれるとそうですねあんまし覚えてないんですけどたぶん数百年か数千年くらいはここに住んでます。いつもは結界を張ってるので今日みたいに外にでたのは初めてです。そしてこの剣と羽は私の”感情”です。だからさっきみたいに涙が無意識にでちゃうんですよ・・・・・」

「！？・・・・結界を張ってってそれに数百年か数千年・・・君はいえあなたは不老みたいねそれにあなたの剣と羽が感情とはいったい？「私の能力を使って感情を具現化してるだけですよ」あなたも能力があるのね・・・それはどんな能力か教えてくれる？（ダメもとで聞いてみたけど教えてくれないでしょうね）「私の能力は”ありとあらゆるものに書き足し上書きする程度の能力”です」！？教えてくれてありがとう。でもすごい能力ね。その能力で不老に・・いえ不老不死になったの？」

「生きて行くにはこうしないといけなかったですしね。永琳さんも能力ってありますか？」

「ええ。私の能力は”あらゆる薬を作る程度の能力”よ」

「便利そうな能力ですね。ということは薬草とかを今日は探しにき

たのですか？」

「えぇ。そうよ今日はそのつもりだったけどまさか妖怪の群れにでくわすなんて運がなかったわ。あなたが助けてくれなちゃどうなってたかほんとうにありがとうね・・・・でも能力ならあなたの能力のほうが便利でしょ？書き足すってことは私の能力も使えるようになるのだし」

「そうですね・・・。あ、そういえば今日は薬草はとれたのですか？」

「え？・・・あれのせいで全然採れてないわ。だから明日また採りにくるつもりよ」

「なら私が永琳さんの護衛役やりますよ？「え？いいの？私としたら助かるけど」ええかまいませんよその代わりというわけじゃないのですけど永琳さんの能力を私に書き足していいですか？「それくらい別にかまわないけどそんなことといちいち私に聞かないでやったほうがよかたんじゃないの？」でも、これは永琳さんの能力ですしね」

っといい俺は少し苦笑してみた

「／／／／／／っそ、そう律儀なのね（急にそんな風に笑うなんてずるいじゃない）」

ん？紅くなってどうしたんだ？

「どうかしました？」そう思い背伸びをして顔を近づけると

「／／／／／／／！！だ、大丈夫よ」

「ならいいのですけど・・・っとそうだ森の入り口まで送りますましょうか？」

そう聞いてみると

「大丈夫よ。明日は・・・そうね森の入り口で待ち合わせでいいかしら？「大丈夫です」ふふふ、なら明日はよろしくね」

そう言うと永琳は、まだ少し顔を紅く染めた状態で森の入り口まで歩いていってしまった

「よし・・・これで永琳の能力を使うことができるな・・・・って薬草の知識ないな俺ってはぁ～明日そのあたりも聞かないと・・・それにそろそろ簡易的な家作らんとなさすがにそろそろ外で寝るのも首が痛くなってきたし」

そう考えながら俺は、空に向かって飛び立った・・・・

平凡な日

俺は、約束通り森の入り口付近の木の枝に座ってまっていると永琳がやってくるのをみて枝から降りた

「あら。もうきてたのね」

「一応早めにきて周辺に妖怪いないか確認しておいた」

「そう。じゃ、今日はよろしくお願いね？」

そんな感じで森の中に入り薬草などの薬の材料を採取していった。俺も材料をとりながら薬草についていろいろと話を聞きながら知識を取り込んでいた。後で、何個か作ってくれることになったのはこれはすごい助かった。能力は確かに使えるようになったけど知識がなくてためしに作った物は失敗作ばかりだからだ・・・・

「そういえばあなたは、この森のどこに住んでいるのかしら？」

うん？そういえば俺っていつも結界張って洞窟か木の根あたりで寝てるだけだな～

「いつもは結界を張って洞窟の中か木の根で寝てますよ？」

そう言うとかなり驚いたような顔をして

「！？家はなかったのね・・・・・・・それじゃ、あなたがよければ一緒に住まない？」

は？何でいきなりこうなるのかな・・・・

「え？いえさすがにめいw「迷惑でもないし。それに毎回入り口で待っててもろうのもなんだしそれに薬の知識なら教えてあげることもできるわよ？」・・・・・せめて最後まで言わせてくださいよ」

でも知識を教えてもらえるのはかなり大きいな・・・・・

「あら。ごめんなさい」あまり詫びてるような感じをださずに笑っている

「それでどうかしら？」

「分かりました。断っても無駄みたいな気もしますしよろしくお願いしますね。永琳さん」

「こちらこそよろしくね？でも、永琳さんって呼ばなくて永琳って呼び捨てで呼んでもらえるかしら？」

「わかりました。これからよろしく永琳」

「／／／／。ふふふよろしくね。そうだあなたまだ名前がなかったのよね？「そうですよ」なら私が名前をつけてあげるから楽しみにしてなさいね」

「じゃ、お願いします」

そういうと嬉しそうにまた薬草を探しはしめた・・・・

平凡な日々

俺が永琳の家で暮らすようになってからそれなり年がたった。俺がここに住み着いてからというもの毎日俺は薬草のことについて調べたりするか森で新しい戦い方の練習をこっそりとすることを繰り返していた。え？なんでこっそりかって？永琳は俺が戦うことになぜか反対みたいだ・・・なんでかなぁ～それでも一応練習はやってるんだけどねその結果、俺の翼の羽を敵に向かってとばすことができるようになったもちろんとばしてる羽は、翼から離れるとすぐにクナイみたいに鋭くなって相手に刺さる感じだ後は、”悲嘆の怠惰”の形を変化させることができるようになったけどこれは結構感情が逆流してくるからあまり使いたくない技だ・・・・・ついでに魔法も攻撃系も少しは増えた

「鈴？さっきからどうしてたの？」

一応、俺の名前が決まりました。四季咲　鈴・・・なんだから女の子みたいですねって前に聞いたら

「あら？”鈴”はダメかしら？あなたを見てると小さくてかわいいしぴったりだと思うわよ？」

そう言って笑いかけてきた。。。。小さいくてかわいい・・・俺の心に９９９９９ダメージ・・・・・

っとそんなわけで俺の名前は鈴になりました。

「いえ。何でもないですよ～。それにしても家に戻ってくるなんて久しぶりですね？」

そう最近というかかなり前からここはかなりの文明が発展した。そのせいで永琳はここに帰ってくることは少なくなり変わりに研究所に篭るようになってしまった。ま、俺は基本外には薬草取りに行く時と技の練習のとき以外は外にはでてないというかでれない・・・外出る時も結界はってるし・・・一応俺の背中の羽しまえばいいんだけどしまってしまうとまた具現化させるとき感情が逆流してくるのもやっかいだから基本は家で留守番係をしてます。っとそれはさておき

「えぇ。研究がやっと終わったから帰れたのよ？そういえばあなたも何かやってたみたいだけどそれは終わったの？」

「あ～やっぱりわかりましたか。大丈夫ですよただちょっと私のガーディアンを作ってたんですよ。そういえば永琳は何を研究してたの？」

「ふ～んガーディアン何か作ってたのね。私はそうね宇宙船を作ってたのよ「宇宙船？？」えぇ。そうよ月に移住するためのね「へぇ～そうなんですか～」もちろんあなたも月に行くのよ？「え？」まさか鈴だけここに残してなんかいかないわよ」

そう言って笑いながらいってくれるのは嬉しいけど俺一応妖怪？なんだよね・・・

「えっと私は一応妖怪？見たいな物ですよ？それにこの格好じゃ・・・」

俺はそう言うと何がおかしいのか

「ふふふ。そのことならここに住んでる人達みんなしってるわよ？」

（え？なんで知ってるんですか！？）

「不思議そうね。鈴がたまにこの町に近づいてくる妖怪を倒してくれていることが上の人達にバレテいるのよ？それに鈴が私を裏切ってここにいる人や町を攻撃なんてしないこともちゃんと説明してあげたしね」

いつそんなことやってたんですかこの人・・・・

「ついでに鈴が戦っている所の映像をテレビで流してたりするのよ？「はぃ！？」あ、でもここだけ鈴にバレないように見えないようにしてあるけどね♪」

「はぁ～。ということは私はもうこそこそしたりしなくてもいいってことですか？」

「えぇそうよ。だ　か　ら」

「な、なんですか？」

「これから久しぶりに一緒にどこか行きましょ♪～」

「え、いいですけど私はまだ外はあまりわからないので「もちろん私がいろいろつれていくわよ」はぁ～ならよろしくお願いします」

あぁ～こんな生活っていいな～俺はそう本当に心の憶測から感じていたこの生活がずっと続けばいいのにと・・・・・でも、この生活が残りあとわずかだなって俺は忘れていた・・・・

別れ・・・・・・

俺は、あれからもうこそこそしないで外を自由に出歩くようになった。そのせいってこともあるけど近くに住んでる子供は俺を見ると羽を触りにくる（まるで昔のパンダみたいだ・・・）そんな感じで俺はすごしている。でも最近妖怪達が姿をまったく見せなくなっていることにすごく嫌な予感がしていた。

町の人達は、平和になってよかったと笑いあっているがあいつらはそんな簡単に逃げるようなやつらじゃないと俺は考えていた・・・・っとそんな嫌な考えをここ毎日しているととなりから俺の肩を叩いてくる警備員のお兄さんが俺に話しかけてきた

「そういえば。四季咲さんって今日最初の月移住用の宇宙船に乗らなくてよかったんですか？」

そう今日は、最初の宇宙船が月にむかって打ち上げられる日だった今日のはお偉いさんや開発の要になった人物達が乗るものだったもちろん永琳も乗っている。永琳やお偉いさんは、俺も一緒に乗って行こうと誘ってきていたが俺は、最近の嫌な予感がどうにも腑に落ちなかったからこれを断って最後の便で行くと行ったら最初は反対されたがなんとか説得して納得してくれた・・・

「あぁ、私は最後の便でいいんだよ～そういうお兄さんもわざわざ最後の便に乗ることにしたって聞いたけどなんで？」

「俺は、というか警備の連中のほとんどは最後の便に変えてますよ。「はぁ！？」だって四季咲さん見た目完璧子供じゃないですか？そんな四季咲さん残して俺達だけ宇宙に上るわけにはいかないですね」

そう言って笑い出した・・・

「まったく名に考えてるんですか・・・。その前に見た目子供って言わないでください「・・・・・四季咲さんひとつ質問いいですか？」何です？「・・・・背って伸びてます？」・・・・・・・・・もちろん伸びてますよ・・・・・・２ｍｍだけですけど」

「あぁ～そのすみませんでした・・・・。あ、そうだ今日はほかの警備の連中誘ってどこか食べに行きましょう？ね？だから空見ながら黄昏るのやめてくださいよ」

「は～わかりました・「ＰｉＰｉＰｉ」っとすみません。通信です」

相手はもちろん永琳からだ

「永琳どうかしましたか？」

「うんうん。ただもうすぐで打ち上げだからその前に鈴と話しておこうかなって思っただけよ」

「そうですか」

そう答えるとよこに立ってる警備のお兄さんは俺を見ながら笑っていた

「そうそう。鈴伝えておきたいことがあるのだけど「なんですか？」う～ん。やっぱり後でにするわ伝えておきたいことはあなたにだから」

そう言われて、隣のお兄さんはさらに俺をみてにやけていた

「だから。あなたが月に来たときに言うことにするわね♪」

「あ、わかりました。なんだか分かりませんけど楽しみにしてますね。それと私は永琳に渡したい物がありますから」そういって笑いかける

「／／／／／／／／／／えぇ、楽しみにしてなさい。そっちも楽しみにしてるわよっとそろそろ打ち上げだから切るわねじゃ、また月で」

「えぇまた」そう答えると通信が切れた。それと同時に宇宙船が打ち上げられた。その光景をみているものは歓喜の声を上げている。となりのおにいさんはというと

「いやぁ～四季咲さんは幸せ者ですね～」といいながらにやにやしてきた。一発殴っておこうかな

「永琳には感謝するばかりですよ。俺なんかがここにいれるのは彼女のおかげですし」

「はぁ～四季咲さんってあんがい鈍いんですね・・・・」と言い哀れみの目を向けてきた

「何が鈍いんですか」

そう言うとまたため息をして「ご愁傷様です。八意様・・・・」俺が何をしたんだよ・・・・

っと俺はそれからこんな感じで充実した日々をすごしてついに俺達の乗る番がやってきた最後の宇宙船に乗る連中は俺を抜かすと警備の連中、軍の一般兵さんだ最後まで防衛要員として残っていた人た

ちだけで一般人はもういなかった

「やっと俺達の番になりましたね。四季咲さん」

「あぁ。そうですね。っと前から言ってると思うのですけどいい加減私に敬語使うのやめてくれませんか？なんだか落ち着かないですし」

「いやいや。それは無理でしょうというか「様」付けじゃなくしただけでもかなり限界なんですよ？だって四季咲さんこの町の人にとってもう守り神みたいな人ですし。なぁ？みんなそうだろ？」

「「「「「そうそう」」」」」

そう答えるのは今宇宙船に乗っている人全員だった・・・っとどうりで最近新しい力が出てると思ったこれって神力だよなほかのに比べてまだすくないけど・・・・

「ちなみに守り神ってどこかに祭ってたりはしてないですよね？」

「もちろん祭ってますよ？」

本人も知らないうちに祭るなよ・・・・・

そうため息まじりに周りを見るとみんなやっと家族と会えると思うと笑いあったり会ったら何するかなどを話し合ってる人たちばかりだ「俺無事に月にいけたら彼女に結婚を申し込むんだ！」とか「好きだった娘に告白するんだ！！」とか聞こえてきた・・・・あんたらそんなこと言うと死亡フラ「おぃおぃお前らそんな事言ってると死亡フラグたつぞ」といいい大笑いする俺がよく話をする警備のお兄さんって人の台詞とらないでよ・・・とか考えてこの暖かい場に

一番似つかわしくない音が聞こえて

警報の音が聞こえてきた・・・・・・

その音を聞くとさっきまでの空気は完璧になくなっていたモニターにだされる映像を見ると今までどこに潜んでいたのか分からない妖怪の大群が映し出されていた・・・・それを見たものの顔は絶望にそまっていた・・だけど俺は、妖怪よりその群れの真ん中にいる馬鹿でかい竜に目がいった・・・・こいつは周りのやつらなんかより異常なほど強い・・・そう感じたこいつが最近俺の感じた嫌な予感なのか！そう思っていると

「い、いそいで迎撃しなければ！」「どうやってだよ！あんな数無理にきまってんだろ！」「こんな所で死にたくない！！！」絶望に包まれた

今、俺ができることをするしかない・・・・そう決めると俺は、隣に座っているお兄さんに小さな声で頼みごとをした

「・・・これを永琳に渡してください・・・・」そう言うとお兄さんは俺を止めようとしたけど俺の目を見ると目を赤くしながら「はい・・・・」ただそう答えてくれた。俺はほかの人には気づかれないように宇宙船を抜け出しそして俺は両翼の翼１０枚を羽ばたかせたながら呪文詠唱を始める

「灰は灰に――――

――――塵は塵に――――

――――吸血殺しの紅十字！！！！！」

俺は詠唱をし炎剣を爆発させて広範囲を吹き飛ばした。今の一撃でかなりの数が減った。魔力と霊力を混ぜて撃ったせいでもあるがこれ少しは楽になった。俺は、宇宙船が宇宙に上がるまで守り抜けばいいただそれだけでいい・・・そう自分に言い聞かせさらに詠唱をする

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ

魔女狩りの王(イノケンティウス)！」

その炎が妖怪達を焼き尽くしていく・・・・声を上げることすらできなくなっていく物達・・・俺はただそれをながめていた・・・

『ホォ～御主ナカナカヤルノ』

その声が聞こえてくるほうを向くと竜がいた・・・

「あれを食らって無傷ですか・・・・（やっぱり強い）」

『マッタクノ無傷トイウワケデモナイガノ』そう言い体についているやけどをみせてくる

「あれをその程度で済ませているのですか。まったく強いですね」

『御主ホドデハナイ、』

「物は提案ですがここは引いてはもらえませんか？」

『ソレハ無理ナコトジャナ。我ハ戦ニキタノジャ。ホカノ連中ハシラヌガナ、マ、モウ残リハ我ト御主ダケジャガナ』

そう答えると竜は笑った・・・

「なら私は・・・いや俺は、後ろにいる者達を守るただそれだけだ！！！」

『ホゥ～御主我ト闘ウトモウスカ・・・面白イ御主名ヲナントモウス」

「俺の名は、鈴。四季咲　鈴！！ここの守り神だ！！！」

『守リ神ノ鈴カ我ニハ名ハナイガ種族ハ龍樹ジャ』

俺達は名乗りを済ませると俺は、今俺の後ろにいる者達を守るために通し道歌を歌った・・・・・・

「　通りませ　通りませ　」

「　行かば　何処が細道なれば　」

「　天神元へと　至る細道　」

「　御意見御無用　通れぬとても　」

「　この子の十の　御祝いに　」

「　両のお札を納めに参ず　」

「　行きはよいなぎ　帰りはこわき　」

「　我が中こわきの　通しかな・・・・・・・」

（絶対に負けるわけにはいかない！！！！）

歌え終わると俺の手には”悲嘆の怠惰（リビ・カタスリプシ）”が実態した

俺は、悲嘆の怠惰を龍樹に向かって突きつけるかの様に突っ込んでいった。龍樹はそれを避けようとしたが”嫌気”で拘束すると『ナニ！？』俺は、”悲嘆の怠惰”の超過駆動を全力で撃った・・・・

『グァァァァッァァァァ』龍樹は、崩れるかのように地上に落ちっていった

「これ終わりか・・・・さすがに辛い・・・・残りの魔力と霊力はもう残り少ない妖力はあまり使いたくないしな」そう呟くと

龍樹は口から魔力と妖力の塊を撃ってきた

「！！！！！っ。」

俺はとっさに羽で防御をしたがかなりのダメージが俺にまで届いた

『ナメルナ！』

「あの掻き毟りを食らって生きてるなんてあんたすごいな」

『アンナモノナントモト言イタイトコロだかモウ我ハボロボロジャ。

後1発分クライナラ今ノガデキルガ御主モニタヨウナモノジャロ？」
そう俺に聞いてきた・・・こいつするどいな・・・・最近力を使うことがなかったから封印してたのが痛手にでたな・・・・

「あぁそうだよ？だからどうした？」

『ナラ最後ニオ互イノ全力デヤルトシイヨデハナイカ？」

「・・・・わかった」
（ごめん永琳俺月に行けそうにないな・・・・）

そう思い悲漢を龍樹に向かって構えた。龍樹も先ほどと同等の砲撃をしようとしている
俺は、全力でつっこんだ・・・・・龍樹の砲撃も撃たれ俺も掻き毟りを撃った。ふたつの攻撃は相殺した・・・・でも、俺は龍樹に向かって突っ込んでいた

『ナニ！？マダソナタソコマデウゴケタカ！』そう言い龍樹は迎撃しようとしたが俺はここで悲漢の形を変えた・・・・そこにはさっきまでの大きな大剣ではなく長さ一メートル半ほどの二振りの片刃剣があった
（ぐ！？やっぱりこの形状にするとかなりやばいなこの一撃ですべてを終わらせる！！）そう心に言い聞かせ封印していた妖力と神力をそれぞれ左に妖力、右に神力を流し

「これお終いだ！！」そう叫び二振りの悲漢から掻き毟りが撃たれた・・・・

『マダコンナチカラヲノコシテイタトハ・・・・ワレノ　　・・・・マケジャ・・・・」龍樹は今度こそ地上に落ちていき大きな音が響い

たそれとどうじに宇宙船も打ち上げられた窓に人が集まっているのを見たそれは涙を流しながら俺に敬礼をしている警備の連中や兵士達だったそれをみて安心してしまった俺は龍樹が落ちた地上に俺も落ちていった。最後に俺が見たのは無事宇宙に飛んでいった宇宙船だった

「俺にでも守れた人はいたんだな・・・・」

その言葉を最後に俺の意識は途切れた・・・・・・・・・・・・

おまけ

四季咲さんが外に出て行くとすぐに戦闘は始まったが四季咲さんの一方的な攻撃ですぐけりがつくと思ってたが1匹だけいや1匹の龍だけがそこに残っていて四季咲さんと闘っていた

「おぃ！なんで四季咲さんを一人で外にだしたんだ！」

そう言って俺の胸倉をつかんで聞いてくる

「止められるかよ・・・・あの人のあんな顔見て止めることなんかできるかよ！！！！」

そう叫ぶと殴りかかってきた

「お前！！あの人が今までずっと俺達の代わりにあの化け物達と戦ってくれてたから俺達は今こうして生きているんだぞ！なのにお前

！！！！」

「俺だって止めたかったさでもな！！！これを永琳様に頼むって言って今まで見た来ない顔で出て行ったんだ！！！！！」

そう言い返すとすぐにモニターからあの人の声が聞こえてきた・・・

「　通りませ　通りませ　」

「　行かば　何処が細道なれば　」

「　天神元へと　至る細道　」

「　御意見御無用　通れぬとても　」

「　この子の十の　御祝いに　」

「　両のお札を納めに参ず　」

「　行きはよいなぎ　帰りはこわき　」

「　我が中こわきの　通しかな・・・・・・・」

この歌を聴くとなぜかさっきまで俺に殴りかかってきたやつは静かになり涙をながした・・・いやここにいる者全員がないていた

今の歌には四季咲　鈴という人の心が刻まれていたように感じた・・・それからみな黙ってモニターを見ていたそれからしばらくして決着がついたが・・どうじに打ち上げが始まってしまった。みないそいで窓の場所にいき涙を流しながら敬礼をした。それが俺達が見た最後の俺達の守り神の姿だった・・・

ｓｉｄｅ　永琳

私は、地上の映像をみていた。鈴が闘っているのを私は黙って見ていることしかできなかった。鈴が歌ったあの歌のなかには決心のほかに寂しさと悲しさがあったように感じてしまい私はもっと彼と話してあげればよかったもっと彼と一緒に居たかった。そう心のかにあふれてきた。最後の一撃で鈴は勝てたこれ鈴はこちらにこれると喜んだが・・・・それと同時に宇宙船は打ち上げられた・・・・私はそれを見ると絶望してしまった・・・

なんで??なんでよ!!こんなのって・・・そう感じ鈴を見ると鈴はゆっくりと地上に落ちていくのを見た。

私は

「鈴?ねぇ鈴、嘘なんですよね?嘘って言ってよ!!鈴!!!!!!」そう叫び泣いていた・・・・

私は、その後私は気を失ってしまったのか病室のベットの中で目を覚ました。

私は、目の前が真っ暗になったような感じでいたが私の病室に入ってくる一人の男性を見たそれは、鈴とよく話をしている人だったその人は泣きながら私に小さな箱を渡してきた。彼は

「四季咲さんから八意様に渡すように託されたものです・・・」

私はそれを急いであけた中身はシルバーの指輪と手紙がはいってた

永琳へ

いつもいろいろ世話をしてくれてありがとう。これは私からの感謝の印です

一応私の手作りですからね?本当はもっといいものを贈れればよかったんで

すけど今回はそれがまんしてください。月でもたぶんお世話になると思いま

すがよろしくお願いします。

四季咲　鈴より

私は、手紙と指輪を握り締めるとまた泣き出してた

私の目の前にいる男性も泣いているいや・・・・

この月にいるものがないているんだと思った廊下からも泣き声がきこえてきた・・・

「鈴・・・・私は、あなたのことを愛しています」私は伝えようと思っていた言葉をいい指に指輪をはめた・・・・・・

創造

俺の意識は暗闇の中にあった。俺は確か・・・・・・そうだ、宇宙船を守るために力を限界まで使ってそれから意識が途切れそうになってそのまま堕ちたんだ・・・・・あぁ～そうか俺は今度こそ死んだのか・・・・・そう思うと同時にどこからか俺を呼ぶ声が聞こえてきた

「四季咲よ起きよ」

ん？なんだよ。俺はもう死んだんだろ・・・・

そう思い無視したら

「いい加減に起きぬかこのたわけが！！」

その声と同時に腹を殴られた・・・・

「ぐはぁ！！！！！」

「って、殺す気か！！！！！」

そう言うと俺を殴った本人は、俺を転生させてくれた神様が目の前にいた

「いぁ～わるかったの～」

まったくわびる気もないことがわかる態度でそういってきた

「はぁ～それで今度はどうしたんですか？俺はもう死んだんでしょ？「いや。四季咲お主は死んでおらんぞ？」はぁ？じゃ、なんでま

たここにいるんです？「そのことなんじゃが・・・・・」」なんだかかなり気まずいような感じをだしてきたが。神様は、やっと口を開いたと思うと

「あぁ～お主なついに”神”になってしもうたのじゃ」

・・・・・・・何言ってるんですかこの人は？

いや、まぁ思い当たる節はあるんだけどさ・・・・・

「なんで私が神になってるんですか？「お主もうすうすは気づいてると思うがお主向こうにいるとき信仰されたじゃろ？それでじゃ」あぁ～そういえ守り神って呼ばれてましたしね「そこまでならまだ下級神と同じくらいじゃったんだか・・・・・あの後お主は戦ったじゃろ？」えぇ、戦いましたが？」

「そのせいと言うわけじゃと思うがお主は自分の命と引き換えに多くの人を守ったとして感謝とお主がいたということを忘れぬために信仰してるのじゃよ」

マジですか・・・・・・「マジじゃ」心読まないでくださいよ・・・・・・

「はぁ～そうでしたか・・・・それで俺はこの後どうすればいいんですか？」

「うむ。そうじゃなお主には、いきなりで悪いが世界を作ってもらいたいのじゃ」

は？世界を作る？？？？・

「お主の今の力は我を軽く凌駕している前のように下級神クラスで

あればそんなことしなくともよかったんじゃがお主は、すべての神の中でも5位以内には確実に入るほどの力を持っておるそのため上位の神はある程度責務を持っておるのじゃ」

「だから私もその責務を果たせと？」

「うむ。だが世界を作れと言っても我々神は基本干渉はしなくてもよいのじゃがな。基本はその世界の中に住む者たちがどのような結末を迎えるかを見ておるだけでよいのじゃそれで、やってくれんか？」

「はぁ～わかりました。ちなみにどんな世界を創ればいいんですか？「あ、そのことなら大体はもう決まっておるし」決まっている？「お主の友の希望のために魔法世界を創らねばならなかったがそれをお主に頼むことにしよう」はぁ～あのバカの為ですか・・・・「そう露骨に嫌そうな顔をせんでもよかろうに」いやだってね～・・・・はぁ～まったくわかりました」」

「おぉ～やってくれるかなら早速やってもらおうかの。そうじゃ、お主には今回の報酬としてお主に従者を一人とこれからのお主の友の原作知識を渡しておこうそれを参考にして世界を創造してくれ」

「従者！？」ちょっとまて・・・・・原作知識はネギまに関してはうれしいけど従者はだめだろう・・

「あ、ちなみに本人の希望じゃからな？」はぁ？希望ってそう考える暇もないうちに従者の人を呼びだしていた。そこに立っていたのは、１６０ｃｍ位の薄い緑色のロングヘアーの女の人で彼女の黒い瞳が俺を見ていた、そして俺にはなしかけてきた

「ふむ、怪我はもうよさそうでだな」

「えっとあなたはどなたでしょうか？」

「何！？私が誰かわからぬのか！？」

そう言い本当にびっくりしていた

「すみません。わかりません・・・」

そう申し訳なさそうに答えると彼女は、呆れたような声で

「はぁ～私を倒しておきながら忘れるとはまったく」そう言った

「ちょっとまて。倒した？誰が？「おぬしが」誰を？「私を」」そう言われると最近俺が倒してなおかつ知性がまともにあったやつだと1体だけしか思い浮かばなかったがおそるおそる聞いてみると

「もしかして龍樹ってことなんあるわけ「ん？なんだちゃんと覚えておれうではないか？」・・・・・ちょっとまてあいつは龍でお前は人だろ？「あぁ～忘れておった私はそこにいる神に頼みおぬしの従者になる為に人の器をもらったのだ」はぁ！？なんでそんなことする必要が！？「それは、もちろん強き者に従い付いていくことが我らの掟のようなものじゃし私個人的にもおぬしには興味があったからじゃ♪」・・・・・神様いいんですかこれで？「え？あぁ～もちろんじゃとも何なら我がじきじきにいろいろ教えてしんぜようか♪」ダメだ俺には味方はいない・・・・」

「ん？そうだ龍樹って名前はまだないのか？前聞いたときは龍樹は種族名って言ってたけど」

「うむ。名はまだない。だから名をつけてはくれぬか？」

名前俺が作るのかそう思い龍樹を見ながら考えると龍樹の綺麗な薄い緑の髪を見ていると改めて思ったすごい綺麗だ。俺の意思を感じたのかすごく恥ずかしそうにしているそれをみるとまたかわいいとm思った。うん、なら

「龍樹「うむ。決まったのか？」あぁ。君の名前は”翠華”どうかな？「”翠華（スイカ）”・・・私の名前」」そうつぶやきながらどこかうれしそうな顔をしているそんな彼女を見ていると急に俺と翠華の足元が光りだし魔方陣があわれた。俺はあわてていると俺のほうを向いて近づいてくる翠華は俺の目の前で方膝をつき俺に向かって

「私は、あなたのことを私の主としこの身は、主の爪、主の牙、主の盾になることをここに誓い幾千幾万の時がたとうとも主の下を離れることをなく主を守り通すとここに再度誓います」

翠華が誓いを立てると同時に魔方陣が消えた。

「おぉ契約はしっかりと終えたか」
そう言って神は俺に近づいてきた

「神様！今の契約って！？「うむ。少しまておぬしももう神の一角のじゃから我の名を教えておこう我の名は天照じゃ。今の契約は、神の従者になるための契約じゃな、主になるものが名を与えそれに不服があるかどうかで契約の成功失敗はきまるが成功したようじゃな」翠華俺みないなやつがお前の主でほんとうにいいのか？「くどいですよ主様私はもうあなたに使えるときめていました。それに女というものは強い者に惹かれるものなのですよ？／／／／／／／／」そういって笑いながら俺に話してくれる

「なら、翠華これからよろしく。俺は四季咲　鈴まだまだ未熟だけどこれから頼むよ」

「はい！主様、幾久しく」

「あぁ～そろそろいいかな？鈴はこれからすぐ魔法世界を作ってもらうけどいいよね？」
あれ？天照だいぶ口調変わってないか？

「あ、口調の事はきにしないでね～一応こっちが素だから、ほらやっぱり神様だと威厳とかって大事じゃない？それであの口調してたの。あ～あの口調だいぶ疲れた～」（へぇ～そうだったのか～ってだから心読まないでください・・・・・）

「それじゃ早速創るよ？」

「ちょっとまった！とりあえずどうやって創ればいいんだ？」

「今から真っ暗なところに送るから君は思い浮かべばいいんだよそれ創れるから」

「じゃ。いってらっしゃい。あ、翠華ちゃんは、鈴が戻ってくるまでここで家事とかそういったことの練習ね？「はい、わかりました。主様いってらっしゃいませ」」その声を合図にまた下に落下した・・

「ってついたのかさえわからないけど完璧に真っ暗だな～とりあえず俺は、まずしなくちゃいけないことは　大地と空を創造しなきゃな」
俺は目を閉じて天照からもらった原作知識にある魔法世界の土地などを創造した

「後は、原作の中のラスボスの創造主を創るだけだけど、創造主を創造する俺ってなんだかな～」
でも、知識だけで見るとあの人ってこの世界の目的のことをしらなかったからああなってしまったんだよなだったら最初から教えておけばどうなるんだ？・・・・・・そんなふうに考えているうちに創造は終わり俺の目の前には黒いローブに身を包んだ、『ライフメーカー（造物主）』がいる顔と容姿はまったく判断できないけど影から見える目はすごく哀しい目だと感じとる向こうも俺に向かって話しかけてきた

「貴様は何者だ？（目の前にいる子供ただものではない。我以上の力を持っているそれになんて悲しみの瞳をしておる・・・）」

「俺か、俺はただの新米の神だよ」

「何？貴様が神だと？（それなら頷けるこやつの魔力とも気とも違う力神聖じみているのはその成果）ならなぜ神の貴様がこのような場所にいる？」

「それは、簡単なことだ俺は創造した所だお前ならこの意味わかるな？」

「我をいや・・・・世界を創った。それで合ってるな」

「あぁ。そのとおりだ」

「では、聞こうなぜ我を生み出した！答えよ！」

ま、そうだよな。普通こう言われてもおかしくないしなでもなんて言うかな・・・・・・そう考えると不思議と答えていた

「そうだな・・・ただ寂しかっただけなのかもしれないな」

「寂しかっただと？（この者なんて目をしていうのだ。このよう子供がこの年で神になどなるとはそれだけ絶望したのか！？だからその寂しさをなくすために我と世界を創ったということか・・・・）

なんだかすごい考えてるなはぁ～たぶん今のは俺の素直な答えなんだろうな・・・俺はあの時全部なくしちまったんだし・・・もう永琳にも会えない・・・・いや会えないわけじゃないけど会いに行くと迷惑をかけるだけだろう・・・そう思うと涙がでていた。それを見た、ライフメイカーはすごい驚いていた

「な！？（急に泣いてどうしたというのだ？！そこまで限界になっ

ていたというのか・・・ならば我がいや・・・・私が今できることは）」

ライフメイカーは、俺にゆっくりと近づきそして俺を優しく抱きしめゆっくりと背中をなでた

俺は、その行動に驚くと

「もういい。今は、私しかいないだから思いっきり泣けばいい」

俺は、その言葉を聞くと胸の奥が締め付けられるような感覚がしたかと思うと今度は目が熱くなり視界はぼやけさらに目からは大粒の涙が流れたそれが合図になったかのように鈴は今まで殺していた感情をすべて吐き出して泣いた

「うあぁぁぁぁっぁぁっぁぁぁぁ！！！！！！」

そのときライフメイカーのフードがとれたが彼女は気にしないで泣いている鈴をなだめていた・・・・

あれからしばらくして、鈴が泣き終えたそこにはすっきりした顔をしているがどこか考えてこんでいる鈴がいた

ライフメイカーのフードが取れてることに気づいてみたけどまさか

性別が女でしかも見た目がホライゾンそっくりって・・・・そんなことを考えていると

「もう大丈夫なようだな」そういって俺に話しかけてきた

「さっきはありがとう・・えっとなんて呼べばいい？」

「私には名はないお主の名はなんて言うのだ？「俺は、四季咲　鈴」いい名だな。では、鈴が私に名をつけてはくれないか？」

そう言われたが俺が名をつけてると契約してしまうとことになると伝えるとそれでもかまわないといってきたなら・・・

「君の名前は”ホライゾン”どうかな？」

「いいなだな”ホライゾン””境界線”かとてもいい名をありがとう。では、我がマスターに私は誓う私は、マスターの悲しみから守り抜くことをここに誓う！！」

そう宣言してくれた俺は、その言葉に対して

「ありがとう。ホライゾンこれからよろしくお願いね」そう笑いかけたたぶん今できる最高の笑顔だったはずだそれをみると

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／も、もちろんです。マスターの為に私は何でもやりますよ！」

顔を赤くしながら言ってきた。素直にうれしいけど

「じゃ、お願いですけどこの世界の事を任せてもいいですか？」

「そんなこと私にお任せください！ですがたまには様子を見にきてくださいね？」

そう心配するような顔をしてきたが俺は、笑いかけながら大丈夫と答えた。そこから彼女はすごいやるきをだしてこの世界の人を創ってきます。といい転移していった。俺は、これであの人が絶望することはないかなって思いながら天照と翠華がいる場所に戻った・・・・

「ただいま戻りました～」

俺は、そう言って戻ってきたけどそこには2人の修羅がまっていました・・・・・・

「「アア、オカエリナサイ」」

「な、何で片言なんでしょうか？お二人は」俺は始めてここまで恐怖した・・・・

「イエイエタダデスネ鈴ガムコウデナニガアッタノカユックリトＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩシタイダケダヨ？」「ソウデスヨ主様ワタシタチハタダＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩシタイダケデスヨ？」

二人の目からは光がなくなっていることに気がついた。やばいここから早く逃げないと殺れる・・・本能がいますぐどこかに逃げろと言ってきているが体は恐怖で動かない・・・・・・

「「「サ、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩショウカ（シマショウカ）？」」

「い、いやだぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

そう叫ぶ鈴の声はただただ木霊するだけだった・・・・・・・・・・・・・・

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝数時間後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「そうですか。今まで溜め込んでいた。感情が全部あふれてあのように抱きしめられてないたと？」

「そして、その勢いで契約もしてしまったとそれで間違いありませんね？」

「はい。そうです・・・・・・」

あれからなんとか解放されたが今は正座させられている・・・・・・

「はぁ～まったくあまり感情を溜め込むのはよくないですし適度に発散してね？」

（まったくこの子はでも、泣いてるときの姿かなりかわいかったなぁ～／／／／／／）

「はい。わかりました天照・・・・」

「それに泣きたいのでしたら私にも言って下さいよ！すごい心配したんですからね主様・・・」

（さっきの主様子犬みたいでかわいかったな・・・・・ふふふ／／／／／／／／）

「はい。ほんとすみませんでした翠華・・・・」

「今回はこれくらいで許します。じゃ、さっそく地上に戻ってもらいますね？」

「あ、質問いい？「いいですよ」じゃ、俺どこに住めばいいんですか？「あ、それもそうね。あなたはどうしたい？」そうですね～ならしばらくはいろんな所を旅してみることにしますよ「わかったはならお金をある程度あげるからそれで回るといいわ」ありがとう」

そういうと地上へ行くための門が開かれた

「じゃ、天照ありがとう。世話になったよ」

「天照様いろいろと教えていただきありがとうございました」

「ふふふ、いいのよでも、たまにはこっちにも着てよね？」

「はいはい。わかりました。では、今回はこれで失礼します」

そういうと鈴と翠華は地上に戻っていった・・・・・・・

俺の平凡日

俺達は、あれからとりあえずいろんな所を回ってみることにしたので日本の北から南までいろんな所を回って見た。その途中でやたらとでかい樹を見かけてでかいな～と見てたら翠華がこの樹について説明してくれた

「主様これは世界樹と言う樹でかなりの量の力がある樹です。主様もしよければこの樹と管理者契約してみてはいかがでしょうか？そのほうが主様の研究にも役にたつのでは？」

っとそんな事を言われた。確かにそのほうが俺が前々から研究にも役にたつだろうしっと考えると俺は契約をした。でも、まさか世界樹に意思があるなんて思わなかった。

（あなたは、神なんですか？なら私はあなと契約します）

あっさり承諾された。しかも神ってわかるのかよ・・・・

そんな感じのことが多々あったけど今は京の都で家を買いしばらくここを拠点に生活しようとして京に今は住んでいる。生活費は、俺が陰陽師の真似事と医者の真似事をして生計を立てている。後は、たまに魔法世界に行って俺が昔からやってた研究をしたりしてたり新しい俺の装備を創ったりしていたりする家事とかに関しては最初のうちは、俺も料理とかしたけど何でか翠華が次から家事を一切やらせてくれなくなった。家事は、俺の隠れた特技だったりもする。っとそれはさておきそんな感じでここで暮らしている。陰陽師の仕事に関してもほかの所よりかなり安くしているの一般の人でも頼みやすいことで有名になっている医者の仕事のほうは薬を新しく作ったものを使っているのでほかの医者の薬より段違いにいいものだと

言われ貴族の人たちにも評判がよかった、っまそんな感じです。

「あぁ～退屈だ～退屈だ～」ゴロゴロゴロ～～

「もう。主様、いくら暇だからと言ってゴロゴロしないでくださいよ（／／／っう。すごいかわいい）」

「だぁ～って暇なんだよ～」俺は、そういうとまたゴロゴロと転がりはじめた

その時家の玄関に誰か来たのを感じると、すぐに転がることをやめ立ち上がった

「四季咲殿は、いらっしゃいますか」

その声に返答する様に俺は玄関に歩き出しながら

「私が、四季咲ですが。どのような御用ですかな？」

「あなたが四季咲殿ですか、あなたにある妖怪の討伐の依頼をしたくうかがったがよろしいだろうか？」

おぉ！！なんといい時に来たな・・・討伐ならいろいろ試したい武器試せる！

「ふむ。わかりました。それで、その妖怪はどこに行けば遭遇できるのでしょうか？」

「おぉ！！ひきうけていただけますか。では、こちらに地図を描いておりますのでその場所に行かれれば遭遇できるはずでしょう。「あぃわかった。では、早速準備をして行ってまいりましょうか」で

は、報酬は、こちらに御座いますのでお納めください」

そおいい依頼人は帰っていった・・・・・

「それで、主様今回はどのような依頼なのですか？」

「あぁ～今回は妖怪の討伐だよ、いや～これで暇つぶしもとい新しい武器の実験ができるよ～♪」

「わかりました大丈夫だと思いますけど。主様気をつけてくださいね？」

「了解～それじゃ早速行ってくるよ」

俺は、そう言い普段は普通の人には認識できないようにしている翼を広げ（また増えて全部で１２枚になったよ）地図に書かれている場所に飛んだ。割と全力で飛んだからすぐについたよ！！

でも、俺はついた場所を見てすごい嫌な汗しかでないんですけど・・・

だって目の前にある場所には花畑があるんですよ？俺は花畑＋妖怪で思いつく妖怪ってもう一人しか思いつかないんですけど・・・・・・あの人俺は好きだけどさ！！！

「それにしてもここの花綺麗だな～」

いや～久しぶりに心がなごむな～

「あら？あらがとうね」

その声と同時に俺のなごみは崩れ去った

「あなたみたいな子供がこんなところに何かようかしら？」

身体から冷や汗が一気に出てくる。確かにさ俺暇だから討伐とかの依頼こないかなって思ったよでもさ限度ってものがあるじゃん！何でこんなときに限って俺の予想ってあたるのかなっと感じとりながら後ろを振り向くとそこには”風見幽香”がそこに笑顔で立っていた。めっちゃ笑顔が怖いです・・・泣きそう・・・

「いえ。ただここの花が綺麗だったのでみてただけですよ」

一応平常心を保って言ったがもう限界です！

「そう・・・でも、あなたただの子供じゃないわね？それに結構な力をもってるわね」

だから何でわかるんだよ・・・封印してるはずなのに

「いえいえ。私は、ただの子供ですよ？では、私はそろそろ帰りますので」

「あら？私があなたを帰すとでも思ったかしら？」

「ですよね～～～」

「でも、もしあなたが私と戦って勝てたのなら帰してあげるわ」

妙に艶のある笑顔で俺に言ってきた

「じゃ、いくわよ？」

そう言ったかと思うといきなり妖力の弾が飛んできたしかも結構な数と威力で！
俺もとっさに霊力で撃ち帰した。

「あらやるじゃない？ならこれでどおかしら？」

それと同時に幽香は持っていた日傘で突き出そうとしてきたそこで俺は、新しい武器である俺の感情である”淫蕩”を発動させた。形状は立花？が使っていた両腕に十字架を模した巨大な義腕を俺の腕に装備させている色は黒と白になっているもちろん”四つ角十字（クアトロクロス）”も使える使用にしたもともと”淫蕩”に攻撃能力がなかったのでこの様にしてみたら結果盾のように使うこともできるっとｓれはさておき

「発動、”淫蕩の御身（ステイソス・ポルネイア）”」

俺が発動すると幽香が俺に突きつけてきた日傘は俺に刺さることはなくなったこれに対して幽香がすごく驚いたようで少し隙ができた俺は、その瞬間をみのがさないで翼を展開した。そこでさらに驚いているが

「発動”怠惰な嫌気（アーケディア・カタスリプシ）”！」

これの能力をもろにうけた幽香は動くことすらできなくなっているがその目にはまだ戦意喪失はしてないようだった。だがふいに幽香は俺に向かって声をかけてきた

「あなたなかなか強いのにそれに霊力のほかに妖力ももってるみたいね少しだけどもれてるわよ？」

完璧に抑えられてなかったか

「ま、それは、どうでもいいわ。あなたの名前を教えてくれるかしら？私は、風見幽香ここの管理人のようなものよ」

「私は、四季咲鈴です」

「そう、あなたがあの四季咲なのね・・・なら、私が負けるのも納得よ。だから早く最後の一撃を撃ちなさい。このままなにもされないとそれは私に対しての侮辱よ？」

「わかりました。なら最後の一撃撃たせてもらいます・・・・・」

俺は、そういうと両腕の淫蕩の御身の”十字砲火（アルカブス・クルス）”を展開した
すべて展開し終えると俺は霊力、妖力、魔力、気をそれぞれに込め

「穿て！！！”四つ角十字（クアトロクロス）”！！！！！！！！！！」

そう叫び砲撃した
一応、非殺傷状態にして撃ったから大丈夫ではあったが気を失っている幽香が俺の目の前にいるので俺は、さすがにこのまま放置はだめだろう・・・・それに気絶させておいたなんだけどやっぱり綺麗だなそんなことを考えてしまった。とりあえず俺の家まで運ぶことにし幽香を抱き上げ翼を広げ家に帰った
帰った時翠華にかなり怒られ涙目になったらなぜかすごい顔を赤く染めて許してくれた・・・・
その後は幽香を布団に寝かせて起きるのを待ちながら薬を作っていた・・・・・（ちなみに作ってるのは基本魔法薬だったりしますけどね・・ポーションとかハイポーションとかエリクサーとかｅｔｃ）

ま、そんな感じで俺の今日一日は過ぎた・・・・・・・・・

身の危険を感じたよ・・・

ｓｉｄｅ風見幽香

私は、初めて負けた。でも、なぜか悔しさはわかなくどこかすがすがしい感じがした。相手が相手だったかしら？でも、まさか相手が最近妖怪の間で有名な最強の陰陽師四季咲が来るなんて戦ってみたかったけどあそこまで強いなんてちょっと反則だと思った。それに彼は、ぱっと見ただの子供みたいだけど彼が使った武器は見たこともないものだったしそれに、最後の一撃の時は妖力も感じとれたし本当に彼は何者なんだろう・・・それにしても薬の匂いがするわね私は、そう思い目をあけるとそこは知らない天井で私は布団に寝かされていた

「ここは・・・・」

「ん？やっと起きましたか」

私は声が聞こえた方向をみるとそこには四季咲鈴がいた

「あなたが私をここまで運んだの？」

「えぇ、さすがにあのまま放置できませんし。あ、ちなみにここは私の家です」

そう答えてきたが妖怪を助ける陰陽師ってそれに何で助けたのかが不思議だ

「なぜ私を助けたのかしら？それにあなた最後の一撃の時妖力も使ってたわね？」

そう聞くと

「そうですね。あなたを助けた理由としたらあなたはちゃんと理性もありますしそれに、私はあなたの事が嫌いじゃないですしね。」

「／／／／／っな、何言ってるのよ！」

「後妖力についてですけど。簡単に言うと私が妖怪をやってたからですよ」

ん？やってた？何で過去形なの？じゃ、今は何だっていうのよ

「それじゃ、あなたはいったい今は何なのかしら？妖怪だったってことは今は別の存在ってことよね？」

「あ～そうですね。私は、今神の一角をやってます」

ふぅ～ん神様ね・・・ならあの理不尽な強さも理解できるわね・・・

「あらそうなの。じゃ、あなたが使っていたあの武器は何なのかしら？」

「あの武器のことですか？う～ん簡単に言うとあれは私の感情を具現化して武器化したものです」

な！！自分の感情を武器化！？なんて物を武器にしてるのよこの子は

「あなたそれ辛くないの？」

私は少し恐る恐る聞いてみた
そしたら目の前にいる彼は

「そうですね。ある一つの感情を抜かせば大丈夫ですよ」

「ある一つの感情？それは何かしら？」

「それは、ですね。・・・・・・・・・・悲嘆ですよ。これはたまに感情が逆流してくるときがあるのでそれが辛いですね」

ちょっとまって。悲嘆って事は悲しみの感情それだけが逆流してくるってどれだけ強力なのよ・・・それに逆流してくるだけの悲しみをこの子は今まで味わったことがあるって事なの・・・・・

「そう、いろいろ聞かせてくれてありがとうね」

私は、そう言うと少しこの子をじっくり見るとやっぱり見ためはこのあたりでは珍しい長い銀色の髪と紅い瞳をした子供、その目には何だか少しだけ悲しみが見えた気がした。私は、この子に興味を持ってしまった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ風見幽香

ｓｉｄｅ　四季咲

俺は、俺についていろいろ聞かれたのでちゃんと答えた。それから幽香が俺のことをじっくりと見てきたのでちょっと何か変か聞こうとした

「え～っと何かへんですか？」

「え？うんうんそうじゃないのちょっとあなたに興味でたから見てただけよ」
そう言い笑っていた
「ねぇ？四季咲？あなたのことを鈴って呼んでいいかしら？私のことは幽香でかまわないから」
「えぇ。それくらいは別にいいですけど。興味がわいたって？」
「そのまんまの意味よあなたを見てたら興味わいてきたの。それにしてもこの家ってひろいわね？あなた一人でここに住んでるのかしら？」
「いぇ。私の従者もいますので2人ですね」
「そう。。なら部屋とかまだ余ってるわよね？」
何でそんなこと聞くんだ？
「えぇだいぶあまってますけどそれがどうかしましたか？」
「なら、私もここで住まわせてもらってもかまわないかしら？」
「はぃ？」
今なんて仰いましたこの人は・・・・
「だからここに住まわせてもらってもいいかしら？」

「それは、構いませんけどなんでまた急に」

「そうね。一番の理由は、やっぱり興味がわいたってことね」

「そうですか・・・・わかりました。ならここに住んでもらっても構わないですよ」

「ありがとう。ならさっそっく荷物を取ってくることにするわ。だから引越しのお手伝いお願いできるかしら？」

「はいはい。わかりました」

そ、言うと俺は、翼を展開し花畑があったところに幽香をつれて飛んだ。そこからは荷物をもって往復を何回か繰り返した。まさか、花畑の花も一緒に運ぶことになるとは・・・・・・おかげで家の庭が今までなにもなかった殺風景なものだったところから幽香の花を植えることにりとてもいいものになった

その晩、幽香がここで住むことになったことを翠華に話すとなぜか幽香と話し合いをしたいということになり二人で話し合っていた。なぜかそれで友情的なものが芽生えたのかやたらとなかがよくなっていた・・・いったい何を話し合っていたのか。その話し合いの最中なぜか身の危険を感じたのは気のせいであってほしいと願うばかりだ・・・・・

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ四季咲

ちょっと魔法世界まで

あれから数日がたち俺の平穏な日々にちょっと変化があった。幽香がやたらと俺をだっこしたがったり翠華が俺を膝の上にのせたがったりするようになった。俺は、子供じゃないんだ（中身は）後は、最近一緒に妖怪の討伐を共にやった陰陽師の安倍晴明とやたらと仲良くなった。そんでそいつに聞いた話で最近対魔を目的とした剣術を使う神明流って流派のやつらがでてきたんだと清明はそいつらのことが嫌いらしいま、俺も嫌いだけどね妖怪だからといって無差別に殺すのはさすがに俺や清明は許せなかった。後、清明に俺が式を持ってないって言うとかなり驚かれ調度いいやつがいるからそいつを倒して式にしろって言ってきた。なんで？って聞くとそいつは神明流の馬鹿が馬鹿やったせいで暴走してそのせいで封印されたやつらしい。それを俺の式にしろって・・・・・・・・なかなかいいかもなって答えた。でも、もう少ししたらそうするからそのときは案内しろよ？と言うと笑顔でうなずいた。もう一つ重大なことがあるとしたら藤原不比等が俺の所に依頼に来た。何で俺なんかの所にくるんだよ。依頼内容は面倒なことじゃなかったけど。自分の娘である藤原妹紅に俺の知ってること技術を学ばせてはくれないかだった。理由を聞くと俺が作る薬や俺がやってる陰陽師の仕事にとても興味が沸きなんども頼みこみ俺の所まで来たんだと・・・・陰陽師の仕事に関してはなんともいえないが薬に関しては引き受けることを伝えると妹紅はとてもよろこんでいたがなぜ父親である不比等が喜ぶのか不思議に思い後で妹紅に聞いてみると今この都で一番美しいとされている輝夜に婚約の申し込みむことにやっきになってるんだと。その時の妹紅の顔がとても寂しそうに見えたから撫でたらすごい赤くなった。それを見ていた、翠華と幽香からその後Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされた・・・・俺の障壁完璧に抜かれました・・・・っとま、そんな感じでここ数日過ごしています。はぁ～平穏ってな

んだろうね？
俺は、最近してなかった研究をするために一度魔法世界来ている。ちょっと目を離してたらなんだか国まででできちゃってました。俺は、そんなことはどうでもよかったのでホライゾンの所に行くとホライゾンはなんだか自分の組織作ってたのでそこに行ってみた。
そこまではよかったんだけどさ俺を見つけたとたん「マスター！！！！！」さっきまで威厳出しまくってた人がいきなり俺に向かって抱きついてきて抱っこされるような形になった。それを見ていたその場にいた人全員固まってしまった。「「「「「創造主様って女性だったんですか！！？？」」」」ま、たしかに普段は性別すらわからないよね「「「創造主のマスター！！！！？？？？？」」」」そんな感じの反応も聞けた。そこにいた人たち全員この世界のことを理解してる人たちだったので俺のことを簡単に説明したらすごい崇められた・・・・「「「「「創造神様～～！！！！」」」」間違ってないけどそれやめてください俺の心が折れそうです・・・・
それで、俺がここに来た理由を言うと即答でＯＫをもらい研究をした。そん時俺の助手役としてホライゾンが創ったホムンクルスのフェイト・アーウェンクルスを俺に付けてくれた。そのおかげで俺の研究はだいぶ助かった。ちなみに俺が研究をしてたのは永琳達と別れるときまでやっていたガーディアン（ゴーレム）に関する研究と神になったので宝具を創ってみることにしたのでそれに関連する研究だ。ゴーレムは魔法世界のヘラス帝国の鬼神兵をちょっと参考にさせてもらって３種類のタイプを作った。ま、外見とかは完璧プリズム〇ークの天使パクリましたよ。名前も、”轟力天使（ザクエル）”こいつは近接攻撃に特化と防御力をそこそこあるタイプだ。次に”攻速天使（ラディエル）”こいつは完璧なスピードタイプで装甲と攻撃力は少し落ちるけど形状を変化することができるようになっておりその形態の時は音速を超えるようになっているからソニックウェーブがおきるそれも攻撃手段だ。そんで最後が”光輪天使（ファギエル）”こいつは接近戦でも大丈夫だがメインは砲撃になっているスピードはこの３種類のうちで一番遅い

（ま、それでも十分早いけどね）

「それにしても鈴、君はすごいね。これだけのゴーレムはみたこともないよ。というかやりすぎじゃないかい？」

フェイトはそおいってくるが

「あぁ～フェイトそれ以上言うな俺もそを思ってるけどさぁ～でも、反省も後悔もしない！！」

「まったく君は・・・・でも、本当の目的はこの３種類の開発じゃなくてこの３種類の特に”轟力天使（ザクェル）”が君の作ろうとしてる新しい魔法には必要だったんじゃないかい？」

そを俺は、実際はザクェルだけあれば事足りた。俺の作ろうとしてる魔法は、”都食らい”俺はこれを天使達を使ってできないか考えたもちろんそのための宝具も創った。何で都食らいを俺が作ろうとしてるかと言うと前にもらった原作知識の中にあったメガロメセンブリア元老院これはつぶそうと思いそのために思いっきり派手なのを考えたらこれにした。さすがに俺もこれは使いたくはないけど一応保険で作っただけだよ。でも、念のために４種類目の天使は作っておこうかと考えてたりする・・・・・

「いぁ～一応これ使わないことが一番だけどさ。それに天使だけでもだいぶ使えるはずだし」

「それは、確かにそうだね。こんな大規模殲滅魔法は凶悪すぎるね・・・・」

そんな感じな会話をしたりして俺はだいぶ魔法世界で有意義に過ご

している。ついでにフェイトとホライゾンとはちょくちょく模擬戦したりする。いろいろと新しいこともできるようになったたとえば”咸卦法”などといった格闘戦向きのものだ。そんで魔法世界で１週間位すぎたからそろそろ京の都に戻るとつたえるとホライゾンが俺と契約をしたいと言ってきた。

「契約は、してるだろ？」

そ、返すとそれとは別のパクティオをしたいと言ってきたのでその辺の知識はまだみてないのでわからなかったのでフェイトに聞こうとしたらフェイトは俺を見捨ててどこかにいきやがった・・・

それで「わかったいいよ」そう答えたのが間違えでした。いきなり足元に魔方陣があらわれホライゾンが俺の顔に近づきキスをした。（しかも結構長かった・・・）俺は、放心状態だったが目の前にカードがあらわれてそれは何かと聞いたら。契約の証だといい「来れ（アデアット）」そう言うとホライゾンがこのカードについての説明してくれた。俺と契約したことで契約した証のアーティファクトがでるはずだと言っていたが現れなかったので俺がもしかしてと思いそのアティファクトの名前を聞くと

「”全域焦がれ（オロス・フトノース）”ですが？」

それを聞くとそのアティファクトがどんなものかを俺は言ってみたらそれは当たっていた・・・・

ホライゾンは俺の大罪武装の弱体化判を使うことができるようになった・・・・・

俺は、そのことも説明した。それを聞くととても喜んでいるがなぜか契約したときから背中から油汗がながれいるしフェイトの目は俺に向かって（骨は拾ってあげるよ）見たいに言ってきている気がした・・・しかもそれを肯定するかのようにどこからか殺気が来た気

がしたけど・・・うん気のせいだ・・・気のせいだと思うしかないと・・・

そのまま俺が帰ろうとするとホライゾンが渡したい物があると言い俺に”グレートグランドマスターキー”と言うカギを渡してきた。これは、ホライゾンにも扱えない物で俺くらいにしか扱えないほど強力なものらしいけどこれが何かと聞くとこの世界の鍵でそのカギはもともと俺の物って感じになっちゃったから（しかもカギに俺の名前彫らさってるし）俺はそのカギを能力を使って（だいぶ久しぶりに）小さくして首から提げることにした。それで今度こそ俺は変えると告げるフェイトはまた戻ってきてまた来てくれよてきな事を言っていた。ホライゾンはついてこようとしたので一発拳骨をしておいてきた。

帰ってそうそう

はぁ～何でこうなったかな～・・・・
俺は、今清明と二人して神明流の剣士達に囲まれている。ほんとなんでこうなったかな・・・・・

～～～回想～～～～～

俺は、魔法世界から家に帰るといきなり清明に拉致られた・・・・・・
なんでも清明いわく
前に神明流が封印した。妖怪を俺の式にするって約束をさっそく実行するだ、そうだ。
もうちょい待てよというと

「いや。もう十分待った。それにあの馬鹿どもをもう許すわけにはいかん！」

何でかすごい怒ってた。清明の式のイタチに聞くとこの間仕事の邪魔されたばかりか散々こけにされたんだと。つまり・・・・

「清明～お前ただ仕返ししたいだけだろう・・・・・」

「おぅ！！そのとおりだ」今まで見た中で最高の笑顔で答えて葉まで見せて親指立てんなよ！起こる気力がわかなくなるからさ・・・・

「まったく。お前のことだからあいつらが封印しかできなかった奴を俺の式にしてあいつらの信用&驚いた顔みたいってのも8割ちかくあるだろう・・・・」

「おぉ～よくわかったな！さすが我が友だ！っと早速目当ての場所に着いたぞ」

そう言うと目の前には注連縄までしてあるが即席と力任せに封印したであろう岩があった。これをどうやって封印をといて俺の式にするんだ？と聞こうと思い清明を見ると・・・・

「では、早速壊すか」

「はぁ？」

封印解くんじゃなくて壊すのかよ！

ツッコミを入れるまもなくこの馬鹿「はぃ、ど～～ん」って言いながら岩砕いたよ。

「俺お前がほかの陰陽師や神明流の連中に嫌われてる理由少しはわかった気がする」

「ん？何か言ったか？」そう答える奴の顔はいい仕事したぜ！！と言わんがかりのすがすがしい笑顔だった・・・一発殴っておくかと考えていると

『貴様らが我の封印を解いたのか？』

その声がするほうを向くとそこにはでかい鬼がいました・・・・・

「清明この人って誰・・・・・・」

「あぁ。言ってなかったか？封印されてた奴ってのは鬼神リョウメ

ンスクナノカミだぞ？」

「聞いてねぇよ！！」

「おぉ～そうだったかすまんすまんw」

『おぃ。もう一度聞くが貴様らが我の封印を解いたのか？』

あ、やば。ちょっと怒ってるよ

「あぉ。すまない俺達があんたの封印を解いた」

そう俺が答えると

『なぜ貴様らは我の封印を解いたのだ？貴様らも我を封印した人間達と同じ者ではないのか？』

「あぁ～それに関しては俺のほうからせつめいするわ。俺、あいつら嫌いなんだわ、妖怪だからとか言う理由で自分達は正義だからって理由で何でも討伐するようなやつらだからよ」

『ふむ。貴様らが奴らを嫌っていることは分かったが。では、なぜ我の封印を解くことになるのだ？』

「そんなの簡単だろ。もちろんやつらに対しての嫌がらせだ！！！！！！！」

清明は、たからに宣言した・・・・・馬鹿だよこいつ。俺の考えてた清明の理想像を返せ！！！！！！

「はぁ～、それでわかっていただけましたか？スクナさん？」

『あぁ。よ～くわかった。こやつがただの馬鹿だということが、だが我を自由にしてもまた封印されるだけではないのか？』

「えぇ。ですからスクナさんできれば私の式になってくれませんか？そうしたらあなたのことを守ることもできますし、ついでにそこの馬鹿に言葉借りると嫌がらせにもなるらしいので」

そ、言うとスクナは一度驚いた顔をしたが次に笑い出した

『ふはははは！面白いことを言うなそこの馬鹿ならともかくお主はまだ子供ではないか？そのような者が我を式にするか、面白いいだろう。我はお主の式になってやろう！！」

そを言ってきた。式になってくれるのはうれしいけどさ・・・・

「あぁ～すまんリョウメンスクナ」

『ん？なんだ馬鹿の方？』

「馬鹿言うな。ちなみにこいつ背のことあまり言うな背が伸びないのかなり気にしてるんだからよ。ってやばい！鈴お前はそのうちでかくなるかならな？な？だから元気出せよ～」

『っう、そ、それはすまなかった。だから元気をだしておくれ』

いいさ、いいさどうせ俺の背は伸びないよ・・・・（前１４０ｃｍでしたが天照の奴が小さくしたら可愛くなるっという理由で現１３５ｃｍまで縮まった・・・なんでか俺の能力でも俺の背は伸ばせないようになっていた・・・・絶望したよ！！！）しかも鬼にまで慰

められる俺って本当に神様なのかな・・・

「はぁ～もういいですよ。どうせもう諦めてますし・・・・・。っとそれはさておき契約しましょうか」

そう言い俺はお札をスクナに渡すとスクナが眩しいくらいに光だした。俺と清明は目を閉じてしまったそして徐々に光が収まり始めたと思いスクナを見るとそこに女性が立っていた・・・・

「あのどちらさまですか？」

「ふむ。わからぬか？我だスクナだ」

何でと思い聞こうとすると

「なんでだぁぁぁぁぁ！！！！何でスクナがこんなに美人なんだ！！！！鈴今からでもいい俺と変われ！！！！」

「黙っておれ！馬鹿もの！！」

「ごはぁ！！！」

鳩尾を思いっきり殴られ清明は倒れこんだ・・・・一応鬼の力で殴ってたよね今・・・ま、清明なら大丈夫か。予断ではあるが清明は前”四つ角十字”を全力に近い出力でこいつに撃ったがこいつは、口から血を吹き出しながら笑顔でやり返してくるようなやつだ。（ほんとこいつ人か？）

ま、それはさておき

「お主が我の主だ。我に式としての名をもらいた。後主の名を教えてくれぬか？」

「あぁ。私の名は四季咲　鈴です」

「あぃ、わかった。では、我に名をつけてくれ」

そういわれてもなぁ～

ぱっと見の外見は１７０ｃｍくらいの背で黒髪のロングで目は、綺麗な水色だ。

名前どうするかな・・・水色・・水、水、水あ、そういえば水で思い出したけど水色の睡蓮って花があったななら

「それじゃ、君の新しい名は”睡蓮”どうかな？」

「睡蓮・・・我の新しい名、はい。ありがとうございます。主」

そう言うと同時に清明が復活した

「おぉ～鈴いい名をつけたな。確か睡蓮の花言葉は「清純な心」「甘美」「優しさ」「信頼」「純情」「信仰」だったか？お前にしてはいいな！」

そ、言ってくる清明

「っと、んじゃ一応偽装はしておくか」

そう言うと清明は、睡蓮が封印されていた場所をもう一度封印しなおした。

「清明？お前は何を封印したんだ？」

「ん？あ～一応スクナいや睡蓮だったな。そいつの暴走したときの憎悪を封印しておいた。これで正式にはまだここに鬼神リョウメン

スクナノカミは封印されてる状態ってわけだ。だから俺達は、何もしてない！」

「はぁ～まったくお前は・・・・！？」

遠くからこちらに向かってくる人の気配を感じると清明も気づいたようで

「！！鈴念のため睡蓮はお前の家に送っておけ。めんどくさい連中が来た」

その声を聞くと同時に

「睡蓮、悪いけど私の家に送っりますね」

そう言うと睡蓮が何か言おうとしてきていたが飛ばした

それと同時に回りを神明流の剣士達に囲まれた

以上で回想終了！！

っで現在にいたる

「貴様ら何をしていた！！！！」

そう叫んでくる剣士の一人に清明が口調を直し

「いや。ただ貴殿らが封印しかできなかった鬼と言う物がどれほどなものか見にきただけだ。だが見に着てみたらそやつのもだと思うがかなり力がもれておったから我々で封印を強化しただけだが何か問題でもあるのか？」

そを答えていた。清明の顔はすごい悪巧みのした顔になっていた
今のを簡潔に訳すとこお言っている
「何ショボイ封印してんだか？こんなショボイ封印しかできないのお前らは？それくらいで俺の仕事の邪魔してきたのかこの馬鹿が！！！」
っとま、こんな感じだろうそれを聞くと向こうのまだ若い剣士が食いついてきた

「我らが施した封印で力がもれるわけがなかろう！！貴様が壊したのではないのか！！！」

うん、まったくその通りですよ。封印壊しのはこいつです。それを聞くと清明はさらに黒い笑みを作った。

「ほぉ～我々が破壊したという証拠もなしに我らを疑うか・・・・まったくこれだから自らが正義だと思っておる者は」

「！！！！！貴様！！！！！！！！我らを侮辱するか！！！！！！！！こうなったらこの場で貴様らを切り捨ててくれる！！！！！！！！」
そう叫びその場にいた２０人の剣士は抜刀した。だがこの場にいる剣士は、清明と俺にとっては技の練習代にもならないような者達ばかりだったが剣を先に抜いたのは向こうだったのでこれでたとえ殺しても正当防衛と言える。清明は、最初からこれを狙っていた・・・・まったく腹黒なやつだなぁ～でも、俺も結構頭にきてたから手加減はできそうにないな。

そう考えてるうちに俺達に切りかかってきた。しかし、それを俺達は軽く避け俺と清明で１０人ずつ蹴り飛ばした。何人かは今の一撃で気絶していた。おぃどんだけ弱いんだよ・・・・
また、切り込んでこようとしてきたので今度はもう殺すかっと俺と

清明が考えていると

「貴様ら待て！！！！！！」

その声で切りかかってきた者達は動きを止めた

その声がしたほうを見るとそこには中年くらいの男が何人かの部下を連れていた

「頭首なぜとめるのですか！この者どもは我らを侮辱したのですぞ！」

「だまれ！貴様らのことは先ほど報告を受けた。この馬鹿どもめ！！貴様らは害をもっていない妖怪までも、勝手に討伐さらにそこにおられる清明殿の仕事の妨害行為、あまつさえ己らのあまい封印を強化してもらっておきながら切りかかるとは何事か！！！」

何だ神明流の中にもまともなやついたのか・・・清明めこのおっさんに真実を見せるためにここまでやったな。そう思って見ると清明も俺を見て「いいもの見れただろう？」っと言いたげな顔をしていた。まったくこいつは、そんなやりとりをしていると

「清明殿、そしてそちらの四季咲殿まことに我が流派の者達が迷惑をかけたまことに申し訳ない！」

そおいい俺達に土下座してきた。それをみて自分達がどんなに馬鹿なことをしていたのかを理解したのかさっきの馬鹿どもも土下座してきた。清明は「よっしゃ！！！！！勝った！！！！！」そんなことを絶対思ってる顔をしていた・・・・せめて笑いそうなのをもう少しは耐えろよな・・・・

「青山殿我々は謝っていただけたのでそれだけでかまいませんので」

俺が清明の変わりに答えた。清明は今口をあけると確実に大爆笑するだろうし・・・・

「それでは、我々の気が治まりません何か詫びになることはないでしょうか？」

う～ん。この手のは苦手なんだよな。なら・・・・

「それでしたら、そちらに自由に出入りできるようにしてもらってもいいでしょうか？」

「ふむ。その程度でよいのですか？でしたら構いませんいつでもお越しください。それで清明殿はなにかありませんか？」

清明は、俺の腕を引くといつの間に書いたのか俺に何か書いた紙を渡して変わりに言ってくれって言ってきたが・・・

「あ～清明殿は、神明流の技が示されている書物を欲してしるようですね」

「な！神明流の技をしめしている書物ですか・・・・・」

ま、無理だと思うけどね。それにしても何手もの要求してやがるんだよ清明は、清明も無理だと思ってるらしく続きに無理だったら金でいいぞっと書いてあったそれで宴会しようとまで書いてあったがそれはおいておくと

「うむ。わかりました。我が流派の秘伝書をお渡しいたしましょう」

へ？鳩が豆鉄砲くらったかのような顔を俺と清明はしてた

「よろしいのですか？」

「えぇ。構いません。我らはそれほどのことをしてしまったのですから。都で1、2を争う最強の陰陽師に剣を向けあまつさえ妨害行動それらを考えれば我らは殺されてもおかしくはない立場です。それが書物数冊でこの流派が救えると思えば安いものです」

そういって俺達に書物をいくつか渡してきた。

「それでは、我らは失礼します。鈴殿、清明殿寛大な御処置に感謝します。いつでもおこしください」

それだけ言ってこの場を去っていくのを俺達は、ただ黙って見つめそれから俺の家まで戻ると

家から、翠華、幽香、妹紅、睡蓮が出てきた。睡蓮のことは、家に飛ばす前にある程度教えていたのでそこまで何か言われなかったが

「主様。なぜ最初に家に帰ってこられなかったのですか？」

「そうよ。鈴、何でそこの馬鹿の所に行ってるのかしら？」

「鈴さん。何でですか？」

「主。無事で本当によかった」

うん。睡蓮以外は、俺のこと心配してくれてなかったんですね。睡蓮だけが心配してくれたことに対して俺は、背伸びをして睡蓮少し屈んでと言い彼女の頭を撫でながら心配してくれてありがとうと言

うと睡蓮は、顔を真っ赤にそめて「そ、そんなことはあたりまえです！主のことを心配しないわけがない」そお答えた。でも、周りの人からは黒いオーラが出ているのが見えた・・・・何で！？俺何かしましたか？清明に助けを求めようと思い見ると

「くくくくくっ！！！」床を叩きながら笑っていた。ってこうなったのお前のせいだろ！！！！

「ここに最初に帰ってくる予定でしたが！そこにいる馬鹿に拉致されたから戻ってくるのが遅れました！！！」

その答えを聞くと3人は清明を見た。清明は、顔を青から白に変えて逃げ出した。それを追うために3人は飛び出した。

「清明。君の犠牲はって犠牲ってわけでもないか。もともとあいつのせいだし」

「主あの馬鹿はほっておいてよろしいのですか？」

「あぁ～あいつはある意味で最強だから大丈夫だろう」

「はぁ～わかりました」

「そんなことより睡蓮ってお茶っていれれる？」

「それくらい任せてください」

「じゃ、お願いね～♪」

それを頼むと俺は縁側まで移動し睡蓮のいれてくれたお茶を飲みながら

「はぁ～平和だな～～」

「そうですね。主」

そんなやりとりをしていると

遠くから「鈴の裏切り者！！！！！！！！！！！！」

っとその後

「ぎゃあああああああああ。その間接はそっちに曲がらない！！！！！足はそんな風に曲がらない！！！！！！頭が割れる！！！！！！！！！！！」

っと言った幻聴が聞こえた気がしたけど気にしないことにした・・・・・・・・・・・・

馬鹿でもたまにはマジメになる

あの後、清明はボロボロだったが３０分もしないうちに復活し「あ～、死ぬかとおもったぜ！」っと言いながら親指をたててながら笑っていた。こいつ俺より強いんじゃないのか？そのまま清明は神明流のから騙して？貰ってきた書物にある技を自分自身で扱いやすいように改良をして新しい技を作ってました。（ま、俺もいくつかオリジナルの技作ったけどさ）。ちなみに妹紅がある程度薬を作ることができるようになった。それで、俺に戦い方を教えてほしいっと言ってきたので俺と清明だとまともに教えることは難しそうなので翠華が、教えることになった。たまに幽香もこれに参加するが幽香が参加すると基本模擬戦形式になるのではたからみればただの虐めてるようにしか見えないしかし、それを俺と清明はとめることはできない！なぜかって？それはもちろん俺達に飛び火して今度は俺達が相手しなければならないからだ！！・・・・すまん。妹紅、君の犠牲は無駄にはしないよ。妹紅と翠華と幽香が模擬戦やってる間は、俺は結界を張りながら縁側に座り睡蓮がいれてくれたお茶を飲んでいる。あ、ちなみに清明は、３人の流れ弾などで毎回倒れている。睡蓮は、戦闘もできるがどちらかというとそっちは好きではないと言うことで家の家事全般を任せている。前までは翠華、幽香、たまに妹紅が交代で食事の準備をしていたが、睡蓮が始めて料理をしたものを食べると３人は「「「負けた・・・」」」とつぶやき睡蓮は、勝ち誇った顔をしほかの３人は悔しがって料理の練習をするようになっていたっけ。

「ん～。あ、そうだ妹紅～」

「なんでしょうか？鈴さん？」

そう言いながら俺のほうに歩いてくる妹紅。あ、今清明踏んた（一応あいつ身分それなりに高いんだけどな～あ、グェ！とか言ってる）それは、さておき

「いや、たださ。妹紅の御父上の不比等のおっちゃんはどうしてるのかなって思ってさぁ～妹紅は、基本ここにいるけど心配とかしてるのかなっておもってさ」

「はぁ。そのことですか。お父様は、飽きもせずに”蓬莱山　輝夜”の所に通っています」

「あ～そうだったのか。何だかごめんな？」

「？？何で鈴さんが謝られるのですか？」

「いや、妹紅もさそろそろ家に帰りたいのかと思ってさ、いつまでも俺の家にいたくないだろ？」

「い、いえ！滅相もない。私は、そんなこと思ってません・・・・・・・・できればずっといたいですし／／／／／／／／／／／／／」最後の方は聞き取れなかった・・

それにしてもあの妹紅には悪いけど不比等のおっちゃんいい加減にあきらめたらいいのに・・・・

「輝夜姫のことでならいいこと聞いたぞ？」

そういいながら清明は復活した。（どんどん復活するまでの時間が短縮していくこいつ本当に人間！？）

「清明いいことって何だ？」

妹紅も首をかしげながら気にしていた。首をかしげるポーズがすご

く可愛いと思ったのはきっと俺だけじゃないだろう・・・

「あぁ～いいことってのはだな。あ～説明するのめんどくさいからこれみろ」

そう言うと清明の式神のカラスの太郎名前は、面倒なのでそうしたらしい・・・・すごい不憫だ

そういうと式神の目が光俺達に直接自身が見た映像を頭に流してきたそこでは

輝夜姫に求婚している人達にそれぞれ課題をだしている場面だった

「皆さま、本日はお集まりいただきありがとうございます。此度は、求婚への返答をさせていただきます」

「私には、皆さまと結婚する気はありません。ですが、皆さまは諦めてはくださらないのでしょう」

ま、これで納得する分けないな

「ですから、あなた方に一つずつ難題を出させていただきます」

そう言うと、蓬莱の玉の枝　仏の御石の鉢　龍の頸の五色の玉　火鼠の衣　燕の子安貝を持ってくるようにと言っていた。

俺は、それをみると

「っで鈴どうだ？なかなかいいことだったろ？」

「まぁ～いいことって言えばいい事だけどさぁ～。この課題って普通・・・」

「あぁ。お前の考えてる通り無理だな」

「鈴さん？今の課題ってそんなに難しいのですか？」

「うん？あぁ～難しいというか無理だな」

「・・・・・無理なんですか」

妹紅は、俺の言葉を聞くと少し悲しい顔をしていた

そこえ清明が

「妹紅？たしかに無理なものだけどよ。そこまで輝夜姫は結婚したくないんだろう」

「そうだな。ただ嫌ってるだけで結婚しないわけではないみたいだしな」

俺達の言葉を聞くと元の顔に戻っていた

「そうですね。しつこく通いつめてるお父様にすら嫌いとは言ってないみたいですし」

それにしても、このイベントが起こったってことはそろそろ月のからの迎えが来るころに迫ってきたなま、いいか。そのときになったら考えればいいし

「さぁ～って気分転換にお菓子でも食べますか」

「おぉいいね～もちろんお前の手作りのやつだろうな？」

「あぁもちろんだ！」家事を睡蓮がするようになってから唯一許されたのがお菓子作りだ・・・主にダンゴとかケーキを作る

「鈴さんのお菓子ですか！！！」すごい目を輝かせている。

「あら。久しぶりの鈴のお菓子ね。楽しみだわ」分かったから、よだれ拭きなさい・・・

「主様の菓子かほんとうに久しぶりですね」翠華、お前は少し食べるの控えなさい・・・

「我は、菓子を食べるのは初めてじゃな」最高の物を作りますよ

それから俺は台所にいき、ダンゴと桜餅を作った。家事を奪われた俺に唯一のこされた。俺の特技なので結構レベルが高くなるように勉強した！

っとま、そんなこんなしているうちに輝夜の課題の期限がきた。結果から言うとやはり全員が不合格でみな偽者を持ってきてすべて見抜かれた。俺達がその場面を清明の式神を通じてみていると妹紅は、自分の父が偽者を持っていったことに怒っていたが輝夜に対しては怒ってはいなかった。さすがに本物が見つからなかったからと言って偽者はどうかとは思ったけどま、本物は、今天照がなぜか全部持っていた。理由は、「見た目すごい綺麗でしょ？」以上！それだけの理由かよ！！！ま、それはさておきその後俺と清明は帝に呼び出された。呼び出された理由は、輝夜姫が月に帰るのを阻止してくれという内容だった。さすがに断ることもできなかったので引き受けることにした。俺は、その報酬である土地がほしいと言うと先払いで報酬をくれた。ほしかった土地は、まぁ～わかると思うけど世界樹があるあの土地でこれで正式に俺の土地になったけど。

「はぁ～どうするかな。月からの迎えで来るの絶対永琳だろうなぁ～今更どんな顔して会えばいいんだよ・・・・・・」

俺にとって一番の問題はそこだった。俺が悩んでいると清明が俺の方に歩いてきて

「鈴・・・お前が何を悩んでいるかはわからんが。お前はお前のやりたいようにやればいいさ」

「俺のやりたいように・・・・・・っか」

「あぁ、今のお前は何だか見てるのが辛いからな。」

「ふふ。お前がそんなことを言うなんて珍しいな」

「俺だってたまにはお前に助言くらいするぞ」

「嘘をいうなよ。お前がまじめ言うとお前らしくなぞ・・・・・・でもよ、ありがとうな少しは楽になった」

「くくくく。違いない。だがな我が友が悩んでいるんだたまにはまじめになるさ」

「ありがとよ。我が友」

そう言うと俺と清明は静かに家に帰って行った・・・・・・・

再会

あれから数日経ち今日の夜ついに月からの迎えが来る。輝夜の家のまわりには帝からの兵がかなりの数いるが正直無理だろうと確信している。いくら数がいようが銃には勝てない・・・・。一応俺達も来ているが俺はもしかしたら輝夜に顔を知られてるかもしれないのでローブを着て来た。でも、ここに来る時翠華は、輝夜が月人だと気づき行く事はないと言ってきたが、俺はそれでも「ま、昔守ると決めた人達だし。最後まで自分の言葉には責任もつよ」そう言うと飽きれたような顔をしていたけどなっとくしてくれた。翠華からしてみたら俺だけ置き去りにして翠華やほかの妖怪の相手を俺に全部やらせたって感じてるんだと思う。まぁ～あの状況じゃそう思ってもしょうがないな・・・・ま、それはさておき一応挨拶はするべきだとまためずらしく清明が言ってきた。だが、俺の名前はださないようにしてくれと清明に頼んだ。清明は少しなんでだ？思った顔をしていたが俺にも事情があるんだと思い理由を聞いてはこなかった。ほんといいやつだな・・・・

俺達は、一礼をして中へと入り、輝夜のいる部屋へと向かう
襖をあけると輝夜がいた。しかし、その顔にはたまに清明の式神を通して見た輝かしい笑顔は無く、覇気も元気も無く、ただ黙って下を向いて俯いてるだけだ。
それでも俺達が来た事を知ると、顔を上げて笑顔を作る。正直見ていて苦しい。可哀そうだ・・・・・

「よくおこしくださいました。あなたは、清明殿でよかったかしら？」

「えぇ。私目が清明でございます」

輝夜は興味がないような目を向けてきている

「ところで後ろのあなたはどなたかしら？見たところまだ子供みたいだけど？」

こ、子供・・・・ま、今はそれは置いておく。清明はなんていえばいいか小さく聞いてくるから弟子かなんかと答えるように言う

「は。この物は私目の助手です」

「そうですか・・・・」

「輝夜姫様、我らは帝からの直接の依頼で貴方様を護衛し月に帰してはならないと依頼されました」

「そう・・・・でも、無理よ。いくら貴方が強くても月人はこの星には無い武器を持っている。それに貴方はただの人間。勝てる望みは無いわ」

「ならば輝夜姫様は、月に帰りたいのですか？」

「帰りたいわけ無いでしょう！　もうあんなところに……でも、私がここにいたらきっとここに住んでいる人達は殺されるわ！だから・・・だから私は・・・・」

「ふむ。なら、その月人に我らが勝てばいいのですな？なら我らが負けなければいいただそれだけですな」

「あ、貴方自分がなに言ってるのかわかってるの！？いい！？月人は「強い武器を持ってれば絶対勝てるなんてわからないだろう！！」

！！？？」

「あんたは、ただどっしりと構えてればいいんだ！あんたがそんな態度だとあんたを守るために集められた兵士達が可愛そうだ！」

俺は、たまらず叫んでしまった。やっちまったな・・・・

「確かにそうね。ありがとう助手さん。そういえば貴方のお名前はまだ聞いてなかったわね。教えてくれないかしら？」

清明は、どうすると聞いてくるがま、仕方がないいきなり偽名なんて使えないしな

「私の名は、鈴と申します」

俺が鈴と名乗ると少し驚いたような顔をしたが、そんなわけないかと思ったかのような顔をした

「どうかなさいましたか？」

「い、いえ。ちょっと私いえ私達が信仰してる神様と同じ名前だったから驚いただけよ」

「そうでしたか。神と同じ名前なんでその神様はどのような神なのですか？」

「そうね。その方はね常に悲しみを背負ってる方と言われてるは、後はその方は神様と祭り上げられるきっかけになったことなんだけど大勢の人を助けるためにただ一人で化け物達に立ち向かって自分の命を犠牲にして助けた方よ」

「そんな方と同じ名前だなって光栄です」

「ちなみにね。最初は名前はなかった。見たいなんだけど私の大切な人がその人に名前をあげたんですって」

清明は、神に名前を付けた人に興味をもったのか

「それは、すごいですね。名を与えたということは苗字はあったのですかな？」

「えぇ。そうらしいは、その方の全部の名は”四季咲　鈴”と呼ばれてるのよ。ちなみに感情をつかさどる神として月だと祭られてるは」

清明は、かなり驚いた顔しているが感情をつかさどるということに気になっているようだ。

「なぜそれだけ大きなことをした神が感情をつかさどる神なのですか？」

「えぇ。それについては私もわからないけど自分自身の感情を武器として戦っていたらしいのよ」

「そうでしたか・・・・。貴重なことを教えていただきありがとうございます」

「いえ。では、後はよろしくお願いするわね」

そう言うと俺達は、外に出た・・けど清明は俺に聞きたいことがあ

ると言ってきた

「鈴、単刀直入に聞く・・・お前はさっきの話の中にでてきた神であってるか？」

「はぁ～まさかばれるとはな。あぁ、あれは確かに俺だよ・・・・」そう言うと俺は、飽きれたような声をだしていた

「あの話だとお前は死んだのではなかったのか？」

「いや？死んではいなかったな。ただ力使いすぎで落っこちて寝てただけだ」

「寝てただけって・・・・くくくっ。やっぱお前らしいは、「あ、ちなみに言っておくけど翠華があの話に出てきた化け物たちのボスだからな？」はぁ！？本当かよ！？」

「あぁ、俺と戦って俺と契約したいって言ってきて契約したんだよ」

「ちなみに聞きたいことがあるんだがいいか？「なんだ？」お前と契約すると何かいいことあるのか？「たぶん不老になるんだと思うぞ？」・・・・・・それ本当か？」

「たぶんだけどな翠華は不老になったとか言ってた気がしたし」

「よし！なら鈴これが終わったら俺とも契約しろ！！不老ならお前といられるしそっちのほうが面白そうだしな」

「はぁ～わかったよ。でも、後悔するなよ？」

「あぁ。わかってる。でもな、友を残して死ぬくらいなら俺は不老になることを選ぶぞ。それにこの仕事を最後に陰陽師の仕事はやめるつもりだ」

「まったく。お前は、わかったお前の覚悟はしっかりとわかった。これが終わったら契約だ。我が友・・・いや親友」

「お、お前にしてはめずらしいないつもは恥ずかしがってるのによw。ま、よろしくだ親友」

俺達二人がそんなやりとりをしていると月人の宇宙船がやってきた。そして中から永琳と思わしき人物が出て来てまっすぐ輝夜の元に向かってくる。

輝夜は立ち上がり、永琳を出迎える。そして二人は抱き合った。

「永琳！　会いたかった。会いたかったよ～！」

輝夜が涙を流しながら永琳の胸に顔を埋めながら泣きじゃくる。また永琳も静かに涙を流していた。

俺は、永琳の姿を見ると誰にも気づかれないように涙を流した。これに清明は気づいたが何も言ってはこなかった。たぶん清明が俺の涙をみたのはこれが始めてだから何もいえなかっただけだろう・・・

「ええ輝夜。私もですよ。この日をどんなに待ち望んだか…。」

「永琳。私は月へと帰りたくは無いわ。一緒に逃げましょ？永琳がこの地上のことをあまりよく思ってないのは知ってるけど・・お願い・・・・」

二人はそのやりとりをしていた

「はい、輝夜あなたは本当に優しいですね。確かに私はここが・・・鈴が死んだここをあまりよく思ってませんけど。鈴がそんなことを望んでいるはずもありませんしね。・・・・・・少しの間、お待ち願いませんか？」

その問いかけに輝夜は頷き
うなずき返した。
そのすぐ後に船から出てきた男達の指揮官は、その場にいる全員に聞こえる声で

「これより大罪人の輝夜と裏切り者の八意永琳を抹消する！構え！！」

その声を聞くと永琳は、輝夜を庇おうとし彼女の前にでた。それと同時に俺もまた駆け出していた。清明は、俺達以外の兵士を術で眠らせていた。ナイスだ！

「撃て！！！！！」

指揮官の男がそう叫ぶと同時に俺は。隠していた翼を展開し。淫蕩の御身も展開し永琳達の前に割り込んで銃弾の盾になった。その勢いで俺のローブは外れ銃弾から輝夜を守ろうとしていた永琳はゆっくりと目を開け自分の前に立つ者の顔を見ると

「えっ・・・・・す、鈴？鈴なの？」

「うん。久しぶりだね。永琳。元気だった？」

ｓｉｄｅ　永琳

今私の前には昔私達のことを守るため一人で戦った。私の愛おしい人。鈴がいた。私の目の前にいる鈴に問いかけた

「えっ・・・・・す、鈴？鈴なの？」

「うん。久しぶりだね。永琳。元気だった？」

彼は、昔と何も変わらない笑顔で答えてきた。その答えを聞くと私は胸のおくが熱くなるのを感じた

今までずっと死んだものと思っていた人が私の目前にいる

「すぐに片付けるから」

そう言うと彼は、笑っていた。そして、あの歌を歌い始めてた

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　永琳

ｓｉｄｅ　鈴

俺の、姿をみると男達と輝夜はかなり動揺していた

「なぜあの神がこのような場所に！？」や「地上で生き抜いていたなんて」っと言った声が声が聞こえてきたが俺は、その言葉には耳を貸さずに俺の始まりの歌を歌った・・・

「　通りませ　通りませ　」

「　行かば　何処が細道なれば　」

「　天神元へと　至る細道　」

「　御意見御無用　通れぬとても　」

「　この子の十の　御祝いに　」

「　両のお札を納めに参ず　」

「　行きはよいなぎ　帰りはこわき　」

「　我が中こわきの　通しかな・・・・・・・」

その言葉と同時に俺の手には”悲嘆(リピ・カタスリプシ)の怠惰”が握られていた。

「なぜ、貴方様はその罪人達を助けるのです！！」

俺に向かってそう聞いてきた

「俺は、ただ守るべき者を守るだけだよ」

「！！！っ。ならば！貴方であろうと仕方がない！撃て！！」

だが銃弾は、発射されなかった

「何をしている！早く撃たないか！」

そう言うと指揮官の男以外は

「体長、我々にはこの方を撃つことはできません！」

そう言う兵士達は皆泣いていた。。。

「俺もこの人に銃なんて向けたくない！」その声と同時にほかの兵も銃を下ろした

「貴様らがやらいのなら。私がやるだけだ！」
指揮官が俺に銃を向けてきた。そして銃弾は撃たれた・・・・しかしそれは俺に撃たれなかった。銃弾は指揮官の部下が撃ったものでその銃弾は指揮官の男の頭を貫いていた。

「ありがとう」

俺はただそう言い返すと兵士は皆俺に敬礼していた。

「せめてもの恩返しです。俺達の先祖は貴方がいなければこの地上で化け物共に食われていたと聞かされました。そして、あなただけを地上に置き去りにしたことを後悔しておりました・・・・」

「そうか・・・あいつらの子孫か・・・そっか、ちゃんと生きてくれたか」
俺は、それだけでうれしかった。ちゃんと生き残ってくれたことがうれしかった

「この男は俺が処理をしておくから。この二人のことは見逃してくれないか？」

「わかりました。貴方様に会えただけで我々はうれしかった。では、八意様我らはこれで」

そう言うと兵士達は月に帰って行った。俺達もこの場に留まるのは危険なので一旦俺の家に移動したが永琳はまだ涙を流していた。輝夜は、放心状態って感じだ。清明は、笑っている・・・後で仕返しするか・・・そんな感じのことを考えながら俺は家に向かった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ鈴

めでたし？

さてどうしたものか・・・・
あれから俺達は、俺の家に戻ったんだけどさ・・・・・・・家の空気がすごい重いです・・・
翠華は、めっちゃ永琳を睨んでるし妹紅はやっぱり怨んではいないようだけど思うところはあるみたいで輝夜をじっと見ているし永琳も翠華のことを睨んでいる、輝夜は妹紅については少しはしってたようで申し訳ないような目で見つめている、睡蓮はどうしていいかわからずあたふたしている。清明は、珍しく黙っているし・・・どうにかしてこの場を切り抜けないとそう考えていると最初にこの空気の中で永琳が喋った

「・・・・そろそろ、説明してもらえるかしら。鈴あなたはあの後どうなったのかそして、どうしてあの時の竜がここにいるか」

まぁ。そうですよね

「う～ん、そうだね。・・・・・・じゃ、まずあの時のことだけどあの時永琳達は俺があそこで死んだと思ってたってことでいいのかな？「えぇ。あの時の戦闘であなたは死んだと思ってたわ」なら、あの時はね簡単に言うと力の使いすぎで落ちただけだよ」

「え？・・・・つまりあなたはあの時ただの力の使いすぎで倒れただけってこと？」

「うん？そうだよ。あの時は、それ以外だとほとんど怪我してなかったしね。ね？翠華？」

「えぇ。その通りです主様。私の全力の攻撃を受けても無傷でしたね」

「っと言うことだよ。翠華についてだけどあの後俺と契約して使い魔？になったんだよ」

「・・・・そぅ。そういうことだったのね（よかった。本当によかった鈴があの時無傷で・・・でも）それは、わかったけど」

ほぉ何とかわかってくれたか

『翠華。翠華』

『何ですか？主様？』

『もう永琳達の事睨んだりするのやめないか？あの時は俺がただ単に突っ込んでいっただけだからさ・・・・』

『わかりました主様。それに今この者の話を聞いていると本当に主様のことを心配していたようですし』

『やっとわかってくれたか『ですが！』ん？』

『私にとってはやはり”敵”かもしれません』

はぁ？敵ってなんのでしょうか・・・・・さっきまでの憎悪だけの睨み合いから今度は何だかわからないも感じでにらみ合ってるし・・・・何だか俺の身の危険を感じるが気にしないでおこう・・・

「そのことにはわかったけどね鈴・・・・・・・・何であなたの

家には今”女性”しかいないのかしら？」

へぇ？永琳さんあなたは何を言っているのですか？ちゃんと男の清明がいるじゃないですか？
そのことについて妹紅が

「あの～そこにいるば・・間違えた。清明さんがいるじゃないですか？」

「あら？そこにいる人も女性でしょ？骨格でみると完璧に女性のよ？」

「「「「「「・・・・・はぁ！？うそだぁ！！！！！！！！！」」」」」」

永琳と清明を抜かした。全員が叫んだ。ついでに幽香さんさっきいなかったですよね？いつ入ってきたんですか？

「あら？最初からいたわよ？」

さぃですか・・・・というか俺の考えを読むな！！！！！！！！！！！
それは、さておき

「え～っと清明って女なのでしょうか？」
俺めっちゃ同様してるな！うん！

「あ～あ、ついにばれちゃったか～そうだよ。女で間違ってないよ」

「え～っとそれじゃ何で男の不利なんてしてたのですか？」

そう妹紅が聞くと

「うん。理由としてはなんだけどね。。。。私がまだ子供の頃たしか6～7位の時に貴族のおっさんが私のこと襲ってこようとしてそんなことがあってそれから男装続けてたってわけだよ」

あぁ～そういうことか確かにこの時代ならよくある事だな・・・・・

「そうか・・・・」

「鈴は、私のこともう女ってわかったけどもう友じゃなくなったかな？」

清明は、そう言ってきた。目は、泣きそうな目をしていた。

「まったく。お前と俺は友じゃない・・・・」清明の目から涙があふれてきた

「そ、そうだよね。あははは・・・・私なんかもう・・」

「何泣いてんだよ。清明、確かにお前は友じゃないけどさ。前にも言ったろ？お前は、”親友”だってよ？」

「！？す・・・鈴。・・・・・あ、ありがとう。うっうあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

それから、しばらく睡蓮に清明をなだめてもらうことにした・・・・

・

「っと。それで永琳ほかに何か聞きたいことってあるかな？」

「うんうん。今はもうないわね」
少しすっきりしたかのような顔で笑っている

「そうか・・・・」

ほかの人たちももう特に話はないようだ。妹紅と輝夜は、二人で話し合っていたみたいで二人の間には特に蟠りもないようだ。だけどさぁ・・・さっきからこそこそ何を話しているのかすごい気になるんだよね。へ？何でかって？さっきから俺のことをちらちら見ながら顔を紅くしながら俺を見てるんだよしかも目が獲物を見る目なんだよね・・・・そういえば前に清明に思いっきり攻撃したなぁ～はぁ～今思うとやらかしたな・・・・・・・・・

「ふぅ～ごめん。さっきは取り乱してしまった」
清明がやっと復活したけどさ無理して威厳あるような喋りしなくてもいいのにな・・・今は何も言わないでおこう

「いや。もう気にするなよ。っとそれでどうした？何かあるのか？」

「えぇ。そこの月人2人だけいつまでもここにいるわけにもいかないんでしょ？」

清明がそう言うと二人はゆっくりと頷いた

「ならここから東に行ったところに迷いの竹林と言う場所があるからそこに行くといいわ。そこは強力な霊脈で、入った人間を惑わすように出来てるわ。だけど彼方達二人ほど抵抗力が高ければそれをある程度緩和できるはずよ。だからそこに隠れるといいわ」

清明は、二人にそれを提案してきた

「わかったわ。私達はそこへ行くことにするけど鈴達はまだここにいるの？」

「いや。そろそろここを離れようと思うよ。さすがに何年もこの姿ってことで怪しまれてきてるところだしね」

「そぅ。わかったわ。ならたまには遊びにきてよね？」

「はいはい。わかったよ」

そう言うと二人は迷いの竹林に向かって行った

「さてと、それじゃこれからについて話合いますか」

俺がそう言うと

翠華が

「そうですね？でもここを出て行くとなると家などはどうなるのですか？」

「あぁ。そのことに関しては何とかなってるよ。前に帝に世界樹のある土地を報酬でもらったからそこに家を建てようと思ってる。あそこなら結界もはれるから変な奴らは襲ってもこれないしね」

「あそこですか。なら私からは特にないです主様」

翠華は、納得してくれたようだ

睡蓮は

「我は、ただ主に従うだけです」

納得？してくれた。
幽香は
「その土地ってかなり広いのかしら？「かなり広いかな」なら花を育てれそうね」
納得してくれたようだ
「うん。それじゃ、明日の朝市に引越し準備整えて移動しますか」
「わかりました」
「はい」
「わかったわ」
「うん」
「わかりました」
って一人多くない？
「そういえば妹紅は、もう家に戻った方がいいんじゃないか？」
「え？私は、鈴さん達についていきますよ？」
「俺らに付いてくるのか？でもなぁ～～～」
さすがに俺らについてくると寿命という問題があるんだよな・・・・
俺のせい？でたしか蓬莱の薬だったかな？あれ出てこなかったし・・
・

「あ、鈴さん私の寿命のことにしてるのでしたら。問題ないですよ？さっき輝夜から蓬莱の薬という薬をもらいましたので（これずっと鈴さんといられる！！ほかの人達と同じ土台に乗れた！！輝夜は、これでいいライバルね♪って言ってたけど・・・絶対負けない！！！）」

ってもらってるのかよ！しかも直接！！！！

「はぁ～という事はどんな効果なのかもわかってるんだな。わかったなら付いてくればいいよ」

俺は、そういうと妹紅は喜びながらほかの連中に向かってなぜか挑発的な笑みを向けていた周りの連中もなぜかしてやられた！！といった感じの顔をしているし・・・まぁいいか・・・・

あ、そうだ。清明だけどこいつは結構というかこの中だと俺を抜かしたらたぶん一番強いはずだから俺と契約結ぶよりだったら神に近い位になった方がいいと思んだよなぁ～

後で、天照にその辺相談しに行ってみるか・・・・

めでたし？（後書き）

久しぶりにやっと更新できました。最近ちょっと入院してて更新できなかったんですよね～更新遅れてまことにすみませんでした！！！！！！！！

神様って何だろうね・・・・

とりあえず、清明の事を天照に相談しにきたんだけどさ・・・・・・

「へぇ～この子が鈴君なんだ～かわいいな～」

「写真とってもいいですか？」

「鈴久しぶりね？ほんとかわいいわね」

俺は今神の領域に清明＋妹紅を連れてきているけど来た瞬間天照に捕まった。ついでに天照の知り合い？みたいな2人のお姉さんもいた・・・・清明と妹紅は何が起こってるのかわかっていないようで唖然としている

「あの～？天照さん？」

「ん？鈴どうしたの？」

「俺は今何をされているのでしょうか？ついでにそのお二人はどなたでしょうか？」

「今鈴が何されてるかだけど。私に抱っこされてそこの二人に頭を撫でられてるところよ？そこの二人だけど私の友達であなたのファンのアテネとアルテミスよ」

「よろしくね。鈴君♪」

「よろしく」

「はぁ。よろしくです。って何でそんな女神様が俺のファン！？と言うか何で俺にファンがいるの！？」

「あ～それなんだけどね。この間ここ着たときとかに鈴の写真とか映像保存してたんだけどそれを見たほかの神達がさぁ～すごく鈴に興味もったんだよね。だからファンができちゃったってわけだよ」

「天照・・・あんたは何をやってるんだよ・・・」

「あはははは。あ、ちなみにファンクラブもちゃんともうあるよ？その二人は会員ナンバー2と3だよ？1はちなみに私だから」

ファンクラブあるのかよ！！しかも3人ともシングルナンバーかよ！！！

「ほんと何してんだよ・・・・・」

「気にしない気にしない～鈴？細かいこと気にしてると疲れるわよ？」

誰のせいだよ！！！！！！

「そんな鈴にいいもの見せてあげる！「・・・・何ですか？？」ジャジャ～ン。『弟にしたいランキング』『嫁にしたいランキング』『婿にしたいランキング』『孫にしたいランキング』ｅｔｃどう？うれしいでしょ？」

もう何があってもツッコミをするのはやめよう・・・・たとえ俺の性別を間違っているような物がまざっていても！！

「もう何でもいいですよ・・・・。というか今日は少し相談があって着たんですけど」

「ん？何？鈴の頼みなら大体は聞いてあげるわよ？」

いいのかよ！女神ちゃんと内容聞いてから言わないとそのうち騙されるぞ！俺は、騙したりはしないけど！

「あ～そこで固まってる清明の事なんですけど。俺と契約してしまうよりだったらほかに何かいい方法ないかなっておm「あ～なら調度いいわ。今欠員が出たって言ってた人がいるからその人に頼めばそこの清明だったかしら。その子も神になれるわよ？」せめて最後まで言わせてください・・・・と言うか神にも欠員ってあるんですね」

「あるわよ？ま、それは置いて置いてアテナ？あなたの御父様を呼んでもらえるかしら？」

「別にかまわないわよ」

そう言うとアテナは念話？みたいな事をしていた

「すぐ来るそうよ。御父様も鈴君のファンなのよ」

おい本当に大乗なんですか神様！っていうかアテナの父親って確か・・・・

「おぉ。待たせたの」

「御父様遅いですよ？」

いやいやかなり早いと思いますよ！？さっき連絡してもう来てるんですよ！？

それにしてもゼウスって俺のイメージ通りの神様でした。白髪のお爺さんで髭も白！！これこそ俺がイメージしてた神様ですね！

「すまぬすまぬ。おぉ！！この子が鈴君か～かわええの～」

「はじめまして。ゼウス様、四季咲　鈴と申します」

「礼儀正しいいい子じゃの～そんないい子にはアメちゃんをあげようかの」

「御父様それよりもそこにいる鈴君のお願いでそこにいる清明殿を神にすることはできますよね？」

「鈴君の頼みならかまわんよ。調度欠員がでている神があったしの・・・・トールはいるかの？」

トールってもしかしてあのトールですか！？

「はいはい・・何でしょうか？ゼウス様」

どこから出てきたんですか！？見た目・・・・ぱっと見２０歳後半で目の下にすごいクマがあり黒髪の中には白髪が混じっている・・・・あぁ～苦労人何ですね・・・

「そこにいる清明ちゃんを欠員だった神の”ロキ”として手続きをしておいてくれんか」

「わかりました・・・・ゼウス様早く書類整理してくださいよ・・・・・」

そう呟くとトール？は帰っていった。というかゼウス様仕事してください。早くしないとあの人死ぬかもしれませんから・・・・

「これで鈴の頼みは終わりかな？」

「え、えぇ。そうです。ありがとうございます。ゼウス様」

俺がお礼を言っていると後ろの二人は、今起こった事に戸惑っているみたいだ・・・普通そうだよね・・・

「しばし書類の手続きもあるから。清明ちゃんはちょっと付いてきてくれんか」

「は、はいわかりました」

清明はゼウスについて行った

さてと・・・どうするかなぁ～

「す、鈴さん・・神様って何なんですか？」

妹紅は俺にそう聞いてきた。妹紅よ俺も神とは何なのか知りたいよ・・・・・二人して哀愁漂う目をしてみた

「あ、そうだ鈴。そこにいる妹紅ちゃんちょっと借りてもいいかな？」

「ん？何で？」

「それはね？妹紅ちゃんにちょっと稽古付けてあげようかなって思って」

「え？何で神様が直接私に稽古を？」

（妹紅ちゃん。あなた清明が神になったらまた周りの人達と差が生まれるわよ？あなたの周りだけ強くなってあなただけ何もなしだと不公平じゃない？だからよ）

（っう確かに。清明さんも神様になっちゃうし不老になっちゃうと私がいろいろと不利になりますね・・せめて力関係だけでも均等にしておかなくちゃ！！よろしくお願いします！！！）

「よろしくお願いします！！！」

「それじゃ鈴いい子にしてるのよ？」

「俺は、子供か！！」

そう言うと俺をその場に残して４人はどこかに行ってしまった。

「って俺一人かよ・・・さすがに暇だ」

俺がそんなことを言っていると俺の後ろの方から声がした

「暇そうじゃの～」

振り向くとそこにはゼウス様＋似たようなお爺さんがいた

「あ、ゼウス様手続き終わったんですか？」

「いやまだじゃよ？後はトールと天使達に任せてきたのじゃ」

あぁ～トールさん＋天使の方々理不尽ですね・・・

「あの～隣の方はどなたでしょうか？」

「あぁ。わしの名はオーディンだよ」

「四季咲　鈴です。よろしくお願いします」

「おぉ。本当にゼウスが言っていた通り礼儀正しい子だだね」

「そうじゃろ。そうじゃろ」

「うむ。そんないい子にはお小遣いをあげないとな」

「その通りじゃなオーディンよ」

神様がお小遣いって・・・・本当におじいちゃんだな・・・・

「とりあえず一度ワシらの部屋に移動するかの」「そうだな」

「へ？」俺が何か言う前に二人のおじいちゃん神様が俺を担いで移動した・・・・・・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー神の領域中の５日後ーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

「ふ～稽古は終わったわね。妹紅ちゃんがすじがよすぎていろいろ教えられて楽しかったわ」

「まったくね」「そうね」

「もう、つらいですよ。。。。。」

「っとそういえば鈴はどこにいったのかしら？」

４人がもといた場所に帰ってきた。続いて

「やっと手続きが終わったわ。ってあれ？鈴はどこ？」

清明も無事に手続きを終えたようで鈴を探すが鈴の姿はなかった

「あ～鈴君がどこにいるのか分かったわよ。御父様とオーディン殿が連れて行ってたみたいで今こっちに送ったそうよ」

それと同時に

「あ。お帰り鈴？どうしたの？すごい疲れきった様な顔して？」

天照が聞いてきたが・・・

「・・・あの二人にお小遣いと言う名の宝具の概念貰ってました・・・・」

「あはははは・・・・御父様とオーディン様ならやりかねないわね・・・」

「概念って言ってたけど体は大丈夫鈴・・・ちなみにどんなの？」

「体は大丈夫だけど・・・・もう疲れた・・・どんな概念かと言うと俺の翼から羽を飛ばすとクナイみたいになって飛ばすことができるんだけどまずそこで形が二人のせいで黒鍵の形になりました。ついでに”破魔の紅薔薇”の概念が付与されました・・後は淫蕩の武器に”全て遠き理想郷”の概念が付いて前まではすごい硬い盾だったけどもう壊すの不可能の盾になりました。後は、俺オリジナルの固有結界を無理やり覚えさせられました、大体はこんな感じですね。いったらきりがないので・・・」

「そ、そうなんだ・・・・そ、そうだ鈴あなた引っ越すそうね。家はまだ立ててないみたいだから私達3人からご褒美って事で立ててておいてあげるから一度戻ったらもう建ってるとはずよ」

「あぁ～ありがとう。何だか3人が神々しく見えるよ～～」微笑んでみた

「そ、そう。ありがとう鈴／／／／／／／／」（やっぱりかわいいわね！！！）

「どういたしました／／／／／／／／／／／／／／」（あぁ～かわいすぎます。私の弟または婿にほしい！！！）

「これくらいお安い御用よ／／／／／／／／／／」（お持ち帰り！！！！！！！）

「「やっぱり鈴（さん）かわいい／／／／／／」」

「さてと、清明と妹紅そろそろ帰って引越しをしようか～それじゃ、3人ともまたくるね～♪」

俺は、そう言うと2人を翼で拾い上げて飛んで帰った・・・・・・

引越しそして神様って何だろうね？

神の領域から戻ってきた。俺達は、世界樹のある場所まで引越しの荷物をまとめて来たんだけどさ・・・・・・3人娘？女神？それはおいておいて確かに家を建ててくれるって言ってたけどね？物には限度ってものがあるよね？俺の目の前には紅魔館より確実にでかいと思われる洋館が建っている。

「いい家ね」幽香は、気に入っているみたい

「大きすぎますね・・・・」翠華その意見には、俺も賛成です

「お掃除が大変そうです」睡蓮、確かに大変だろうね・・・・その辺も相談してみようかな？

「「あはははは」」清明&妹紅事情をしってるから笑うしかないみたいです・・・・

「はぁ～無茶苦茶だな・・・・ま、家もらえたからよしとするかな・・・・・」

もう驚きもツッコミもしない方がいいよね・・・

「とりあえず自分の部屋とか決めて引越し終わりかな」

俺がそう言うと皆仲に入っていった。俺は、自分の部屋を決めると持ってきた物の整理も終わった。女神達が気を使ってくれたのか俺の薬用の道具や材料はもうこの屋敷の中に移動されてあり前々から欲しかった俺専用の作業部屋もあった。もちろん材料や設備もかな

り増えてました、その辺はすごく感謝します！！！
そんな感じで俺は、自分の整理はすぐに終わったから屋敷を見ていると地下もこの屋敷にはあるみたいで地下を散策してみたらかなり大規模な図書館と研究室や宝物庫といった感じのものがあった・・・・・・・それは、いいんだけどね図書館にあった本が問題がありましたよ。
何で魔道書や魔法書はたまた禁書ばかりあるんだよ！！！！ん？手紙？俺は図書館の中央部分にある机に手紙があったので呼んでみると
そこにある書物や武器は、私達からの引越し祝いです。
ちなみに書物に関しては”とある魔術の〇〇目録”の１０万３０００冊
やこの世界の禁書指定されている本などをとりあえずまとめてみました
それから、宝物庫にある物はゼウス様やオーディン様その他創造神クラス
の方達からのお祝いです。概念だけじゃ不安だから本物の宝具を送ったみ
たいなのでよかったですね？それはさておきその家かなり広いじゃないじゃ
ないですか？もし人を雇いたいと思ったら連絡してね？ついでに手紙のそ
ばにある本を見れば人形作りの知識が得られるからそれで労働力創るのも
ありだよ？それじゃ
ファンクラブ一同&その他神様
一同より
へぇ～そうなんだ～・・・・・・もう俺、疲れたよ・・・・・・・・

何で引越し祝いで俺はこんなに胃が痛くなるんだよ・・・・

「とりあえず本読んで見てみるか・・・・・」

本を読んでみようとしたら触れただけで内容が頭の中に入ってきてそれを理解できたけどさ・・・・

創り方かなりグロイですね・・・創り方が空の境界での人形の作り方なんですよ？あれ結構グロすぎです・・・・しかもちゃんと材料あるし・・・・・

「はぁ～とりあえず天照に連絡してみるか」

『あ、あぁ～聞こえてる？天照？』

『聞こえてるよ。連絡くれたってことは手紙見たんだね。それで家はどうかな？感想聞かせて』

『あぁ。家はすごく満足してるけどさ。中が特に地下がやばいだろう』

『あはははは。本とか喜んでくれた？ファンクラブのみんながいろいろ持ってきてたからね～ちなみに宝具に関してはゼウス様達が持ってきたけどさすがに私もあれはね・・・・』

『そう思うならとm「あの人達止める気力なんてないからね？」・・・さいですか・・・』

『っとそれはさておき人を雇いたいんだけどどうすればいいかな？』

『あぁ～そのことねなら調度いい人がいるからその人と直接話して・

・・今変わるから』

電話感覚で大丈夫なのかよ・・・・・・・・・・・・・

『もしもし変わったわ。私の名前は神綺よ。魔界で神をやってるの、よろしくね？』

『あ、はい。よろしくお願いします』

『礼儀正しいのね。っとそれでね魔界にいる悪魔の中の爵位級悪魔で没落したのがいるのだけど鈴君のところで働かせてくれないかな？とても優秀な悪魔だからきっとやくにたつと思うわ』

あれ？魔界って悪魔だって魔物とか魔人とかそんなのだった気がするけどま、いいか。

『それならうちで雇わせてもらえますか？今人手が欲しいので』

『わかったわすぐそっちに召喚するから。・・・ところで鈴君？うちの娘と結婚しない？それか私とでもいいから結婚しない？って天照なにするのよ！？邪魔しないで今大事なこうｓｙ・・・・・・』

爆破の音が最後聞こえたけど気のせいだよね？神同士が殺りあうわけないよね・・・・ま、いいか

俺がそんなことを思っていると俺の目の前に魔方陣があらわれそこからかなり優しそうで渋い？人が出てきたたぶんさっき言っていた悪魔だろうけど

「あなたが俺に雇われてくれる悪魔さんでいいのかな？」

「あぁ。君が新しいわたしの主人か。わたしの名はヴィルヘルムヨーゼフ・フォンヘルマンだ。君は神で間違っていないかな？」

「そうです。俺は、一応神をやっている。四季咲　鈴だよ。質問なんだけどこの場合って契約すればいいの？」

「そうだね。契約と言っても君から魔力供給をしてもらうだけでかまわないよ。」

「それくらいなら大丈夫だよ。ならこれからヘルマンにはこの屋敷の執事をやってもらうことになるけどよろしくね。今この屋敷で使用人はまだヘルマンだけだけ今から俺が人形を作るからそれで労働力は確保できるよ」

「Ｙｅｓ，　Ｍｙ　Ｌｏｒｄ　これよりよろしくお願いいたします」

「とりあえずヘルマンは上に行ってほかのみんなに挨拶しておいて。後そんなに堅苦しい態度じゃなくていいよ」

「ふむ。わかりました。主」

そう言うとヘルマンは上に上る階段の方へ行った

「さてと・・・・俺は人形を作りますか。さすがにヘルマンだけじゃこの屋敷の管理とかいろいろ無理だろうしね」

逆に一人で全部任せたらさすがの悪魔でも疲労で死ぬんじゃないか？俺はそんなこと考えながら図書館を出て研究室の中に入っていった。中は割すっきりしているが部屋の隅の方に建物の模型みたいなものが水晶の中に入っているものがあったその物近くに説明書的な

ものが置いてあったので読んでみるとこの模型は通称”別荘”と言うマジックアイテムだと言うことと中と外では時間経過がまったく違うと言うことここは神の領域と似た感じだなっと思った。別荘の時間はいろいろといじれるみたいなので外での1時間を中で1週間位に設定した。俺は設定が終わり魔方陣の上に立つと水晶の中に入っていた。
中に入るとそこには日本式の屋敷があっり周りには桜が咲いている状態だ。俺としてはすごいうれしいですね。

「っと見ほれてないで早速人形作りしますか・・・・」

基本的な構造はほとんど終わってる感じで後は、組み立てるだけの状態であるけど・・・人口筋肉とかってどうやって送ってきたのか人口皮膚とかもあるしその他臓器もあるよ・・・原作の人形の材料よりリアルなものたくさんあります・・・・・できればこのグニャとかグニュとかいう感触は、忘れたいです・・・・っととりあえず人形いや自動人形の完成かな一応モデルは境界線上のホライゾンの鹿角ですもちろん原作どおりにしておきました

「後は、媒体となる物か・・・これでいいかな。」

俺は、とりあえず原作であった指輪を媒体にしただけど舌に埋め込むとかしたくなかったから俺の翼から羽を10枚くらい採ってそれを指輪の形に変化させて指にはめた俺の羽から創った指輪だからかなりの神力と霊力が篭ってるけどはじめての人形だからそれくらいの力があってもいいよね？

「あなたが私を創った方でしょうか？」

「そうだよ」

「なら私に名をください」

「君の名は鹿角」

「Ｊｕｄ．ーーでは、鈴様私は何をすればよろしいのですか？」

「鹿角にはとりあえず家事をやってもらおうと思うけど大丈夫？」

「ｊｕｄ．問題ありません。そのあたりの知識もありますので」

「それじゃ、後はよろしくね。俺は、しばらくここにいるから」

鹿角を一度別荘からだして俺はまた人形創りに戻ったちなみに鹿角を製作するのにかかった時間は、中で２日と半日だ・・・え？省きすぎだって？そこは、気にしないでください・・・・

「とりあえず後５、６人くらいはいた方がいいかな・・・・」

俺は、そうつぶやきながらまた作業を再開させた・・・・

幽香ｓｉｄｅ

「あ、そういえば近いうちに紫がここに来たいって言ってたわね。何の用事かはしらないけど鈴にちょっかいだすようなら・・・・・消そうかしら・・・・・」

そんな感じのことを考えながら庭に花を植え替えている幽香でした

「お嬢さんこの花はここでよろしいかな？」

「ええ。それでいいわ。ヘルマン、あなた本当に悪魔らしくないわね」

「ははははは。よく言われるよ」

割となじんでいるヘルマンもいた・・・

幽香ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

来客（1）

この屋敷で生活を始めてあれから2日がたった。俺は幽香とお茶を飲んでいると幽香が思い出したかのように

「あ、そうだ。鈴近いうちにここに私の知り合いが訪ねてくるから結界を少し弱くしてもらえるかしら？」

幽香の知り合いってことは妖怪ってことだよな。ま、いいか

「あいあい。わかったよ」

そんな会話をしていると

「ヘルマン。お茶のおかわりをお願いするわ」

「わたっかったよ。お嬢さん」

「それにしてもヘルマンって万能だね～」

「ははは。そんなこともないですよ主」

そうヘルマンは、言うけどさ・・・・家事とかかなり効率よくこなしてるし鹿角よりある意味そこはレベル高かったし・・・ほかの自動人形×１０人分の仕事一人でこなすってどんだけ廃スペックなんだよそれでも、戦闘になれば鹿角のほうが強いんだけどささすがに俺の羽１０枚で創った媒体だからかなり強くなってるね。ちなみに武器は、黒鍵の刃をでかくした様な物を袖から出して戦ってるけどさ袖の中どうなってるのか聞いたら「自動人形の嗜みです」っと言

われたけどそんなメイドあなた以外いないと思いますよ。ほかの自動人形は、羽1枚だけで創った媒体のためそんなに強くないけどそれでも鹿角と比べればだけどね？一応3人？3体？どっちでもいいか。で、あたればヘルマンを倒せるみたいだね武器は、神様のお爺ちゃんズに貰った宝具のレプリカを持たせています。だって俺は、使わないしね。一応ヘルマンにも宝具を俺が創って上げました。さすがにただのパンチとかキックだけだとなんだか可愛そうに思ったからね。本人は「これはただのパンチやキックではないのですよ？”悪魔パンチ”と”悪魔キック”なのですよ？」そう言ってたけどさ俺達からしたらただのパンチとかにしか見えないんだよね

だって幽香とか翠華や睡蓮のパンチのほうが”悪魔”的威力だしね。そのことを少しはヘルマンも気にしてるみたいだったから俺が武器上げたんだよね。上げた武器は、”石化の剣ミステルティン”に肉体強化の概念を俺の能力で書き足した物を上げたけど能力発動には一応宝具だからかなりの量の魔力を消費するから俺と契約して間は問題ないけどもし切れるようなことがあることを考えて鹿角と同じ指輪をあげたけどこれは完璧に燃料タンク代わりだ使い捨て用だしね。っとそんな感じで我が家の住人は、チート化？しました。

後、俺の素朴な疑問だけさ・・・・この時代ってまだ電気もガスも水道もないよね？なのに全部そろってるって・・・どうなのかな？それをヘルマンに聞いてみると

「主？世の中には知らない方が身のためという物も多々あるのですよ」

そういわれたけどさ・・・なんで家がその対象になってるんだよ・・・

俺がそのことに対して凹んでいると呼び鈴がなった。呼び鈴もあるのかよ・・・・・

「ふむ？お茶か？ならばお嬢さんのお客かな」

「あら？なら珍しいわね。私の知り合いなら玄関からなんて入ってこないはずだから」

どんな知り合いだよ・・・・って今思ったけど幽香の知り合いで玄関から入ってこないのって・・・あ～あの人ですか～・・・・うん。俺は嫌いじゃないよ？でも何だか面倒なことに巻き込まれそうな気がするんだよね～俺のこういったときの間ってほとんどあたるんだよね・・・・今のうちに逃げるか？

俺がそんなことを思考していると鹿角が尋ねてきた人を連れてきた・・・・っち逃げ出すタイミングをなくした・・・・そこには、予想通りの人がいました

「鈴様。お客様をお連れしました」

「ご苦労様。鹿角」

「ｊｕｄ．では、私は下がっております」

そう言うと鹿角は、出て行った。それと同時に

「はじめまして、私の名前は八雲紫（やくもゆかり）ですわ。そこの幽香とは友で彼女からあなたの事を聞きましてお会いしてみたくて今日は訪ねてまいりました。それとこっちは私の式の「八雲（やくもらん）　藍といいます。紫様の式をしております」

自己紹介をしてきたので一応俺もしておくか

「俺の名前は四季咲　鈴といいます。よろしくそして、こっちにい

るのがここで執事をしているヘルマンです」

そう言うとヘルマンは、軽く会釈をした。

「それで今日は、幽香に用事があってここにきたと言うことでよろしいのですか？」

「いえ、どちらかというと・・・・あなたに用事があると言うべきかしらね」

そう言うとヘルマンはいつでも戦闘ができる状態であるし扉の外でも鹿角を中心とした自動人形が武装を展開しているのがわかった。もし、ここで俺になんらかの攻撃があった場合確実にしとめるだろうなまったく物騒だな・・・・

「紫あなた鈴になんの用かしらもし鈴に何かするのならあなたといえどここで殺すわよ」

幽香がそういうとさすがに少しはきいたのか

「わ、私は別に危害をくわえようなんて思ってないわ！だからその殺気をやめてもらえないかしら・・・」

「みんな少し落ち着きなよ。それから外にいる鹿角達は武器をしまいないさい・・・」

俺がそう言うと武器をしまう音がして鹿角達は仕事に戻った。ヘルマンもやめたが幽香は、まだ少し警戒した状態だがま、いいかでもしもし今日ほかの3人がいたら確実に紫と藍は攻撃されてただろうな・・・・

「それじゃ、紫さん俺に用事ってなんですか？」

「え、ええ用事というよりお願いになるのかしら。あなた相手に下手な嘘ついてもすぐばれそうそうですしもしばれた時が怖いから単刀直入にいわせもらうわ。私の夢のために力を貸してほしいの」

やっぱりそんなことですか・・・

「その夢とはなんですか？」

「私の夢は、妖怪と人間その他の生き物が共存して暮らせる理想郷を創ることそのためにあなたの力をかして欲しいの」

「そうですか。・・・・・ま、力を貸すのは別にいいんですけど俺は具体的に何をすればいいんですか？それとあなたとかって呼ばなくていいですよ。鈴でかまいません」

「え？あｎ「鈴で」・・・鈴はなんで私の夢を聞いて笑わないのかしら？大抵はこれを聞いて笑うわ「ん？何でって？人の夢は笑うようなものでもないしそれにその夢を実現させようとしてる者を笑うようなやつは馬鹿のすることですよ」あなたかわってるわね・・・」

「ま、それが鈴のいいところよ？それと紫？「何？」鈴は渡さないからね「あら？鈴はあなたの物なのかしら？」

二人は何だか知らないけど変に言い合いをはじめた・・・・

「あの～それで俺はいったい何をすればｙ「「鈴は少し黙ってて！！！！」」はい！！！」

めちゃ怖いです！！！！

「こうなった」「ええそうね」「「勝負よ！！！」」

なんでそうなるの？

二人は、そう言うと外に出て行った・・・・・外から爆発音が聞こえてくるんですけど・・・ついでに鹿角はやれやれと言った感じで首を振っているけど二人の壊したりしたものの片づけをする自動人形は絶望したかのような顔をしているよ・・・・とりあえず手を合わせて合掌

藍も置いていかれた感じで呆然としているが

「うん。これじゃしばらくは続きそうだね～」

「も、もうしわけありません。紫様が暴走してしまい」

藍が誤ってくるが

「あ～いいですよ。こんなことといつものことですし。う～んそれじゃ鹿～角～」

「ｊｕｄ．なんでしょうか？」

「とりあえず二人が終わるまでしばらく時間かかるだろうからお昼お願いしてもいいかな？」

「ｊｕｄ．それで何をご希望されますか？「じゃ、稲荷ずしで」ｊｕｄ」

俺はそう言うと鹿角は出て行く。そして藍はすごくうれしそうにし

ている

「稲荷ずしですか！！」

尻尾振ってますよ・・・・

「あ、それと藍さん？「なんでしょうか？」俺に敬語使わなくていいですよ？」

「で、ですが「いいからいいから」わかったよ。鈴／／／」

さらに尻尾振ってますね～～やわらかそうだな・・・・

「藍さん？尻尾触ってもいいですか？」

「／／／・・ん？いいぞ？」

許可をとったので早速触ると

「わふぅ～～気持ちいい～」

「ふふふ気に入ったようだな／／／」（か、可愛すぎる！！！！）

俺がだいぶ触っていると気が抜けて翼が出てきてしまった

「うあ・・・って鈴も妖怪だたのか？」

「違うよ～俺は一応神だよ～」

「そうか神か・・・・・神？神だって！？」

「そうだよ～」ふかふか

「まったく驚かされたよ。鈴の羽もふかふかだな／／／／／／」

「そうかな～でも俺は藍の尻尾のほうが好きだよ～」にぱぁ～

「っう／／／／／／／／」ぶっ

鼻血が噴出してますね・・・・って大丈夫か量が尋常ないぞ！！！

「藍大丈夫！？」

俺が急いでそう聞くと

「あぁ～～ここは天国か・・・・我が人生に悔いなし！！！！」

「って藍しかっりしてよ！！！！藍！！！！！！！！！！」

今日の屋敷は外でも中でも大変でした・・・・・

その後一応ヘルマンに頼んで俺の薬品庫から薬とってきてもらいましたよ？だってね？鼻血で水溜りできるほどだったんだよ？ある意味あれはトラウマになりそうです・・・・・・処置終わったあたりに鹿角が稲荷ずしを持ってきてくれたけど量おかしくない？山盛りっておかしいだろう？それと藍さん？俺のことを抱っこしたまま食べさせようとしないでください？ついでに鹿角さんから何だか殺気みたいなものが飛んできてますよ・・・ヘルマンに助けを求めようとしたら逃げてますね・・・・・・

最後に心のなかで「この裏切り者が！！！！！！！！！！！！！！」

と俺はヘルマンに叫んでみたりしました・・・・・

来客（2）

あれから少しして外で暴れてた二人は鹿角が引きずってつれてきた。一応理由を聞くと

「いい加減にしていただかないと屋敷にも被害がでるので鎮圧しました」

だ、そうだけどこの二人まとめて止めるって鹿角ってどんだけ強いんだよ・・・・・

「ｊｕｄ．これくらいはメイドのたしなみです」

いや絶対違うからね！大妖怪倒せるメイド？もとい自動人形のたしなみってどんだけですか！？それと人の考え読まないでよ！！ついでに、藍さっきからなんで当たり前のように俺を抱っこして膝の上に乗せてるの？・・・・ま、いいけどね・・・

「そんなことより八雲様は、何か鈴様に何か御用がおありだったのでは？」

そんなことって・・・結構重要な気もするけどおいておくか

「・・・・ええそうだったわね。・・・鈴あなたのメイド反則すぎるほど強いわね・・・」

紫に反則って言われてるよ・・・ほんとその辺気になるけどこのままじゃ話進まないから今は置いておくしかないか・・・・

「それでお願いって言うのはね。私と一緒にある所に着てほしいの」

「ある所って？どこ？」

「そこは妖怪の山って言う所でそこは鬼と天狗の縄張りなんだけどそこを私の理想の土地にしようと思って何回か話をしようと思って行ったのだけどいつも門前払いだからそろそろ実力行使をしようと思ってあなたの力を貸してほしいってことよ」

ふ～んってまだあそこ手に入れて？（言い方違うかな？ま、いいか）なかったんだな。それならいろいろと術の練習台になってくれそうだな（神様のおじいちゃんズに教えてもらった？覚えされたやつの）ついでできればうちの労働力とか手に入ればいいんだけどなぁ～そこは、高望みしない方がいいか・・・

「別にかまわないよ。俺も調度試したかった技や術や物があったから。でも明日でもいいですか？ちょっと準備とかもしたいから」

「えぇそれは、かまわないけど。鈴は、何も対価とか求めたりしないの？」

対価っていってもな～実験体いや実験材料？いやいや的？ってどんどん酷くなってるな・・・

「う～ん。別に対価とか求めるって言われてもな～何かしてほしいとかもないし。対価って言うわけじゃないけどたまにここに遊びに着てよ。こんな所だから誰も訪ねてこないからさたまに退屈なんだよ」

俺は、そう言うと。驚いたような顔をしたかと思うと笑い出した

「ふふふふっ。あなたって本当に無欲なのね。元々ちょくちょく遊びにこようと思ってたからいいわよ。それがあなたに対しての対価にしましょう」

紫は、そう言うと幽香をみて勝ち誇ったような顔をしてるけど幽香はなぜか俺を睨んできている、藍に関しては平常心を保とうとしているようだけど尻尾がすごい勢いで動いてます・・・・

「それじゃ、今日はとりあえずこの屋敷に泊まっていくといいよ。鹿角、二人に部屋をお願いね」

「ｊｕｄ．では、お部屋の準備ができましたらお呼びしますのでしばしお待ちを・・・・また、先ほどのように暴れるようなことがあれば今度は幽香様とお客様と言えども・・・・駆逐しますので」

そう言うと部屋を出て行った・・・うん、鹿角怖いね。今度から俺も怒らせないようにします。

それと・・・・・

「ヘルマンいつ戻ってきたんだ？」

「ＨＡＨＡＨＡ。今さっき戻ってきたばかりですよ」

いつからいたんだよ！ついでにその笑い方やめろよな！！

「はははは、戻ってきたのはそこのお二人が鹿角が引きずってきたあたりですよ。主よ」

「そうかって勝手に人の考え読むなよ！！ま、それはおいておくけ

どさ。鹿角ってちなみにどれくらい強いんだ？」

「鹿角の強さですか？主は知らないのですか？」

「ああ。だから紫と幽香を引きずってきたからきになってな」

「ふむ。そうですね・・・まだ本気は見たことないのでたぶんそれを考慮すると下級神位の強さはもっていると思いますよ」

・・・・・・へ？下級神クラスの強さ？おかしくないですか？一応自動人形ですよついでにメインが家事全般をして貰う様の？

「主。それは鹿角の力の媒体が媒体だからだと・・・・」

あぁ～そういえば俺の羽１０枚だっけ？（ついでにかなりの量の魔力ながしてます）だからか～～納得だよ。ついでに、初めて、後悔はしないけど反省はしました！！！！自重って大事だね・・・・

「あ～納得だよ。うん・・・・ヘルマン？「なんですか？」現実逃避したいから紅茶頂戴」

「分かりました・・・・」

何かかわいそうなものを見る目で俺を見ないでよ・・・・俺の心はもう折れてるからさ・・・だけどたぶん自重しないんだろうな～最近俺無意識だけど実験とかになるとマッド思考になるんじゃないかなって思ってるし・・・・

「鈴どうしたんだ？何かを悟ったような顔をして」

藍がそう聞いてきたから

「う～ん。最近のことちょっと振り返ってたところ～・・・一ついいですか？藍さんあなたはいつまで俺を抱っこしてるのでしょうか？」

いい加減幽香の殺気がやばいです。殺気だけで人殺せるんじゃないかってレベルですよ？ついでに紫も殺気出してるけどそこには触れないでおこう・・・

「そうよ。女狐いつまで鈴を抱っこしてるのかしら？それは私の役目よ？」

いや、それ違いますからね！？そんな役目だれもないですよ！？

「藍あなたいい度胸ね？ご主人様の私より鈴と親しくするなんて？」

うん。完璧に逆恨みですね・・・

「お二人が先ほどまで暴走してるのが悪いのではないです？」

その一言で完璧に何かが切れるような音がたとえばプッツンって感じの音が・・・

「「いい度胸ね・・・・」」

「「外に出なさい。白黒つけてあげるから」」

「・・・・望むところです」

そう言うと3人の目から光が無くなってる様な気がしたけど気のせいだよね！？
そう言うと藍は俺をおろし3人は外に出て行った・・・・あれ？でもさっきまた暴走したら鹿角が駆逐するって言ってたような・・・・・大丈夫か、3人いれば死にはしないだろうから・・・たぶん・・こういうときは・・・・

「・・・・主。紅茶が入りました」

「・・・・ありがとう。ヘルマン」

俺はそう言うと紅茶を飲んだ。こういう時は現実逃避に限るね！ヘルマンも現実逃避始めてるし・・・
外から爆撃音みたいなのが聞こえるけど気のせいだよね・・・・

「・・・・・・私は言いましたよね？今度暴れたら駆逐しますと？」

鹿角の声が聞こえた気がしたけど気のせい・・・だよね？俺は、何か助けを求めるようにヘルマンを見るけどヘルマンは首を横に振って何かを悟ったような顔をしている。たぶん俺もそんな表情だろうけど・・・とりあえずは

「・・・ヘルマン」

「・・・主」

そう言って二人で手を合わせて本日2度目の合掌をした・・・・明日まで紫、藍、幽香生きてるといいな～「「「きゃあああああああ！！！！」」」　「あはははは！！！！避けなさい避けなさい！

！」そんな声が聞こえてきた気がするけど気のせいであってほしいです・・・・・

妖怪の山（1）

あれから、鹿角が3人に対して駆逐活動を開始してから1時間位がたち外に出てみると3人が気絶しておりその上に鹿角が見下ろしているような形になっていた。その時の鹿角はすごいいい笑顔で頬を紅くしていたその笑顔はすごく怖いです・・・・ほんと鹿角を怒らせないようにしないとやばそうだな・・・・・・たぶんそこにいた全員がそう思っただろう

「鈴様とりあえずこの3人をお部屋におしk・・・・お連れしておきますね」

今押し込んでって言おうとしたよね？・・・・深く考えるのやめよう。俺はああはなりたくないし・・

「う、うん。よろしくね」

「ｊｕｄ．」

そう返事をするとまた引きずって屋敷の中に入っていった。それを目で追っていると4人の戦闘の跡がかなりひどいことになっているのがわかったけどさ・・・・・鹿角を除いた3人で剣使う人っていたっけ？明らかに斬られた痕があるんですけど？しかもえぐるような感じのが無数に・・・・うん。見なかったことにしよう・・・・・被害があった場所の修理をヘルマンに頼んだらヘルマンと連れてきた自動人形の3人が何があった？って顔をしてこっちを向いてきたけど俺は、顔を思いっきり反らした。たぶんそれで悟ってくれたんだと思う。４人は、遠くを見るような目をしてたね・・・・

俺は、そんな４人を残して地下の俺の研究室に戻っていろいろと明

日のために準備してたけどさすがに持っていける物が少ないなぁ～とか思ったね。どっかの猫型ロボットのポケットとかあったら持ち運びかなり楽なのにな～って思った。・・・・・あれ？そういえば紫のスキマって物の持ち運びとか便利じゃない？でも、さすがにまだ能力とか聞いたりもしてないのに勝手に書き足すとやばいよね？・・・しかたないか今度そういった感じの宝具創ってみるか。俺は、とりあえず棚に置いておいた薬箱をとりその中に俺の作った薬や包帯をしまった。やっぱり魔法使って治すより薬使って治す方が俺的にすきなんだよね～せっかく永琳の能力書き足してるんだからさ。っとそれから薬草見つけたらしまうための袋も持っていかないと・・・・そんな事をしながらたまに地下にあった物の整備をしてたら完璧に夜中になってたので明日は早いかもしれないのですぐに寝た・・・・・

それから数時間後

あれ？なんだか少し寒い気がする・・・俺がそう思いいつもかぶっている布団をどけようとしたがそこには布団の感触はなくしかもなんだか誰かに掴まれているような？どっちかというともたれているような感じがしたので眠い目をこすりながら明けるとそこは俺の部屋ではなく空の上でしかも、今の俺の状態は、なぜか紫に抱っこされている状態だ・・・・何があったの？

「あら？鈴起きたの？」

「え～っと「おはよう♪」あ、おはようございます・・・って挨拶も大事だけど今俺ってと言うか今ってどんな状態？」

「そうね。今は、妖怪の山に向かって飛んでるところよ。それで、鈴がいくら起こしても起きなかったからそのまま近くにあった荷物と一緒に連れてきたってわけよ。わかったかしら？（本当は起こしてもいなかったりするけど別にいいわよね／／／）」

「そうだったんだ。ちなみに後どれくらいでつくんです？」

「もう見えてくるころよ」

「ところで藍と幽香は？」

「二人は・・・・あなたのメイドの鹿角だったかしら？その戦闘の性でまだ動けない状態よ・・・」

「あぁ～その、ごめんなさい・・・・」

「気にしなくてもいいわよ・・・・・・・そのおかげで今は鈴を一人締めできるしね／／／／／／」

「ん？何か言った？」

「いいえ何でもないわ／／／／・・・・・っとそろそろ降りるわよ」

紫はそう言うと山のふもとまで降りていった

「あれ？一気に飛んでいかないの？」

「ええ。とりあえず歩いて上っていくことにするわ」

ふ～ん。何か考えでもあるんだろうから別にいいか・・・・俺は、

それと同時に山全部をサーチしてどんな状態かを見てみた・・・・もうすでに見つかってますね・・・・・山頂付近から強い妖力をいくつか感じ取れた・・・・鬼もいるって言ってけどまともには相手したくないな・・・・能力は俺に対してはレジストされると思うけど純粋に腕力だけならたぶん負ける・・・・っとそれは、さておき山に入ってすぐこっちに向かってくる小さい妖力を何個か確認っとたぶん警備の天狗だろう・・・・

「そこの人間の子供とスキマ妖怪止まれ！」

また、子供ですか・・・ま、今は全部の力抑えているからな～なみの妖怪には絶対ばれないだろうし

「スキマ妖怪また性懲りもなく来たか！」

「ええ。何度でもきてあげるわ。いい加減にあなた達のトップに合わせなさい」

「ふん。貴様などを天魔様に合わせるわけがないだろう！」

「・・・・そう」

紫は、そう言うと天狗に向かって弾幕を撃った・・・・うん、すごく痛そうだな

「貴様！！！！」

「今日はいつもみたいに退いてあげないわよ？」

そう言いながらさらに弾幕を撃ちだしながら目の前にいた天狗を撃

ち落していく紫、その顔はすごく怖い笑顔だ・・・・まるで3人を駆逐した鹿角みたいだ・・・どんだけ天狗にストレスたまってたんだよ

「鈴？どうしたの？早く行くわよ」

俺のほうを向きながら俺にそう言ってくるとまた弾幕を展開して前に進みだした・・・女の人って怒らせると怖いんだな・・・・・藍がいれば少しはましだったのかな？というか睡蓮か清明つれてくればよかった・・・・え？翠華連れてくれば絶対山が無くなると思うよ？そんなことを考えながら紫の後をのんびりついていくと別の方向から妖力の気配を感じてそっちの方を少し見てみると1つの妖力が2つの妖力に襲われているようでさすがに見てみぬふりをして襲われるのを見るのはできないと思い紫のほうを見ると紫は、「あははははっは！！！避けなさい！避けなさい！！」鹿角みたいな笑い方をしながら進んでいる。俺はそんな状態の紫にちょっと言って来ると言ったけど絶対聞いてないよね？っと思いながら妖力のしたほうへ身体能力を強化して急いで向かった

？？？side

っく、私の目の前には鬼蜘蛛が2体もいる。急に侵入者が来たことを確認してそっちに向かおうとしたところを襲われてしまった。まさか、近づかれるまで気づかないなんてしかも・・・この鬼蜘蛛私より強い・・・私が攻撃してもなんともないかのように襲い掛かってくる・・・

「っく！！！！」

鬼蜘蛛の足があたり木まで吹き飛ばされてしまい自由に体が動かな

い。向こうも私が動けないっとわかったようでゆっくりと近づいてくる鬼蜘蛛は牙をむき出しにして私を食い殺そうとしている・・・

（動け！動いて！）私は、そう思っても体はまるで動いてはくれない

（誰か！誰でもいいから助けて！！！！）

そう思うと同時に2体の鬼蜘蛛の首が吹き飛ばされた・・・

「え？・・・・なにが？」

何が起きたのかまったく理解できなかったけど鬼蜘蛛の首は黒い剣のような物に突き刺さっており胴体とは完璧に切り離された状態で死んでいる。私は、その剣が飛んできたであろう方角をみるとそこには人間の子供が立っていた

？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

鈴ｓｉｄｅ

目の前にいた鬼蜘蛛にとっさに黒鍵を投げて頭を吹き飛ばした。そして、襲われていたであろう方をみると何があったのかあまり理解できてないようで俺のほうを見ているが鬼蜘蛛に吹き飛ばされたようであまり動けないようだったけど一応

「天狗のお姉さん大丈夫ですか？」

そう聞くと

「えぇ、大丈夫だけど。人間の子供がこの山に一人で何のようなの

？」

そう言ってきたので

「えっとですね。八雲　紫って言う人に連れてこられたんですよ」

間違ってないよね？

「また、あのスキマ妖怪・・・しかも今度はこんな小さい子供まで連れてくるなんて何を考えてるのよ・・・」

紫さんあなたいったい何回ここきたんですか？さっきの天狗といい完璧警備に顔覚えられてますよね・・・・

「ところで君はなんて名前なのかな？」

「あ、えっと四季咲　鈴といいます。お姉さんは？」

「あ、ごめんね。私の名前は犬走（いぬばしり）椛って言うんだけど一応ここの規則で侵入者は連れて行かないと行けないんだけどいいかな？」

ま、俺も完璧侵入者だしここで下手に何か言うよりだったらいいか、それに紫の所に連れて行ってもらえそうだしね。だけどその前に・・・

「わたかりました。でも、その前に「何かな？」椛さんの手当てさせてもらいますね」

「心配してくれるのはうれしいけどこれくらい大丈夫だよ・・・ってあれ？」

微笑んでくれて立とうとしたみたいだけどうまく立てないみたいだ。
それに腕からも血がでてるし
「あまり無茶しないでくださいよ。とりあえずこれ飲んでください」
俺は、持っていた薬箱からエリクサーと包帯と脱脂綿を取り出した
「これは？「薬ですよ。あ、毒とかじゃないから大丈夫ですからね？」」
そう言うと飲んでくれた
「！？これって「あ、ちょっと待ってくださいね」っつ！！」」
脱脂綿に消毒薬を浸して切り傷を消毒してその上から包帯を巻いた
「っとこれでいいかな？一応念を入れて包帯を巻きましたけどこの分なら明日にはとっても大丈夫ですよ」
「あ、ありがとうね？でも、この薬すごいね」
「ありがとうございます。じゃ、連れて行ってください」
「わかったわ。っと私にしっかり捕まっててね？」
「は～い」笑顔で返事をしてみると
「／／／／／／（か、可愛すぎる！！この子天魔様に頼んで私がも

らえないかな／／／／／）

「どうしたんですか？」

「な、何でもないのよ、それじゃ行きましょうか／／／／／／／／」

そう言うと俺を抱っこして移動した・・・・普通ここって縛ったりして連れて行くもんじゃないかな？

しかも抱っこって？というか最近俺って抱っこしかされてないきしかしないんだけど・・・・

ちなみにその頃の紫は

「あはははははっはははは！！邪魔よ！どきなさい！！」

テンションがかなり廃になって天狗を落としていた・・・・・

鈴ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

妖怪の山（2）

紫side

私は、現在進行形で私の前にでてくる天狗を次々に撃ち落している。今までの対応に少しは腹を立てていたというのもあるけど今日は、私の後ろに鈴がいるから少しでもいい格好をしておいてポイントを稼いでおこうと思って張り切ってる・・・え？それを前からやれですって？いやよめんどくさい。

「それにしても、さっきから鈴どうしたの？すごく静かだ・・・け・・・ど・・・・・・」

私は、不意に後ろを向くとそこにいたはずの鈴がいなくなっていた

「え！！！鈴どこなの！？っは！！！もしかして天狗に連れていかれた？」

私が、その考えにいたると

「いまだ！一斉に攻撃だ！！」

また、天狗が来た・・・・

その攻撃は私に当たり周囲に土煙が立ち込めた

「やったか！？・・・・！！！！！」

私は、ゆっくりと立ち上がり撃ってきた天狗を一瞬で倒した・・・・

・

「っな！！ば、化け物！！」

「あ、悪魔だぁ！！」

「た、助けてくれぇ！！！」

命乞いをしてくるものもいるけど・・・化け物はひどくないかしら？同じ妖怪なのにでも・・・・・

「・・・・・悪魔でもかまわないですわ」

私は、そう言うと残りの天狗の意識を刈り取りスキマを開きその中に放り投げた

「鈴待っててね。すぐに助けてあげるから」

このとき紫は、鈴の戦闘力のことをまったく考えていなかった。

紫　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

鈴　ｓｉｄｅ

俺は、あの後まだ椛さんに抱っこされた状態で連れてこられたけど・・・何だか連れてこられた場所を見るとすごい忙しそうにしている

「椛さん？何かあったの？」

俺は一応聞くと

「へんね？誰かに何があったのか聞いてみないと・・・あ、文さん！どうなってるんですか」

「あ、椛！どこに行ってたの？今すごいことになって・・・ってその子どうしたの？」

「あ、この子ですか？例のスキマ妖怪が今度はどこからか連れてきたんですよ。だから一応捕まえたんですそれにこの子かわいいじゃないですか／／／／／」

「確かに可愛いけどってそれより今の状態だけどそのスキマ妖怪がすごい勢いでこっちに向かって攻めてきてるのよ！！食い止めようとした天狗はみんなやられちゃうしとにかくそんな状態なのよ！！」

紫さん、俺って本当にここ来る意味ありましたか？あなた一人でも確実に制圧できますよね？

そう考えながら俺は、ため息を一つすると

「ん？どうしたの？鈴君？」

椛さんが俺にそう聞いてきたので

「たぶん僕をわたせば少しは落ち着くと思います・・・・」

「「な！！そんなことしたら殺されちゃうよ！！」」

二人の声がシンクロした

「あの人なら殺しはしないはずだし・・・・・・（殺されるつもり

もないですしね）」

「・・・・・そこまで言うのなら試してみましょう」

「文さん！？正気ですか？こんな子供をそんな所に渡すなんて」

「さすがに被害がすごすぎるのよ・・・・これで少しでも収まれば・・・」

「・・・・分かりました。鈴君？危なくなったらすぐ逃げるんだよ？」

「わかりました・・・・」

俺がそう答えると二人は俺を連れて紫のいる所まで連れて行ってくれたけど、今紫がいるところはここからすぐ近くの所でかなりの天狗達が紫を待ち構えていてその間を二人は抜けて一番前に連れてきてくれたけどほかの天狗達は、何をするつもりだ？っといった感じの反応をしているし後よくよく見ると鬼の姿も見えるその中に見たことあるような姿の鬼もいたが・・・爆発音とともに紫が現れた

「鈴を返しなさい！！！！！！！！！！！！！！！」

・・・・・・目の色が消えてます。すごい怖いんですけど！？文さんと椛さんもすごい怖がってますよ・・・しかたない・・・俺は、椛さんの腕からすり抜けるかのように抜け出して「連れてきてくれてありがとう」そう伝えると紫の方へゆっくりと近づいた。その時椛さんと文さんが止めようとしてくれたみたいだけど俺はそれでも紫に近づき

「まったく紫少しは落ち着きなよ？」

「！！！！鈴、無事だったのね！！」

「うあぁぁ！」

俺が紫に抱きつかれて変な声を上げてしまった。それを見ていたその場にいた人全員がさっきまでの状態が幻だったのかっといったような顔をしているのでさすがにこの状態を収拾しないと前に進まないと思い

「っちょっと紫、いい加減に離してよ～用事があってここに来たんでしょ？」

俺が紫にそう言うと少し残念そうに俺を話

「そうだったわね。危うく忘れてしますところだったわ」

「天狗達の長に話があるわ！！でてきなさい！」

そう宣言すると、今までの状態からその言葉の意味がどう言うことかまだ理解できないのか天狗達はお互いの顔を見合わせている状態だけど

「私に何のようだ」

そう答えてくる者がいた。

「あなたが、天狗の長の天魔でいいみたいね。単刀直入に言うわ。私の野望のためにこの土地を貸していただきたいの」

「いきなり現れて散々暴れてくれた者にはい、そうですかとっと言ってそのような申し出受けるとでも思ったのか？それにスキマ妖怪、貴様はまだそのような小さき子供までもこの山に連れてきて何のためだ？我らに対しての献上品か何かのためか？後、その申し出だが断らせてまろう・・・・それでもこの土地を望むと言うのなら力ずくで奪ってみせよ！！！」

その一声で周りの天狗と鬼は、正気に戻りいつでも襲いかかれる用意をとるがそこで鬼の中から

「大勢で少数を襲うのは鬼の流儀に反する。だから、こちから2人代表をだす。それでそこの2人が勝てばその願いを聞き届けるってことでどうだい？」

「ふむ・・・・ただし、一人でも負ければその願いは聞き届けはしない」

天魔の方も納得したようで天狗たちを下げるが文さんと椛さんは2人と言うことは俺も入っていることを心配したのか複雑そうな表情をしている・・・

そして、周りにいた鬼や天狗が距離をとっていく向こうの代表はやっぱり鬼の中から出てきた・・・

しかも予想通りの2人か・・・・

「それじゃ、さっそくやろうか。私は、鬼の四天王で星熊　勇儀。私がボウヤの相手だ。それでそっちのスキマ妖怪の相手が「鬼の四天王、伊吹　萃香！！いいから早くやろう！」まったく、所でボウヤの名前はまだ聞いてなかったけどなんて名なんだ？」

「四季咲　鈴でこっちが「・・・・八雲　紫よ」です」

「鈴か・・・所で鈴？お前さんは何か望みはないのか？今のままだとそこの八雲　紫だけの要望しか通らないぞ？」

確かにそうだな・・・なら

「・・・そうですね。なら、労働力？というか家の警備をしてもらいたいので何人か雇わせてもらえますか？天魔さん？」

俺がそう言うと

「まぁ～勝てたらかまわないぞ・・・」

そう言うと何人かの天狗は笑っていたが俺はそれを見るとすごいムカついたので本気で戦うことにしたけど俺と戦う勇儀はまじめに俺の相手をしてくれるみたいで笑ったりしていなかった。

ま、とりあえず紫に

「ねぇねぇ。紫」

「ん？どうしたの鈴？」

「最初に言っておくね。ごめんなさい」

「え？それってどういう「さすが子供だな！やる前からあきらめてるぜ！」」

天狗の一人がそう言ってきた・・・その時周りにいた天狗はそいつのことを睨んで黙らせてくれた。そこに関しては感謝する。でも、

俺が誤ったのは負けるからじゃないのにな・・・・

天魔が開始の合図をしようとして1歩前にでて

「それでは、始め！！！！」

その合図と同時に紫と萃香は激しい戦いを開始したが俺は達のほうは

「鈴先手はお前が攻撃しな」

勇儀が俺に先手を譲ってくれた。俺としてはありがたいけどさ・・・・・・人を見た目だけでなめすぎだよ？

「ありがとうございます。なら遠慮なくやりますけど後悔しないでくださいね？」

「？あぁ！！何でもやってみろ！！！！」

一気にこの場にいる者を無力化するか・・・・・・

俺は、そう思い詠唱を始めるそれと同時に俺の中のリミッターをすべて外した。外れると今まで抑えていた力が一気に溢れてきた。そのことを感じとったその場にいたものは全員が俺のほうを向いて目を丸くしていた。それは隣で戦っている紫と萃香も同様でこっちをみて止まっている

そのことをお構いなしに俺は

「Ｓｉｌｅｎｔ　ｎｉｇｈｔ　Ｈｏｌｙ　ｎｉｇｈｔ（静かな夜よ　清し夜よ）」

「Brought the world peace tonight（今宵　世界に平和がもたらされる）」

「From the heavens golden height（天上　その気高き位置から）」

「Shows the grace of His holy might（天の聖意の偉大さを見せよ）」

「Jeus as man on this earth（神の子は　人としてこの世へ降臨する）」

「Jeus as man on this earth（神の子は　人としてこの世へ降臨する）」

「Scenery of far memory（遠い記憶の原風景）！！！！！！！！！！」

俺が詠唱を終え俺の固有結界を発動させそ世界を侵食し俺の世界を形成した・・・・

「な、なんだこれは！？鈴何をしたんだ！」

勇儀は何が起こったのか理解できないでいるようだが回りもそんな感じだけど紫だけはある程度理解できてるみたいだ・・・

ちなみに俺の発動した固有結界は、あの弓兵みたいな物ではなくあそこまで殺風景ではなく空には月がでて夜になりまわりは枯れた桜

の木があるだけの世界、あの弓兵みたく武器を無限に内臓するよう
なものではなくどちらかと言うと
・・・・・・・・・・・奪う世界・・・・・・
・・・・・・・・

俺は、両翼を展開し勇儀に対して言葉を発した

「勇儀さん・・・・・降参してくれませんか」

俺がそう言うと

「！？何を言ってるんだ。まだ戦ってもいないだろうに確かに周り
の景色が変わったのには驚いたけど鈴がもうこれで終わりなら今度
はこっちからいかせてもらうよ！！」

「・・・・・・咲き誇れ」

俺は、ただそう呟くと勇儀が殴りかかってきて俺に当った。

「・・・鈴あんた何をしたんだ。私は、鈴を吹き飛ばすつもりで
殴ったんだけど」

そうただ当たっただけだった。俺は、その場を動いていない

「簡単なことですよ。あなたの力を奪っただけです・・・・・つい
でに妖力も奪わせてもらいました」

「な！！奪うだって！？そんなこといつの間に！」

「この世界は俺の心を形どった世界なんですよ。そしてこの世界の特性は・・・・俺以外の者の力をすべて奪うという特性なんですよ・・・勇儀さんからなら鬼の力と妖力を奪い取ります」

「っということはこの場にいる全員が奪われてるってことでいいんだね。まったく、この技は反則だね」

「ごめんなさい・・・これ以外の技だったら確実に殺してしまいそうなものばかりだったから・・・・ほんとうにごめんなさい」

一応誤っておいた

「ふぅ～わかったよ。でも、今度はこの技なしでたのむよ」

「わかりました」笑顔で答える

「そ、そうか／／／／／（その笑顔は反則すぎる／／／／）っとそうだ奪いとった力はどうなるんだ？後、ほかにも技があるならみせてもらってもいいか？」

「わかりました。っと一応奪った力は桜の木が養分にして花を咲かせます。技の方ですとそうですね・・・・・・」

俺は、カードを懐からとりだし魔力を込めて空中に投げた

「来い！！（試作型）究極天使（ウルティマ・アンゲル）！！！！！！」

究極天使を転移させた。見た目は原作どおりだけどまだ作ったばかりだからどれほどのものかはまったく試せてない物を試すには調度言いかと思い

「フレアディザスター！！！！」

そう言うと胸や肩等に取り付けられた目玉のような装飾から魔方陣を広げると

「Ｇｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

咆哮し莫大な熱量の光線を放った。そして着弾した場所は跡形もなく吹き飛んでいるそれを見るほかの人たちは口をあけたまま呆然としているけど俺からすれば・・・・・

「もうちょっと威力上げないといけないし装甲ももっと硬くしないと」

俺がそう呟くと全員が「「「「「まだ強くするのかよ！」」」」」そう突っ込んできた。って紫もツッコミいれてきてるけどさ

「っとそれでこの場合は、僕達の勝ちでいいのですか？」

「そうせざるおえんだろうな。四季咲　鈴だったか？「鈴でいいですよ」なら鈴のこの術の性で私ですら何もできないだから・・・お主たちの勝ちだ」

その宣言と同時に歓喜の声が上がったそれは、勝者を祝福するものだった。俺は、世界を砕き元に戻したが、この術結構疲れるんだよね。そして、まだ寝たりない感じもするので・・・

「紫・・・「どうかしたかしら？」もう終わりでいいんだよね？

「えぇ。これで終わりよ」なら少しねむ・・・る・・ね」

俺はそう言うと翼に包まりながら眠ろうとして前に倒れた。調度まだそこには勇儀が立っていたので俺は勇儀に倒れ掛かるような形になった。その時「「「「きゃあああ～♪」」」」とか「「「「あああああ！！！！」」」」とか言った声も聞こえてきたが俺はきにしないで眠りについた・・・・

鈴　side　out

妖怪の山（3）

俺は、あの後眠くなり眠ってしまった。だが、周りがうるさくなってきているのがわかった。

（ん。何だよ、うるさいな～）

そう思いながら重いまぶたをゆっくりとあけると目の前では・・・・・・・宴会が行われていた。はて？あの後何があったんだ？俺がそう思いながらゆっくりとあたりを見ていると

「あ、鈴君起きたんだ？」

椛さんがそう言ってきた。それの言葉で文さんと勇儀と萃香・・・・・紫は、顔色がすごい悪い

うん、確実に飲みすぎて気持ち悪いって感じだな。

「やっと起きたか。それじゃ、鈴も飲もうか」

「そうそうさっきまで寝てたんだからしっかり飲まないと大きくなれないぞ？」

鬼の二人が言ってくるけど萃香さんあなたにだけは言われてたくないです・・・ついでにお酒飲んで成長はしないですよ・・・・

「こんな子供にお酒なんて勧めないでください」

そう言うと椛さんが俺を少し二人から離した

「そうですよ。さ、鈴君は果物を搾った飲み物をどうぞ」

文さんがジュースを渡してきてくれた。一応俺もお酒は飲めるけど日本酒的なものははっきり言って飲めないと言っていいけどワインとか果物を元にしたお酒ならまだ日本酒よりは飲める・・・・

「ありがとうございます～」

俺は、それを受け取ると飲んだ。

「と　こ　ろ　で　鈴君って妖怪でいいのかな？それとも人間？そのあたりを詳しく聞きたいんだけどいいですか？」

どこから出したのかカメラと手帳をだして俺について質問してきた。そのことに何人かが反応したその中に紫までもが反応していたことに驚いた・・・俺の正体幽香から聞いてたんじゃなかったのか？

「そうですね・・・・種族は・・・・・神です」

俺がそう答えるとその場の時が止まったかのように静かになり、杯に酒を注いでいたものはそのまま動きを止め酒をこぼしている

「え、えっと冗談ですよね？」

文が今の話が冗談と判断したみたいで聞き返してきた。ま、たしかにこんなチンチクリンが神様って言うのも信じれないよね。俺、威厳とか０だし。

「一応神です。その前が妖怪でもうひとつ前が人間やってました」

そう言うとその場にいた人全員が

「「「「「「「「「「「「「えええええええええええええ！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」

シンクロした・・・紫さんさっきまで顔色悪かったのにそんな大声あげると・・・・ああ～言わんこっちゃないまた顔色を悪くして下を向いているその背中を天魔がさすっている・・・・・

「ふ～ん。何で神になったのかはわかってるのかい？」

割と落着いてる勇儀が聞いてきた

「うん。わかってるよけどどれくらい昔かはさすがにもう覚えてないけど（説明中）っというわけでこうなったんだよ」

これで、納得してくれたかな？

「なんて感動的な話なんですか！！鈴君・・・大変でしたね・・・・・」

文さんがそう言いなぜか椛さんが頭を撫でてくれた・・・ああやばい、すごい気持ちいいかも

椛　ｓｉｄｅ

私は、鈴君の話を聞くと彼今までどれだけ大変だったかを考えてしまった。まず、元が人間だったと言ってたけど何かつらいことがあったから妖怪になったんだと私は思った。それに、妖怪になってか

ら人間を守るために大勢の妖怪に戦いを挑みその結果神になった・・・・普通なら鈴君くらいの年の子はまだ甘えたり遊んだりする境なのに甘える親もいないなんて・・・・
私はゆっくり鈴君に近づいて彼の頭を優しく撫でると気持ちよさそうに目を細めるこの子を見るとああ～私が守ってあげないとそう思ってしまった。

（そういえば勝った場合雇いたいって言ってたけど私がそれに志願して鈴君を守ってあげないと！）

椛　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

鈴　ｓｉｄｅ

さっきから俺は、頭を撫でてもらっているけどたぶん俺に尻尾があれば確実に尻尾を振ってるだろう・・・・

「っん！そろそろいいか？」

天魔が俺に話しかけてきて、椛さんがあわてて離れた・・・ああ～もっと撫でてほしかったな

「そんながっかりしたような顔をするでない。ところで鈴、お主の願いの雇いたいと言うことだが人選はこちらでやってかまわないか？」

「ええ。もちろん構いませんよ、もともと断られること覚悟してたので」

「ああ。では、何人かを送りその者達の報告でさらに増員するかを

決める」

え？増員してくれるの？

「何。ちょうどいい訓練にもなるだろう。それにお前の下につけたほうがよさそうな者もいるしな」

「はぁ～そうでしたか。俺としてはありがたいです」

「さて。いい加減まじめな雰囲気にも肩がこるな・・・・何をだまっておる！もっと飲まないか。鈴お前も飲め！」

そう言うと天魔が無理やり俺の口に酒瓶を入れた。

「っう！！！！・・・・・ゴクゴクゴク」

「って！天魔様何無理やり飲ませてるんですか！！！！！」

椛さんがそれに対して抗議をしている

「ははははっ！鈴いい飲みっぷりだね！！」

勇儀と萃香は、それを見ながらまた飲みなおしている

「これはいい写真がとれますね！！」

文は、写真を撮っている

「・・・・・ぷはぁ～～～」

俺は、一気に酒瓶1本を飲み干した

「あれぇ～～目の前がくりゃくりゃすりゅ～～あ～椛しゃんが4人もいりゅよ～～」

あ～呂律がまったくまわらない～そんな俺に

「ちょっ！大丈夫鈴君！？」

椛さんが近づいてくる。あ～なんだかまた眠くなってきたなぁ～もう今日は疲れたから寝ちゃえばいいか～

俺は、なんだか面倒になって目を閉じて地面に倒れそうになるのをたぶん椛さんであろう人に支えられてたまま眠りのなかにはいっていた。そのとき「ちょっと大丈夫！？」とか「なんだか可愛いなですね・・・写真に残して後で写真集でも作ってみましょうか」「「「そのときはぜひください！！！」」」そんな声がした気もするけどどうでもいいやぁ～その考えを最後に俺の意識は闇の中にしずんでいった

妖怪の山（4）

紫ｓｉｄｅ

まったくお酒を飲まされすぎたわ・・・・・
それにしても鈴がお酒に弱いなんてちょっと意外だったわね。酒瓶１本飲んでもう寝ちゃうなんて

「・・・・・いつまでこっそり覗いてるつもりかしら？」

私が声をかけたほうからあらわれたのは

「あら？いつから気づいてたのしら。紫」

「もうしわけありません。紫様」

幽香と藍があらわれた

「もう大丈夫なの？」

「えぇ。あれくらいならもうなれてるわ」

あれでもう大丈夫って・・・・それよりも

「・・・・幽香。少し聞きたいことがあるのだけどいいかしら？」

「・・・・・・今日鈴が使った術と鈴の過去について？」

「紫様それは、どうゆうことですか？なぜ過去についてなど」

今日鈴が使った術は、よくはわからないけど「奪う」ただそれだけじゃない気がしてならない。それにあの術で作りあげた世界は、ただただ寂しさ、悲しさ、そして何かを求めているような感じがした。だから私は、あの子の過去について気になった。さっき鈴が天狗達に簡単に過去を言ってたけどあれは何かを隠した感じがあった。

「・・・・・・・・・・・・・」

幽香がめずらしく迷っているようだけど。あの幽香が悩むなんて・・・

「・・・・・お願い少しでもいいから話して」

「・・・・・・・・私からもお願いします。」

藍が私の隣にきて頭を下げた。私も同じく頭を下げた・・・・

「・・・・・・わかったわ。でも、私も全部を知っているってわけじゃないけど。知ってることは話してあげる」

「まず、あの術についていだけど前鈴に聞いたけど基本は「奪う」だけどただ奪うだけじゃないの奪った後、任意で奪った能力や力を自分に書き足すことができるということ。後もう一つだけど・・・・これがこの術で一番危険な力だと思うわ・・・・」

奪った能力を自分の能力として書き込むですって！？それにこれ以上に危険な力って何なのよ・・・

藍は、少し納得しているような目をしてるけど

「あの術の最後の効果だけど・・・・・・名前のとおりで己の経験した悲しみ、憎しみ、憎悪、そういった負の感情を相手に流し込むことができるのよ。それと鈴自身の感情じゃない場合は敵と認識した者の記憶から無理やりにその記憶を再生させて・・・・壊すわ。それが忘れたい記憶や忘れている記憶でも関係なしにね」

あれがそんな効果を持っていたなんて・・・・・それに奪った物を自分のもとして書き込めるってのもすごいけど最後の効果は、絶対誰も防げもしない攻撃だろう。誰であろうとも忘れたい記憶と言うものはある。それを無理やり再生して壊す。たぶんこれで精神は簡単に殺せるわね・・・・でも、何であの子・・鈴はこんな術を使えるのだろうか

「幽香もしかしてだけどこの術にかんしても何か鈴の過去に関係があるの？」

「・・・・それは、わからないわ。私もそこまで聞いてない。いえ、聞けないわよ・・・・・私が始めて会った時鈴の目から悲しみを感じたのよ。それに鈴が使ってる翼も剣や盾も全部自分の感情を武器化してものよ」

自分の感情を武器化？え？あの翼も感情？そうだとしたらあの子はほぼ常時感情をさらけ出しているの？そんなことをすれば普通の人間であればすぐに壊れてしまます。でも、鈴はそれをまだ人間だったころからやっていたことになる・・・・

「・・・・何で、あの子はそこまで自分を苦しめるようなことをするのよ。そんなことをすれば自分が壊れるだけじゃない！」

「・・・・鈴に前私も紫と同じことを言ったわでもねそれを鈴は、笑って「俺は絶対壊れないよ」って言ったわ」

「！！！っでも「紫様、あの子がそう言ったのならそうなんでしょう」・・・・藍あなた」

そう言うと藍は、白狼天狗が抱えていた鈴を優しく受け取りこっちに戻り鈴に膝枕をしそのまま話をしはじめた

紫ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

藍ｓｉｄｅ

私は、鈴の髪をかきわけながら見た目はその辺にいる子供なのにな

「この子はたぶんただ寂しかっただけだったのだと思います。さっきの術の効果もそのせいでそのようなものになってしまったのでしょう。ずっとずっと長い時を生き孤独の中だったのでしょう」

私は、ただただ目の前で眠る鈴から感じた私の考えを言葉にしていく

「どこにでもいる子供なのに、誰にも理解されない誰にも理解されようともしなかったそれがこの子の本来の感情なのかもしれないですね。人一倍心が弱いこの子の・・・・」

私が言い切ると鈴の穏やかな寝顔が見えた。そして、それを見た。紫様達も何か思ったらしく穏やかな顔をしまた、杯をとり酒を注ごうとした。それを風見幽香がその酒を取り杯に注いだ。そしてその

反対のやっている。私も紫様もたぶん風見幽香も悲しみや孤独についてはよく理解してるつもりだと思う。いや、理解しているなんていえない・・・言ってはいけないな・・・なら、私は少しでもこの子の鈴の穏やかな寝顔を守ろう・・・たぶん紫様達もそう思ってるとおもう。

「・・・・藍あなたも飲みなさい」

紫様が杯を私に渡し酒を風見幽香が注いだ

「紫様・・・・・」

「・・・・紫。私は、鈴のことが好き・・・だから私はこの子から悲しみが少しでもなくなるようにするわ。」

「あら、私も鈴のこと気に入ってるのよ。でも、この子の悲しんでいる所なんて見たくないわね・・・藍、あなたもそうでしょ」

「はい、私も鈴の事が好きです。だから・・・・この穏やかな顔を守ってあげたいです」

「ふふふふっ。なら手は抜かないわよ？」

「望むところよ（です）」

そういい私は受け取った。酒を飲んだ。

藍side out

帰宅

俺は、久しぶりに昔の夢を見た。俺がまだ転生する前の夢・・・・俺が一番幸せだった時の記憶の夢とそして・・・・俺の幸せだった時間が壊れた時の夢・・・・俺が壊れた瞬間の夢・・・・なぜまたこんなものを見なければならいんだ。もう、あの時の場面を見たくない。

そう思うと誰かが俺を起こそうとしてきた

「鈴、そろそろ起きないか」

その声の主がまだ俺はわからないが、その主のにおいを鼻で嗅ぐととてもおちつく感じがした。俺は、まだ眠たげな目をあけると俺は今自分がどういう状態かがわかった。俺は、藍に膝枕をしてもらっている状態で目の前には藍の顔があり微笑んでいる。っというかなぜに藍がここにいるんだ？きたのは俺と紫だけだったはず

「え～っと「おはよう。鈴」・・・おはようございます」

俺が若干混乱していると挨拶をした

「え～っと藍さん・・・俺なんで膝枕してもらっているのでしょうか？後確かここに来たのって俺と紫だけでしたよね？」

「なんだそのことか？簡単なことだ。まず私がここにいることだがあの後私と幽香でここまで来ただけだよ。膝枕については鈴が昨日酒を飲んでそのまま寝てしまったからやったでだが？」

さも当然のように言わないでほしいよ

そういえば幽香も来てるっていってたけどどこにいるんだろう。
俺がそう思い体を起こして辺りを見るが幽香の姿はどこにもなくそして回りには酒を飲んで寝ている死屍累々な者が転がっている。

「そうだった。鈴、紫様が先に帰っていて言いと言っていたぞ？幽香は先に帰ったようだが」

「そうなんだ。わかった、じゃ俺は先に帰ることにするけど藍は紫をまつの？」

「いや、私も戻っていていいと言われているから戻るよ」

なら、戻るか。俺は、翼を広げ藍の後ろに回り肩につかまる形をとった。こうでもしないと俺の速度にたぶんついてこれないかもしれない
藍は少し顔が赤くなっているがなんでだ？それじゃ

「じゃ、行きますよ？」

「あ、あぁ／／／／／」

その答えを聞くと同時に俺は翼を羽ばたかせ家に向かい加速しながら飛んだ。
そういえば固有結界で”奪った”能力は便利そうなものだけ使えるように書き込んだけどまだつかい方を試していないからいきなりスキマとか使ってミスしてもやっかいだから使ってないけど。スキマが使える様になったら俺が前から欲しかった物を収納することができる能力だからしっかりとやろう。これでかなりの種類の薬がしまえる。後いくつか使えそうな能力があったけどこっちはまた後でいいか・・・そんなことを考えていると家が見えてきた。そういえ

ば家って宴会とかする時の場所とか欲しいな・・・畳の部屋が家にないからそう思うんだろうな～～　はぁ～畳が懐かしいなぁ～

「っと到着です」

「・・・・鈴、さすがに早すぎだ。」

そう言う藍は少し疲れていた。ちょっと速度だしすぎたか？

「鈴様、お帰りなさいませ」

「「「「お帰りなさいませ」」」」

その声が聞こえてきたほうを見ると鹿角と他自動人形と睡蓮が出迎えてくれた

「みんなただいま～でも、帰ってそうそうだけど少し俺は図書館に篭るから」

「ｊｕｄ．わかりました。では、藍様は少しお疲れのようですしお部屋のほうへご案内しますので少しお休みなられてはいかがでしょうか」

「あぁ。そうさせてもらうよ」

「ｊｕｄ．では、こちらへ」

藍はそういうと鹿角について行った。

「あ、そうだ。睡蓮、図書館に後でお茶もってきてもらっていい？」

「わかりました。主それと翠華と妹紅がまた、天照達の所に行っておりますので。しばらくは戻ってはこないと思います。では、後ほどお茶をお持ちしますので」

「またか・・・最近よく向こうに行ってるけど何してんだろうなぁ・・・ま、いいか」

俺は、そう思い図書館に転移した。俺が図書館に来た理由は、俺はいつも転移するときは単体でならできるが2人とかになるとできないのでそろそろ転移用の装置を作って魔法世界やこんかいなら妖怪の山に設置しておけば後々役に立つはずだ。そう思ったので俺は図書館にある転移に関する本がある場所まで来たが久しぶりに見たがまた、ほんの数増えてる。ここの本は常に増え続けているなぜなら神様のおじいちゃんズによって他の平行世界にある書物がどんどんこの図書館に送られてくるしかも全部原本でだ・・・・最初は禁書とか魔法書ばかりしか増えなかったが最近は普通に小説や童話といった物まで増えている。暇つぶしになるのでこれは割とありがたい。けど・・・武器庫というか宝物庫的な場所においてある物まで増えていた・・・どこかの完成型変体刀があったのを見たときはさすがに胃が痛くなった。その近くにあった手紙をみたら「四季咲って苗字なんだからその刀を持ってないとだめじゃろ」って書いてました。これは、俺が悪いのか？俺が四季咲にしたのが間違いなのか！？普通は喜ぶべきなのかもしれないが俺はもう喜べないよ・・・・

「っとそんなことはさておき早く資料になりそうなものをさがさないとな」

はぁ～この図書館とは別にそろそろ次の図書館創るか・・・・さら

に地下にやばい書物を置けばちょうどいいか～ま、それについても
これがひと段落してからにするか。そう思い俺は本を探し始めた

帰宅（2）

俺は、睡蓮にお茶を頼んだ後すぐに図書館に行き転送装置に関しての資料になりそうな本を片っ端から探しているんだけど改めてここの図書館の中にある本の多さに気づかされた・・・すでに増えすぎて本の山がすでに１０個近くできてる（天井に届いてるよ・・・・）これは、そろそろ増築考えないと図書館が使用不可能になるかもしれん・・・・

そんなことを考えながら俺は、探してきた本を図書館の真ん中に置いてあるテーブルに置きそのまま近くにあった椅子に座りながら持ってきた本を読み紙に必要そうな部分を書き写しながら睡蓮がいつ持ってきてくれたのかお茶がおいてあったたぶん、集中しすぎて気づかなかったようだ。

「ふぅ～。これなら何とかなるかな。でも、誰か手伝ってくれる人いないかな～またフェイトに手伝ってもらうか？」

そう考えながらお茶を飲んでいると

「主。紫様がお戻りになられました。それとは他に何名かお連れがいるようです」

ん？何人か連れてきたってことは俺が頼んだ雇いたいって件の人かな

「それじゃ、すぐ行くよ」

そのまま俺は、お茶を全部飲み干し紫のいる所に向かった

そういえばまだ藍は寝てるのかな？そんな考えがでてきたがま、いいかと思い紫を待たせている部屋に着きドアをあけると

「あらやっときたのね鈴」

紅茶を飲みながら笑顔で話してくる紫

「あやや。この家みたことない作りですね！！」

すごい興味津々で写真を撮っている文さん。すごい目がキラキラしてるよ・・・

「文さん。ちょっとは落ち着いてくださいよ～あ、鈴君こんにちは」

文さんのテンションにちょっと疲れているような椛さん。「

「あ、こんにちは。椛さん」

この二人のほかに後一人いる・・・・

「ここすごいね文！今まで見たことのない技術の物まであるよ！！」

「そうですね！にとりさん、これは興味がすごいわきますね！」

これは、なんとタイミングがいい人が来てくれた！この人なら俺の手伝いをしてくれそうだ！

「っとこんにちは、文さん。そちらの方は、初めまして。ここの家の主で四季咲　鈴です。よろしく」

ちゃんと挨拶をしておかないとな

「あややや。こんにちはです。鈴君」

「はじめまして！私は河城にとり！この家の技術ってすごいね。後でいろいろ見せてもらっていいかな？」

「そんなことなら別にかまいませんよ。あ、もし何ですけど今転移装置の開発をしてるのですけどもしよければお手伝いをお願いできませんか？」

「え！もちろんだよ！なんだかすごい面白そうだし！」

あ～やっぱりにとりさんは今の俺と同士だな・・・・そう思いお互い握手をした。なぜか文さんが写真を撮っている。うん、後でその写真をもらおう初めての同士との握手の瞬間写真（マッド的な）

「あ～鈴そろそろいいかしら？」

紫がなぜかジト目をしながら俺の事を見てきた。なぜか椛さんと睡蓮からもそんな目で見られているが俺が何かしたか？ま、それは気にしないで

「ああ、ごめん紫」

「それじゃ、今回のことについて簡単に説明するわね。まず、鈴の希望の人を雇いたいって話だけどこれは向こうからの派遣ということになったから衣食住だけでいいってことになったわ。後何かがあった時は連絡すればすぐに増援を送ってくれるそうよ」

マジですか？でも、最低限何か俺からもお返ししないとなんだか悪いような気がするな

「紫それは、俺にとってすごいありがたいけどもらってばかりだと何だか悪いから何かお返しをしたいんだけどどうすればいいかな？

「そうね。鈴がそういうなら「なら、たまにここで宴会させてもらえればいいと思いますよ？」あら。それいいわね」

文さんが提案をしてきた。それに対して紫はいいといっている

「宴会ですか。俺としてもいいと思いますけど。宴会するなら畳の方がいいですよね？文さん」

「そうですね。そっちのほうが落ち着いて騒げますし」

「なら後で畳の大宴会場を作らないといけないですね。ここ畳がある部屋って個人の部屋だけなんですよ」

この家で畳がある部屋は、俺、睡蓮、妹紅の部屋だけだ。後はすべて畳がない。この3部屋もかなり無理やり畳をいれたんだけどね

「なら。その宴会場作るのは私達がやるよ！河童の技術力があればすぐにでも建ててあげるよ！！」

宴会場を建てることを買って出るにとりさん。マジでそれは助かります。

「それじゃ、お願いしますねにとりさん。あ、もうひとつ頼みたいんだすけどいいですか？」

「ん？何かな？」

「できれば本をしまえる場所を作って欲しいんだけどいいかな？」

「そんなことなら任せてよ！とりあえず、仲間を呼んで急いで造ってあげるよ！！」

すごい頼もしいです！

「それじゃ、宴会の話はここまでにして。鈴はこの家の警備が欲しいってことだったけど具体的にはどんなことをするのかしら？」

「そうですね。私は、どんなことをすればいいのかまだ聞いてないですし。鈴君説明してもらっていいかな？」

「わかりました。そうですねここの警備をしてもらうにあたってですけど基本はこの家の周辺１ｋｍを結界が張ってるのでその結果を抜けて来た人だけ対処してくれればいいです。その場合の処理の方法はお任せします。結界を抜けれるものは一般人ではないはずですからそれと結界に人が近づくと世界樹が教えてくれるので」

「わかりました。それまでは、そうですね私も少し家事のお手伝いとか鍛錬をしてていいですか？」

「ぜんぜんかまいませんよ」

「なら私も同じってことでいいかな？」

「文さんもそれでいいですけど、文さんと椛さんにとりさん何か必要なものとかあったら言ってくれれば用意しますから」

「わかりました（（はい！））」

「それじゃ、私は少し疲れたから部屋を貸してもらえるかしら？それと藍はどこにいるのかしら？」

「あ～藍も疲れたようで部屋で寝ているみたいだよ。睡蓮、紫に部屋を用意して」

「わかりました。主、では紫様こちらに」

睡蓮が紫を連れていくのをみると

「それじゃ、この家にいる人たちを紹介するよ」

俺が3人に対してそういうとさっきまで後ろに控えていた鹿角とヘルマンを呼んだ

「はじめまして。私は鹿角といいます。この屋敷でメイド長をしております」

鹿角が挨拶をし3人も挨拶をしそのあと

「私の名は、ヴィルヘルムヨーゼフ・フォンヘルマンだよ。気軽にヘルマンと呼んでください。少女達後ついでに種族は悪魔だ」

そういうとどこから取り出したのかバラを持っていた。何で持ってるんだ？というかどこから出した？そんなことを思っていると。バラを持って紳士の様な笑顔をしているヘルマンがいきなり・・・・・壁を突き破ってきた光に吹き飛ばされた・・・・へ？的な顔をしている3人は何が起きたのかわかっていないようだが俺と鹿角は理

解している。はっきり言ってまたか的な顔をしている鹿角のは額に手を当ててやれやれと頭を振っている。

「・・・・ヘルマンまた勝手に私の育っている花を取ったわね」

壁に空いた穴から幽香がでてくる。まったくなんで毎回壁を壊すかな・・・・・

「ははははっは。すまなかったねお嬢さん」

平気そうな顔をして声をだしているヘルマンだがはっきり言って顔が青ざめてますよ・・・・

「もう許さないわ・・・・・消えなさい・・・・・」

幽香がそういうとマスパが撃たれた・・・・そして、さらに壁に穴が空いた・・・・

「お嬢さんさすがにそれはきつよ・・・さすがに今回は死ぬかと思ったよ」

ヘルマンはミステルティンを盾にして何とか耐えている・・あれなかったら消滅してのか？

「っチ！」

舌打ちしたよ！

「なら次でトドメよ！！」

「・・・・・・・いい加減にしなさい。」

幽香がそういいヘルマンが剣を構えると鹿角の冷たい声がその場を完全にしはいし静まり返った。そして文さん椛さんにとりさんは少し怯えているようで鹿角をみている

「か、鹿角私達が悪かったわだから落ち着いてね？」

「そ、そのとおりだよ。鹿角殿一度冷静になろう。な？」

二人が鹿角を落ち着かせようとするがときすでに遅い

ｊｕｄ。私はもう十分に落ち着いてますよ。その上であなた達二人に足ししてきちんと躾け？お仕置き？調教をしっかりとしないといけないと判断しました」

鹿角の目から光が消え鹿角は黒鍵を袖からだし二人に襲い掛かった。そしてそのまま二人を捕まえて外にでていってしまった。

「あ～えっと何か質問とあります？」

3人にたいして俺がそういうと3人はすごい勢いで首を振った

「「「（鹿角さんは絶対に怒らせちゃだめだ！！」」」

3人の心がシンクロした・・・・

「なら後で部屋とか決めるから少し落ち着きますか」

そういい近くにいたほかの自動人形に別の部屋にお茶を用意してもらいそっちへ移動した。
その移動する途中で悲鳴が聞こえた気がするけど気のせいだ・・・・
いや気のせいであって欲しいとおもいながら移動した

帰宅（3）

あれから早速にとりさんが仲間のカッパを紫経由で連れてきたと思ったらすぐに工事を開始した。はっきり言って俺は、カッパの技術力をなめていた・・・・だってさ、何で数時間位しか経ってないのに館の奥に宴会会場ができてるししかも人数は１００人位なら入りそうな広さでちゃんと館とは廊下でつながってもいたし・・・それだけならまだしもさらに俺の注文した図書館もできていた。場所は、これはまた地下だけど前からあった図書館の倍以上の広さになってこの第２図書館は紫とにとりさん達による共同作品らしいそのせいで第２図書館の空間がすごいことになってるよ・・・・・空間が拡張されてるよ・・・紫とにとりさんに説明してもらおうと思い二人を見るとなんだかとてもいい仕事したといった感じの顔をしながらお茶を飲んでる。近くにいるカッパ達もみんなそんな顔をしていた・・・

「紫。にとりさんこの図書館なんだか空間が拡張されてるみたいだけどなにしたの？」

その言葉で二人はこちらをみると自信満々に説明をはじめた

「ここの本って自動的にどんどん増えてるみたいだったから、まず私達カッパで前からあった図書館位の広さのを作って」

「その後私が、能力を使って境界をいじって広くしただけよ。あ、鈴後でここのお礼が欲しいってわけじゃないのだけど今度私の友人にあって欲しいのだけどいいかしら？」

紫の友人って西行寺幽々子だよな？だったらまだこの時期なら人の

ままかな・・・そのことを考えていると紫がどうしたのかといった顔をしてきので

「ああ。そんなことならぜんぜん構わないよ、後で詳しいことを聞かせてくれ。それとにとりさんにはこんないいものを造ってもらったですし俺の研究室の隣の部屋が空いてましたのでそこをにりさんの研究室として差し上げたいのですけどどうですか？」

「え！！本当に！！ありがとうそれはすごくうれしいよ！」

めっちゃ喜んでくれた。うんうんやっぱりうれしいね～

「わかったわ。ありがとう、鈴後で詳しいことを話すわね」

紫も表情をあまり変えていないがうれしそうな顔をしているような気がした

「そういえば、すごくいまさらだけど。私って鈴さんのことなんて呼んだらいいのかな？失礼かもしれないですけど神様って言われてもピンときませんし・・・それに凄く私達カッパと似た感じの思考というかうまく言えないですけどそんな感じがしたので」

「あ～別に鈴でいいよ。俺も威厳とかその辺ないの知ってるしそれに変に様付けされたりすると何だか壁つくられたって感じそうだし。にとりさん達は俺としては盟友だと思ってますよ。だってそんな技術を持ってるなんて俺はすごい驚きましたしこの館の中とか俺の知り合いの中だとこういったことのわかる人いないですしね」

「そっか。ならこれからは鈴って呼ぶから鈴も私のことはにとりでいいよ。私達にとってもカッパの技術力のことほめてもらえるなん

て思わなかったよ。普通なら変な目でみられたりするしね」
その言葉に周囲のカッパ全員が頷いた
「でも、鈴は私達のこと盟友って言ってくれたからすごいうれしいよ！」
その言葉を言うと俺とにとりは握手をし回りのカッパは歓喜の声をあげる者拍手をする者さまざまいた
「あやや、それでは早速こんないい日を記念に宴会をしましょうか」
そこにはさっきまでいなかった文さんと椛さんがいた。文さんの言葉に賛成したのか「「「宴会！！宴会！！！宴会！！！！」」」といった言葉を連呼する
「文さん！？いきなり何言ってるんですか？鈴君にちゃんとその辺とか聞かないとだめじゃないですか」
「え～だってさっき会った女の人は宴会やるっていってましたよ？」
え？さっき会った。女の人で宴会をやる？この家でそんなこというやつってあいつしかいないけど・・
翠華
「あ～文さんその人ってどんな人でした？」
「そうですね・・・・確か鈴君みたいな銀色の長い髪で巫女服を着たかなり霊力が高い女の人でしたよ」
「はぁ～。まったく清明のやつ何勝手に宴会することにしてるんだ

よ。準備だってまだ「準備なら、もうはじめてるよ鈴」」

俺の言ったことに答えるように文さんと椛さんの後ろから答える清明

「いつここにきたとかもだいぶきになるけど。準備をもうはじめてるって何でそんなに準備いいんだ？後お前今までどこにいたんだ？」

「それはね。さっきそこにいるカッパの一人に聞いて宴会場を造ってるって聞いてその後すぐに鹿角達に言って歓迎&増築祝いの宴会の準備を頼んだ。後、私が今までどこにいたかだけどちょっと新しい式神を捕まえに行ってた」

そういうとなんかすごいボロボロの烏？らしきものをだしたがそれは烏ではなく・・・

「それじゃ鈴に紹介しておくよ。神社にいたヤタガラスの”ミルトン”だよ！ほらミルトンも挨拶しなさい！」

「・・・・ヤタガラスのミルトンだ。この者の式神にされたものだ・・・・」

うん。どうやって式神にしたのかがよくわかったよ。

「あ～俺の名前は四季咲　鈴だ。そのなんだ、理不尽だと思うけどがんばってくれ」

俺がそういうとミルトンがわかってくれたかという表情をした

「それじゃ、私はお酒の準備とかしてくるからじゃあね～」

そういうとミルトンを掴んで清明は出て行った。

「なんていうか凄い人ね」

紫がそういうと周りにいる人全員が頷いてでていったヤタガラスのミルトンにたいして合掌をした・・・というミルトン神社にいたんだよな？それ連れてきたってことは誘拐に近いことしたのかよあいつは。あいつは本当にいろいろとやってくれるな・・・特に規格外のことだけ、前は神鳴流にすごい要求するわ、封印してあった睡蓮の封印場所を簡単に吹き飛ばす、あまつさえ今度はヤタガラスの誘拐まがいなこと・・・はぁ～俺はそう思うと頭痛がした気がした。そのときの周りからの視線がすごい哀れみを感じる優しい目だった・・・・とりあえず宴会の準備俺もするか、そう思い宴会場に俺、紫、文さん、椛さん、にとり他カッパ達で移動した。

お酒の飲みすぎには注意しましょう

あの後宴会の準備を手伝いにいこうとしたけど清明に頼まれていた鹿角達自動人形、睡蓮、ヘルマン、藍によりすでに準備が終わっていた。

ま、それに関してとくに何もなかったけどそれですぐに宴会が始まった。そこからはある意味地獄を見た感じだ。宴会に参加している人？達はとにかく酒を飲んでいる。そしてなぜか呼んでいないはずの鬼の2人がいたのだが

「あら。やっぱり宴会だから呼んでみたけれど何かまずかった？」

紫がスキマを使って連れてきたみたいでした。

俺は、それを聞くと納得した。そして酒ダルごと飲んでいる2人を見なかったことにしてほかの方へ視線を向けると文さんと椛さん、にとり達を見つけたのでそっちのほうへ移動して鹿角や睡蓮達が作ったおつまみを食べながら文さんがお酒を勧め俺に飲ませようとしくるが椛さんがそれを制する感じでそれをそししていたが横からにとりがお酒の入った杯を持ってきて俺に渡してきたので俺はそれを飲んだ。それを見た見た文さんは

「私のお酒は飲めなくてにとりさんのは飲むんですか！？」

文さんがちょっと酔った状態でそう言ってきた。

「ちょっとにとり！鈴君にお酒飲ませないでよ！！」

椛さんがにとりに対してそういったけど

「え～だってせっかくの宴会だしお酒飲ませてあげたし。それにまだ鈴も余裕そうだし」

「「へぇ？？」」

二人が俺を何で？って感じで見てきた。確かにちょっと前まで酒瓶を1本飲んで寝てしまったからしかたないよね

「あ。ある程度まで飲まない限り酔わないように能力使って大丈夫にしたんですよ」

俺は、宴会が始まると同時に能力を使いあの鬼の二人ほどってわけじゃないけどある程度まで飲まない限り絶対に酔わないように上書きした。

「あ～なるほど。納得しました。ほんの1日2日で酒瓶1本飲んだだけで寝てしまった子が普通に飲めるなんて不思議でしたけど。能力使ったんですか」

なぜか目がキラキラ？いやギラギラしてるけど何でだ？

「そうだったんだ。・・・・・・でも、ちょっと残念かもあの時の鈴君かわいかったのに」

なぜかがっかりしている椛さん

「あははは！！ならもっと飲めるね鈴」

そういいながらまた俺にお酒を注ぐにとり

だけど俺は、ほかの人たちも見ておきたかったから注いでくれたお酒を飲みまた違うところへ行こうとして後ろを見るとすでに１０樽ほど空になったのか詰まれていた。その近くにいた鹿角を見るとなんだか様子が変な感じがした。何で？ってだってヘルマンと他の自動人形達が鹿角に対してちょっとおびえたような感じで鹿角が持っていた空になっているグラスにワインを注いでいる。それを無言で飲みほしまた注いでまた飲み干すの繰り返しをしている。そして鹿角の隣には空になったワインの入っていたであるビンで山ができそうになっていた。どんだけだよ・・・

その後俺は、紫、藍、幽香を見つけたのでワインを持ちながら３人のほうへ行った

「あら。鈴、お酒飲めるようになったんですってね。所でそのお酒はなにかしら？」

紫が俺の持っているワインに興味を示してきたのでグラスにワインを注いで渡すと

「あら。このお酒香りがいいわね。それにとってもおいしいわ。これって果物でいいのかしら？」

紫は気に入ってくれたみたいだ。幽香にはもともとこれは好きだったから一番いい物をとってきたのでかなりご機嫌だ。藍は、もうちょっと甘くてもいいという評価をもらった。改良の余地はありっと

「っとそうだったわ。鈴さっき頼んだことについてだけど」

「あ～。紫の友人に会うって話だったね」

「えぇ。とりあえず3日後でいいかしら？」

「別にいいよそれで」

「そう。ありがとう」

そういうと紫はまたワインを飲み始めた

「そういえば、鈴。少し気になったことがあるんだがいいか？」

俺が何って感じで藍のほうを向くと

「鈴は神だが鈴の社はどこにあるんだ？この家の近くには社はなかったはずだが」

そういえば俺って社ないよな？いやたぶん月に行けばあるのかもしれないけど地上には社なんてないな

「そういえば俺って社なんてないな」

そう答えると藍と紫なんでか幽香までびっくりしていた

「普通神ならば。社を持っているものだろう、特に鈴のような強い力を持っている神は」

藍がそういうと紫と幽香が頷いていた。でも、実際社なんてなくても信仰があればいいみたいだし特にいらないでしょうと答えるとそれだと威厳がないぞって言われました。確かに神様ぽく威厳とかあったほうがいいのはわかるけど俺の見た目だと威厳とか0だしさ。そういうとだからせめて社くらいあったほうが威厳もあるだろうと

言われた

「それにせっかくこの家には巫女？がいるんだ。また、河童達に立ててもらえばいいだろう」

巫女？って清明のことだけどさ、あいつ服装は完璧に巫女で今のところあいつの位置づけだと早苗と似たような立位置なんだよね。お爺ちゃんズのおかげで神にはなってるけど一応人の枠にまだ入ってるしらしいだから一応俺の巫女ということになるらしい。ちゃんと不老不死になってるけどこれは俺が死ねば不老不死じゃなくなるらしだけど俺は神になってるから基本死ぬことはないし神殺し用の武器や天の鎖的なものでも俺は無力化してるので実際まず死ぬことはない

それにしても

「清明が巫女をまじめにやってるところは俺も見てみたしな。せっかくだし社造ってもらおうかな」

そう言うと3人も興味があるみたいな顔をしている。そして肝心の本人はというと鬼の二人となぜか飲み比べをはじめていた。うん、家にある酒確実に今日一日で全部なくなるな。俺はそう確信した。

「何々鈴また私達に造って欲しいものがあるの？」

にとりが話を聞いていたのか近くにやってきた

「俺に社がないってことを3人に話したら造ったほうがいいって言われてね。それでいい機会だし俺も社を建ててみようってことになったんだよ」

「そうなんだ。なら任せてよ最高の社を造ってあげるから！」

目がすごいキラキラしてるね

でも、場所どこにすればいいのかな。社建ててもいいけど確か原作知識の中に将来この近くに神社建つみたいだからな。どうすればいいのかわからん。ってそういえば知識の中だけだけどたしか図書館島ってのが建つはずだそんでその下の地下にいいスペースがあったはずならそこに建てればいいんじゃない？後、地下に作っておけば世界樹の魔力が貯めれる所にもなるしそれを利用して転送装置を動くようにすればさらにいいはずだ。俺は、そのことをにとりに言うとかなり興味がわいたのか目がかなりマッド的な感じになっていた。たぶん俺もそれと同じ目だったと思う。そのまま俺とにとりはどこからとりだしたのかワイングラスで乾杯をしてなぜか高笑いしていた。そしてその後すぐになぜか頬を赤くして獲物を狙っているような鹿角がいた。そして手には酒瓶が2本持たれていてそれを俺とにとりに1本ずつ口に入れ飲まされた・・・

その後すぐ俺とにとりは気絶したかのように倒れた

そして酒の銘柄をみたほかの参加者達は、絶句していた

”銘酒神殺し”　”銘酒河童殺し”それを飲んだ俺達は次の日まで目を覚まさなかった

そしてそこには、いつもとはまったく違う雰囲気を出している我が家のメイド長鹿角がいて妖艶な笑みを浮かべながら俺を抱えながら笑っていたらしい・・・その後宴会場から俺ごといなくなっていたらしいけどどこで何をしていたかは謎だ

何れくるであろう遠い未来

どこかの宮殿か遺跡の中で白と黒の翼をもつ創造神と過去の大戦の英雄である者達が戦闘をしている。英雄は、夫婦剣である干将・莫耶を使い創造神ではる少年は、自身の羽と同じ色をした白と黒の剣を使い戦う。

「鈴っっっ！！！！」

「東！！！！！」

何度目の打ち合いになるの2人による戦闘の余波であちこちが崩壊している。

「なぜお前がこの魔法世界を壊そうとする！！！！！！」

「壊そうとするのではない！！！創りかえるだけだ！！！！！！」

「なぜそんなことをする必要がある！？今この世界にいる人々はどうするつもりだ！！！」

「なぜだと！？そんなの俺から大切のものを奪っていったやつらがいる世界だからに決まっているだろ！！！」

「っく！！」

「あいつらは・・・・正義を名乗り好き勝手やってきた！そのせい

でどれだけの人間が無駄な死を遂げたと思っているのだ！！！そのせいでそのせいで・・・霊亞は死んだんだ！！」

自身の周りに光弾を無数にだしそれを東に向けて撃ち込んだ。爆発が起こるが煙の中から矢が飛んでくるそしてそれが爆発をおこすがまったくダメージをうけていないようでただボロボロになっている英雄・東を見る。

そこで俺は覚めてしまったようでいつもの自分の部屋の天井を見た。どうやら夢だったみたいだがかなりリアルな感じがした。外は、まだ月がでており窓からは月の光がはいる。俺は、そのまま窓まど移動して月を見る。

「あの夢はいったい何なんだ・・・・。まるでいずれ俺があいつと殺しあいをするみたいだな・・・・」

俺はそれはないかっと考えまた、眠りについた。俺に新しい能力が追加されたことに気づかずに

”予と夢を操る程度の能力”

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8308p/

二人の転生者

2011年10月2日18時17分発行